

ふ え き ゆ う に し で ら

笛 給 西 寺 遺 跡

2 0 2 5

公益財団法人山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

序

本書は、防府市大崎に所在する笛給西寺遺跡の発掘調査記録をまとめたものです。調査は、主要県道防府徳地線道路改良工事に先立ち、山口県防府土木建築事務所から委託を受けて、令和5年度に公益財団法人山口県ひとづくり財団が実施しました。

今回の調査では、遺跡の中心となる平安時代後期から鎌倉時代の掘立柱建物、溝、土坑、流路などのほか、奈良時代から平安時代初頭の溝や土坑、室町時代の土坑や溝などを検出しました。

出土品のうち、奈良時代の獣脚を持つ三足壺は、周防国府跡などの官衙関連遺跡や寺院等で出土しており、遺跡の性格を知るうえで重要な遺物です。また、多量の土師器や瓦質土器、須恵器、陶磁器などが出土しており、地域の暮らしや社会の変遷を考えるための貴重な資料になると考えられます。

今後、この調査成果を、郷土の歴史や文化財保護に対する理解の促進、教育や文化の振興、学術研究等に広く活用していただければ幸いです。

結びに、発掘調査の実施並びに本報告書の作成にあたり、御支援、御協力を賜りました関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

令和7年3月

公益財団法人 山口県ひとづくり財団
理 事 長 木 村 香 織

例 言

- 1 本書は令和5（2023）年度に実施した笛給西寺遺跡（山口県防府市大崎地内）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は公益財団法人山口県ひとづくり財団が山口県防府土木建築事務所の委託〔令和5年度契約名：令和5年度主要県道防府徳地線単独道路改良（県道）工事に伴う埋蔵文化財調査業務委託第2工区、令和6年度契約名：令和6年度 主要県道防府徳地線道路改良（防災安全交付金・特・国土強靱）工事に伴う埋蔵文化財資料作成業務委託 第2工区〕を受けて実施した。
- 3 調査組織は以下のとおりである。

調査および報告書作成主体 公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター

令和5年度

調査	調査第二課 文化財専門員	鈴木 卓
	調査第二課 文化財専門員	井上 広之
	調査員	野坂 明日美

令和6年度

報告書作成	調査第二課 文化財専門員	鈴木 卓
	調査第二課	河村 吉行
- 4 本書の第1図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図「防府」を複製使用した。第2図は「防長風土注進案 第九集 三田尻宰判上」を複製利用した。第3図は山口県防府土木建築事務所提供の地図を元に作成した。
- 5 本書で使用した方位は国土座標（世界測地系）の北で示した。国土座標の単位は m であり、標高は海拔高度（m）である。
- 6 本書で使用した土色の色調標記は、農林水産省農林水産技術会議事務所（監修）『新版標準土色帖』Munsell 方式による。
- 7 図版中の遺構・遺物番号は挿図の遺構・遺物番号と対応する。
- 8 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

S I：竪穴建物 S B：掘立柱建物 S A：柵列 S K：土坑 S D：溝 S P：柱穴
S X：性格不明遺構
- 9 出土遺物実測図について、断面黒塗は須恵器を表す。
- 10 本書の作成にあたり、出土した獣歯の鑑定については土井ヶ浜・人類学ミュージアム 沖田絵麻氏にご教示をいただき、その成果を第IV章に掲載した。
- 11 出土した炭化材の放射性炭素年代測定及び樹種同定については業者に委託し、その成果を第IV章に掲載した。
- 12 本書の作成、執筆は、調査・整理担当者が分担して作成し、編集は鈴木が担当した。

本文目次

I	調査の経緯と概要	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査の経過と概要	1
II	遺跡の位置と環境	3
1	地理的環境	3
2	歴史的環境	4
III	調査の成果	7
1	1区の遺構	7
(1)	調査区の概要	7
(2)	主な遺構	10
2	2区の遺構	12
(1)	調査区の概要	12
(2)	主な遺構	14
3	3区の遺構	15
(1)	調査区の概要	15
(2)	主な遺構	15
4	4区の遺構	39
(1)	調査区の概要	39
(2)	主な遺構	39
5	出土した遺物	51
(1)	1区の出土遺物	51
(2)	2区の出土遺物	53
(3)	3区の出土遺物	54
(4)	4区の出土遺物	73
IV	自然科学分析	83
1	笛給西寺遺跡出土の獣骨について	83
2	笛給西寺遺跡における放射性炭素年代 (AMS 測定)	86
3	笛給西寺遺跡における樹種同定	91
V	総括	95

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡の位置と周辺の遺跡	3	第 31 図	4 区遺構配置図	40
第 2 図	『大崎村荒圖』『防長風土注進案』 第九卷 三田尻宰判 上	4	第 32 図	4 区土層断面図(1)	41
第 3 図	笛給西寺遺跡調査範囲図	7	第 33 図	4 区土層断面図(2)	42
第 4 図	1 区遺構配置図	8	第 34 図	4 区土層断面図(3)	43
第 5 図	1 区土層断面図	9	第 35 図	4 区遺構実測図	44
第 6 図	1 区 SI01 実測図	10	第 36 図	1 区出土遺物実測図(1)	51
第 7 図	1 区溝実測図	11	第 37 図	1 区出土遺物実測図(2)	52
第 8 図	2 区遺構配置図	12	第 38 図	2 区出土遺物実測図	53
第 9 図	2 区土層断面図	13	第 39 図	3 区出土遺物実測図(1)	55
第 10 図	2 区土坑遺物出土状況実測図	14	第 40 図	3 区出土遺物実測図(2)	56
第 11 図	3 区 A 遺構配置図(1)	16	第 41 図	3 区出土遺物実測図(3)	57
第 12 図	3 区 A 遺構配置図(2)	17	第 42 図	3 区出土遺物実測図(4)	58
第 13 図	3 区 B 遺構配置図(1)	18	第 43 図	3 区出土遺物実測図(5)	60
第 14 図	3 区 B 遺構配置図(2)	19	第 44 図	3 区出土遺物実測図(6)	61
第 15 図	3 区掘立柱建物・柱列位置図	20	第 45 図	3 区出土遺物実測図(7)	62
第 16 図	3 区土層断面図(1)	22	第 46 図	3 区出土遺物実測図(8)	63
第 17 図	3 区土層断面図(2)	23	第 47 図	3 区出土遺物実測図(9)	64
第 18 図	3 区掘立柱建物実測図(1)	24	第 48 図	3 区出土遺物実測図(10)	65
第 19 図	3 区掘立柱建物実測図(2)	25	第 49 図	3 区出土遺物実測図(11)	66
第 20 図	3 区掘立柱建物実測図(3)	26	第 50 図	3 区出土遺物実測図(12)	68
第 21 図	3 区掘立柱建物実測図(4)	27	第 51 図	3 区出土遺物実測図(13)	69
第 22 図	3 区柵列実測図	28	第 52 図	3 区出土遺物実測図(14)	70
第 23 図	3 区 SD01 実測図	30	第 53 図	3 区出土遺物実測図(15)	71
第 24 図	3 区 SD02・03 実測図	31	第 54 図	3 区出土遺物実測図(16)	72
第 25 図	3 区 SK29 集石出土状況実測図	33	第 55 図	4 区出土遺物実測図	73
第 26 図	3 区土坑遺物出土状況実測図(1)	34	第 56 図	遺跡の位置	83
第 27 図	3 区土坑遺物出土状況実測図(2)	35	第 57 図	SK43 獣骨出土状況(東から)	83
第 28 図	3 区土坑遺物出土状況実測図(3)	36	第 58 図	ウシ埋納状況想定図	84
第 29 図	3 区柱穴遺物出土状況実測図(1)	37	第 59 図	SK43 出土ウシ歯	85
第 30 図	3 区柱穴遺物出土状況実測図(2)	38	第 60 図	暦年較正年代グラフ	90
			第 61 図	炭化材、木材(生材)写真	94

表 目 次

第 1 表	溝一覽表(1)	45
第 2 表	溝一覽表(2)	46
第 3 表	土坑一覽表(1)	47
第 4 表	土坑一覽表(2)	48
第 5 表	土坑一覽表(3)	49
第 6 表	土坑一覽表(4)	50
第 7 表	出土土器・陶磁器観察一覽表(1)	74
第 8 表	出土土器・陶磁器観察一覽表(2)	75
第 9 表	出土土器・陶磁器観察一覽表(3)	76
第 10 表	出土土器・陶磁器観察一覽表(4)	77
第 11 表	出土土器・陶磁器観察一覽表(5)	78
第 12 表	出土土器・陶磁器観察一覽表(6)	79
第 13 表	出土土器・陶磁器観察一覽表(7)	80
第 14 表	出土土器・陶磁器観察一覽表(8)	81
第 15 表	出土土器・陶磁器観察一覽表(9)	82
第 16 表	出土土器・石製品観察一覽表	82
第 17 表	出土土製品観察一覽表	82
第 18 表	放射性炭素年代測定結果(1)	88
第 19 表	放射性炭素年代測定結果(2)	89
第 20 表	樹種同定結果	92

図 版 目 次

図版 1	1 遠景①(佐波川河口方面から)	図版 5	1 1区西壁南側土層断面
	2 遠景②(南から)	2	1区西壁北側土層断面
図版 2	1 遠景③(佐波川左岸から)	3	1区東壁南側土層断面
	2 遠景④(東から)	4	1区東壁北側土層断面
図版 3	1 遠景⑤(北から)	図版 6	1 2区全景(右が北)
	2 調査区全景(右が北)	2	2区北壁土層断面
図版 4	1 1区全景(右が北)	3	2区東壁南側土層断面
	2 1区 SI01 完掘状況(東から)	4	2区 SK16(北から)
	3 1区 SK04 完掘状況(東から)	5	2区 SK07 集石出土状況(東から)
	4 1区 SK06 完掘状況(南から)	図版 7	1 3区全景(右が北)
	5 1区 SP15 完掘状況(東から)	2	3区近景(南から)

図版 8	1	3区 A 西壁土層断面	図版 16	1	4区全景（右が北）
	2	3区 A 北壁東側土層断面		2	4区西壁トレンチ D 南側土層断面
	3	3区 A 北壁西側土層断面		3	4区西壁トレンチ D 北側土層断面
図版 9	1	3区 B 西壁南側土層断面		4	4区東壁トレンチ C 土層断面
	2	3区 B 西壁中央土層断面		5	4区北壁西側土層断面
	3	3区 B 西壁北側土層断面	図版 17	1	4区東壁トレンチ B 土層断面
図版 10	1	3区 SB01 完掘状況（下が北）		2	4区東壁トレンチ B・C 土層断面
	2	3区 SB02・SB03 完掘状況（右が北）		3	4区東壁トレンチ E 南側土層断面
	3	3区 SB04・SB05 完掘状況（右が北）		4	4区トレンチ E-2 土層断面
	4	3区 SA01・SA02 完掘状況（左が北）		5	4区井戸・土坑完掘状況（SE01、SK03・08・16）（北から）
図版 11	1	3区 SD01 土層断面	図版 18	1	区出土遺物 (1)
	2	3区 SK29 集石出土状況（南から）	図版 19	1	区出土遺物 (2)
	3	3区 SK29 完掘状況（南から）	図版 20	2	区出土遺物
図版 12	1	3区 SK41 遺物出土状況①（南から）	図版 21	3	区出土遺物 (1)
	2	3区 SK41 遺物出土状況②（南から）	図版 22	3	区出土遺物 (2)
	3	3区 SK41 遺物出土状況③（東から）	図版 23	3	区出土遺物 (3)
図版 13	1	3区 SK43 遺物出土状況（北から）	図版 24	3	区出土遺物 (4)
	2	3区 SK43 完掘状況（東から）	図版 25	3	区出土遺物 (5)
	3	3区 SK49 遺物出土状況（南から）	図版 26	3	区出土遺物 (6)
図版 14	1	3区 SK50 遺物出土状況（東から）	図版 27	3	区出土遺物 (7)
	2	3区 SK51 遺物出土状況（西から）	図版 28	3	区出土遺物 (8)
	3	3区 SP52 遺物出土状況（南から）	図版 29	3	区出土遺物 (9)
図版 15	1	3区 SP41 遺物出土状況（北から）	図版 30	3	区出土遺物 (10)
	2	3区 SP58 遺物出土状況（北から）	図版 31	3	区出土遺物 (11)
	3	3区 SP82 遺物出土状況（北から）	図版 32	3	区出土遺物 (12)
	4	3区 SP107 遺物出土状況（南から）	図版 33	3	区出土遺物 (13)
	5	3区 SP245 遺物出土状況（南から）	図版 34	3	区出土遺物 (14)
	6	3区 SK281 遺物出土状況（東から）	図版 35	3	区出土遺物 (15)
	7	3区 SP285 遺物出土状況（南から）	図版 36	3	区出土遺物 (16)
	8	3区 SP290 遺物出土状況（東から）		4	区出土遺物

I 調査の経緯と概要

1 調査に至る経緯

防府市は、近年の自然災害の頻発・激甚化に備え、災害時の複合的な機能を発揮し得る新たな防災拠点を整備するため、佐波川右岸広域防災広場整備事業を進めている。それに伴い、山口県が防災広場のアクセス道路を整備することとなり、それに先立って令和4年度に山口県文化振興課が試掘調査を実施して、路線予定地内における埋蔵文化財の有無や範囲を確認した。その結果に基づき、事業主体である山口県防府土木建築事務所と山口県文化振興課が、発見された笛給西寺遺跡の取り扱いについて協議を行い、令和5年度に発掘調査をして記録保存を行うこととなった。そして、山口県防府土木建築事務所の委託を受けた山口県埋蔵文化財センターが、令和5年度主要県道防府徳地線単独道路改良（県道）工事に伴う埋蔵文化財調査業務委託第2工区として発掘調査を実施し、令和6年度に埋蔵文化財資料作成業務として報告書作成を行うこととなった。

調査対象地は、南側から順に1区、2区、3区として調査を開始したが、1区の南側に遺構が多く認められ隣接地にも広がることが予測されたため、関係機関の協議を経て4区として調査対象地に追加した。調査面積は、追加した4区を合わせて2,872㎡である。

2 調査の経過と概要

調査開始のための諸手続きや準備、現地確認等を行い、令和5年9月6日に重機による除草作業、駐車場整備、耕作土除去作業を開始した。3区は稲刈り後の調査となるため、1区、2区の表土除去作業を先行して実施した。それぞれ、耕作土と盤土以下の土を明確に分けて除去し、9月19日に作業を終了した。仮設事務所・倉庫・トイレを9月15日に設置し、9月19日に電気配線、仮設水道を設置、9月21日にテントを借り入れた。発掘器材の搬入は天候等で遅れ、9月26日に行った。

9月28日からは本格的に作業員による作業を開始した。まず、1区の環境整備と壁面清掃による土層断面の検出を行い、10月2日に遺構検出作業を始めるとともに、トレンチを3ヶ所設定し、地下の堆積状況を確認した。遺構検出作業が終了した10月10日からは、2区に移動して環境整備を行ったのち壁面清掃による土層断面の検出を実施し、遺構検出作業を開始した。遺構の掘り込みは、10月16日の遺構検出終了後、2区から開始した。10月23日には2区の掘り込みを終えて、1区の遺構掘り込みを開始、10月31日に終了した。掘り込みの進捗とともに、適宜、遺構の土層断面や遺物出土状況、完掘状況等の写真撮影や実測図作成を実施した。実測図の作成に必要な国土座標杭の設置は、10月24日に専門業者に委託して行った。

3区の重機による表土除去作業は、11月6日に開始した。3区は、2枚の田のそれぞれの一部が調査対象地となっているが、今回の調査地はすべて、調査後に元通りに埋め戻して地権者に返還することとなっているため、2枚の田の間にある畔を取り除くことができなかった。そこで、畔を挟んで北側を3区A、南側を3区Bとして調査した。除去した表土は、田ごとに、耕作土と盤土以下の土を明確に分けて除去した。

11月9日に3区の表土除去作業は終了したが、その遺構検出を行う前に、1区、2区の空中写真撮影を行うこととなったため、11月13日から撮影の準備を行い、11月15日に撮影を実施した。撮影後3区の環境整備と壁面清掃による土層断面の検出、遺構検出作業を開始し、11月24日に終

了した。3区では柱穴、土坑、溝状遺構等、多くの遺構を検出した。3区の実測図作成に必要な国土地標杭の設置は、11月13日に専門業者に委託して行った。

1区の遺構検出後、その状況から南に隣接する農地にも遺構が埋存している可能性が指摘され、山口県防府土木建築事務所と山口県文化振興課が協議し、新たに調査対象地を追加することとなった。これを4区とし、3区の表土除去終了後、11月13日から除草作業を開始、3区の遺構検出作業と並行して11月16日から重機による表土除去作業を開始した。耕作土と盤土以下の土を分別して除去し、11月20日に終了した。11月24日に、3区の遺構検出作業終了後、4区の環境整備と壁面清掃による土層断面の検出を行い、遺構検出作業を開始した。11月29日から4区の遺構掘り込み及びトレンチによる堆積状況の確認を始め、適宜、遺構の土層断面や遺物出土状況、完掘状況等の写真撮影や実測図作成を実施した。遺構の掘り込みは、12月1日に終了した。4区の実測図作成に必要な国土地標杭の設置は、12月4日に専門業者に委託して開始した。

4区の掘り込み終了後、12月4日に3区の遺構掘り込みを始めた。適宜、遺構の土層断面や遺物出土状況、完掘状況等の写真撮影や実測図作成を実施し、1月29日に遺構の掘り込みを終了した。その後、3区、4区の空中写真撮影のための準備作業を始め、2月9日に空中写真撮影を行った。

3区Bの調査区平面図の実測を終えた後、2月16日から各区の埋め戻し準備作業を行い、2月20日に重機による埋め戻し作業を開始した。埋め戻しは、まず盤土以下の土を埋め戻して転圧し、次に耕作土を埋め戻して原状回復を行った。2月22日にテント等を返却し、2月27日に発掘器材を撤収して発掘作業員の移動を終了した。2月27日に仮設水道を撤去、2月28日に電気配線を撤去、2月29日に仮設事務所等を返却した。翌3月1日には重機による埋め戻し作業を終え、現地での調査を終了した。

令和6年度は、山口県埋蔵文化財センターにおいて、遺物の洗浄・接合・復元作業及び実測、写真撮影を行った。出土した炭化物等の自然分析、獣歯の分析については、専門業者等に委託して実施した。また、遺構図面や写真等の記録類も整理をすすめ、これらの資料を取りまとめて報告書を作成した。



重機による表土除去



作業風景

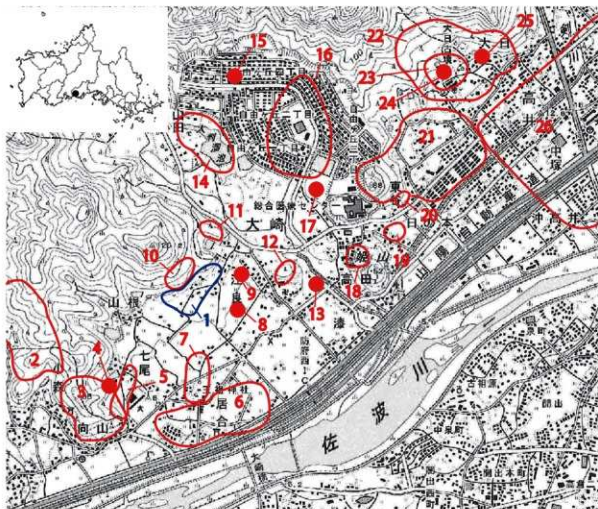
II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

笛給西寺遺跡は、防府平野の西部にある山口県防府市大崎の江良地区に位置する。

防府平野は、県境を源流として南西方向に流下する佐波川の下流域に広がっている。佐波川は、低地が比較的狭い中流域から天神山の北でやや西に方向を変え、下流域にいたる。下流域では広い三角州を形成し、桑山、田島山などを陸繋化して防府平野を形成して瀬戸内海へと流れていく。

下流域の左岸は、天神山の西麓、桑山の北から西側に幾筋もの旧河道がみられるいわゆる乱流状の低地帯が広がっている。それに対して右岸は、右田ヶ岳、西目山地、楞嚴寺山地の南麓にあたり、旧河道が少なく、比較的安定した平坦な堆積地が続いている。これらの山体は黒雲母花崗岩からなり、山頂付近は急斜面となっているが、山麓は緩斜面となっている。そのうち楞嚴寺山地は、断層谷による開析によっていくつもの残丘群の集合体となっており、そのうちのひとつである霞山（八龍山、糠山ともいう）の南麓に広がる日当たりのよい氾濫原低地に江良地区がある。



1. 笛給西寺遺跡 2. 向山遺跡 3. 向山古墳群 4. 向山竈跡 5. 正坊院遺跡 6. 玉祖遺跡 7. 玉祖神社境内遺跡
8. 宮城森遺跡 9. 玉岩屋古墳 10. 江良霞山古墳群 11. 江良西の山古墳群 12. 江良弘法山古墳群
13. 江良古鏡遺跡 14. 大判池古竈跡 15. 奥正権寺古墳 16. 奥正権寺遺跡 17. 大崎岡古墳群 18. 姫山遺跡
19. 姫山東遺跡 20. 大崎東谷古墳群 21. 大崎遺跡 22. 高井山南遺跡 23. 高井山南古墳群 24. 大日古墳
25. 水津邸内古墳 26. 下右田遺跡

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

この地域は、西目山地と楞嚴寺山地の境を浸食している須川と楞嚴寺山の東を流れている甲久保川の間に残った微高地である。したがって、この地域を潤す水系面積が狭いために水不足になりやすく、灌漑をしなければ水田耕作が困難である。『防長風土注進案』の「大崎村荒圖」には、多くのため池と水路が描かれているが、3区の隣を流れる現在の水路とほぼ同じ位置に水路が描かれている。また、須川の西に延びる西の山、弘法山などの丘陵と、甲久保川の東にある向山に挟まれて入江のように入り込んだ地形となっており、それが「江良」という地名の由来との説もある。江良地区の南にある居合地区の自然堤防の上に、周防一宮の玉祖神社がある。

今回の調査区は、1区、2区が「笛給」、3区が「西寺」、4区は「ウツキ」という小字に位置する。調査区の西には「寄江」という小字があり、仲哀天皇、神功皇后の船が着岸したところという伝承があり、この地域が海上交通と陸上交通の接点であったことがうかがわれる。

2 歴史的環境（第1図参照）

旧石器時代の遺跡は防府市域では未確認だが、西の山口市との境界にある長沢池遺跡で細石器が見つかっている。地理的環境から、佐波川下流域の右岸は、左岸に比べると生活の場となりやすい地域だが、ここに人々の生活の痕跡があるのは、縄文時代以降である。

江良地区では縄文文化の痕跡は確認されていないが、大崎遺跡（21）からは縄文時代後期と晩期、奥正権寺遺跡（16）、下右田遺跡（26）からは晩期の遺構、遺物が発見されている。奥正権寺遺跡では貯蔵用と考えられる土坑群が発見され、土坑内から土器がまとまって出土した。しかし、防府市全域でも縄文時代の遺跡数は少なく、佐波川中流域の小野中学校敷地遺跡、佐波川河口に近い台ヶ原遺跡などで早期の土器が出土しているが、前期から中期の遺跡は見られない。

弥生時代になると遺跡の数が増加する。下右田遺跡では、前期、中期の遺構、遺物もあるが、後期



第2図 「大崎村荒圖」『防長風土注進案』 第九巻 三田尻幸判 上

になると、山口県の瀬戸内沿岸で最大規模の拠点集落が成立している。これ以降、規模の盛衰はあるものの、連綿として集落が営まれる。これに隣接する大崎遺跡は、西目山地から南に突出する元山から南東麓に広がる中期の集落で、山頂付近は高地性集落である。元山のすぐ南の姫山遺跡（18）でも中期の土器が採集されており、一連の高地性集落があったと考えられる。また、大崎遺跡の西側の奥正権寺遺跡では、同時代の集落が確認されている。江良地区には弥生時代の遺跡は確認されていないが、中世以前は海岸線が迫っていたとされる向山遺跡（2）は弥生土器の散布地で、海を臨む高地性集落が存在する可能性がある。

古墳時代になると、下右田遺跡の集落は規模が小さくなる。古墳も、防府市域には前期古墳が確認されておらず、中期古墳も田島山の西にある防府市西浦の黒山に、5世紀と考えられる黒山1号墳があるのみである。周囲の熊毛、周南などの周防東部、山口盆地、厚狭、下関などの長門地方などと比較すると、防府平野は著しく築造数が少ない。しかし、後期になると多くの古墳が造営され、佐波川下流域の右岸には、片山古墳、大日古墳（24）などの前方後円墳といわれている古墳が築かれる。片山古墳は、右田ヶ岳の南西山麓の下右田遺跡を見降ろす位置にあったが、大正期に壊されて原形をとどめていない。出土遺物から6世紀後半とされている。大日古墳は、奈良県明日香村の岩屋山古墳と石室の形態が類似しており、畿内との強い結びつきを示している。これは、『日本書紀』の仲哀天皇、神功皇后の征討伝承に登場する「沙摩県主」の祖との関連も想起させる。この古墳は7世紀中頃と考えられている。この周辺には、高井山寄古墳群（23）、水津邸内古墳（25）がある。

このほかにも、江良露山古墳群（10）、江良西の山古墳群（11）、江良弘法山古墳群（12）が、江良地区を取り囲むように分布している。向山古墳群（3）は、6世紀から8世紀までの群集墳である。また、向山窟跡（4）、大判池窟跡（14）という須恵器窟跡があるが、姫山、弘法山より西の低地には、古墳時代以前の遺跡はみられない。唯一、玉祖神社境内遺跡（7）から須恵器、土師器とともに滑石製模造品が発見されている。玉祖神社は、玉作連が祖神玉祖命を祀ったのが起こりとされているが、勾玉などの生産につながる遺物は、周辺の遺跡を含めて発見されていない。この地には技術者集団ではなく、農耕などの生産によって経済的に玉祖神社や玉作連を支えていた部民がいたのかもしれない。

このほか、須川の右岸には、奥正権寺古墳（15）、大崎岡古墳群（17）、大崎東谷古墳群（20）があり、いずれも7世紀以降と考えられているが、奥正権寺遺跡ではこの時期の遺構は発見されていない。これらの古墳を造営した人々の集落は、大崎遺跡、下右田遺跡などの離れたところなのだろうか。あるいは、江良地区の現在の集落付近に埋存しているのだろうか。いずれにしても7世紀といえ、聖徳太子による改革に始まり、大化改新によって律令国家を目指し、白村江の戦によって国際的な危機を迎えるといった、内政、外交とも激動の時代である。これらの古墳の被葬者たちが、こうした動きにどのように関わっていたのか興味深い。仲哀、神功伝承よりさかのぼる景行天皇の熊襲征討伝承からも、佐波川河口付近が九州や朝鮮半島への中継点として重視されていたとする考えもある。

こうした7世紀を経て、周防国の中心地となった防府平野には、律令制度の整備に伴い、周防国府が置かれる。周防国は6つの郡が設けられ、国府のある佐波郡には8つの郷があった。江良地区は、このうち玉祖郷に位置する。律令制下では条里制の土地区画がなされたが、佐波川下流右岸地域では、現在もその区画が踏襲されているところがあり、下右田遺跡では現在の区画の境目に位置する8～9

世紀の溝が確認されている。また、山陽道が整備され、防府平野には勝間駅家と大前駅家が設置されたことが『延喜式』に記されている。山陽道は、防府天満宮前から佐波川右岸の河畔に至り、現在の大崎橋の少し上流で川を渡って玉祖神社の前を通る。玉祖神社は、『日本書紀』にその名が現れることから8世紀初頭には創建されていたと考えられる。勝間駅家は周防国府付近、大前駅家は玉祖神社付近と推定されているが、今のところ位置は確定されていない。玉祖遺跡(6)では銅製帯金具が出土しており、調査報告書ではこれを玉祖神社の神官と結びつけているが、大前駅家の官人と結びつける説もある。また、正坊院遺跡(5)では、9～10世紀の瓦が多く発見されており、瓦窯の可能性も指摘されているが、1598年の玉祖神社焼失の際に延焼して廃寺となった正坊院に関連する可能性も指摘されている。大前駅家は、889年に廃止されているので、これが関連する可能性は低い。10世紀には、901年に大宰府に向かう菅原道真が勝間駅に滞在し、940年には藤原純友による戦乱が周防国におよんでいる。

佐波川中流域の右岸では、低地に中世の遺跡が多く分布している。下右田遺跡では、この時期にも大規模な集落が発見され、鎌倉時代には集落をめぐる溝が設けられている。室町時代には集村化が進み、近世の右田村となっていく。これに隣接する大崎遺跡の元山東麓の低地には、船着き場が存在した可能性が指摘されている。玉祖遺跡では、平安時代から室町時代の集落とともに多くの瓦も出土し、また鎌倉時代の懸仏が見つかった。これらは、寺院などの存在を想起させる。大崎遺跡、玉祖遺跡ともに羽羽口や鉢渚が多く出土しており、金属製品の生産がなされていたものと思われる。玉祖神社境内遺跡では、「辛巳元年」の土師器の椀が出土している。応保元年(1161)にあたるものとされている。江良地区では、宮城森遺跡(8)、玉岩屋古墳(9)、江良古鏡遺跡(13)で銅鏡が発見され、ともに玉祖神社に奉納されている。宮城森遺跡は、景行天皇が熊襲征伐に向かう途中に玉祖神社で戦勝祈願した際の行在所の跡と伝えられているが、明治31年(1898)に波芦雲鶴八稜鏡が隣接する田から掘り出された。玉岩屋古墳では、銅鈴と焼け溶けた八稜鏡が江戸時代に発掘されたとされている。天正の頃までは古墳の形だったと『防長風土注進案』には記されているので、古墳という名称となっている。江良古鏡遺跡では、昭和11年(1936)に六花湖州鏡が、鉄刀片とともに掘り出されている。いずれも平安後期から鎌倉時代のもので、中世墓か経塚だったのではないかと推定されている。このほか玉祖神社には、江戸時代と明治期に江良の住人によって掘り出された「和同開珎」「萬年通寶」「神功開寶」が奉納されている。これらの出土地は特定できていない。

源平の合戦の戦禍を受けた東大寺復興のため、1186年に周防国が東大寺造営料国とされ、徳地の木材の運搬のために重源によって佐波川が整備され、下流の流路は定まった。江戸時代となると干拓や塩田開発などによって、佐波川河口だけでなく、防府平野は大いに変わっていくこととなった。

参考文献

- 山口県文書館 1964『防長風土注進案』第九巻 三田尻幸判 上
防府市史編纂委員会 2006『防府市史』通史Ⅰ 原始・古代・中世
防府市史編纂委員会 2006『防府市史』資料Ⅰ 自然・民俗・地名編
防府市史編纂委員会 2006『防府市史』資料Ⅱ 考古資料・文化財編
山口県教育委員会 1983『玉祖遺跡・西小路遺跡』
山口県教育委員会 1984『奥正権寺遺跡Ⅰ』

Ⅲ 調査の成果

笛給西寺遺跡は、霞山の南東麓の微高地に位置する。霞山から佐波川に向かって、いくつかの流路がある。そのうち、1区の中央、1区と2区の間、4区の中央に自然流路があった。1・2・4区の遺構は、これらの流路の隙間に位置している。さらに4区の南西側には、比較的規模の大きな流路があるものとみられる。

1 1区の遺構

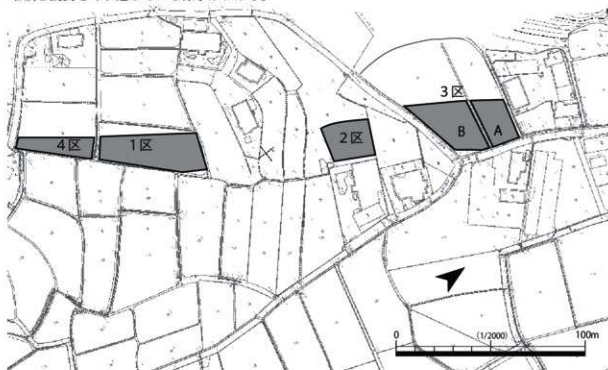
(1) 調査区の概要

1区の標高は、遺構検出面で8.63 mから9.32 mで、調査区の両端が高く、中央が低い。これは、調査区のほぼ中央に、北西から南東方向に流れている自然流路があるためで、遺構はその両側に偏在する。自然流路は、霞山方面から佐波川に向かって流れる流路のひとつである。調査中も常時水漏し、土管の暗渠が調査区を横断している。竪穴建物1棟、溝6条、土坑13基、柱穴130個を検出したが、どの遺構も浅く、後世の土地利用によって上面が削り取られたとみられる。

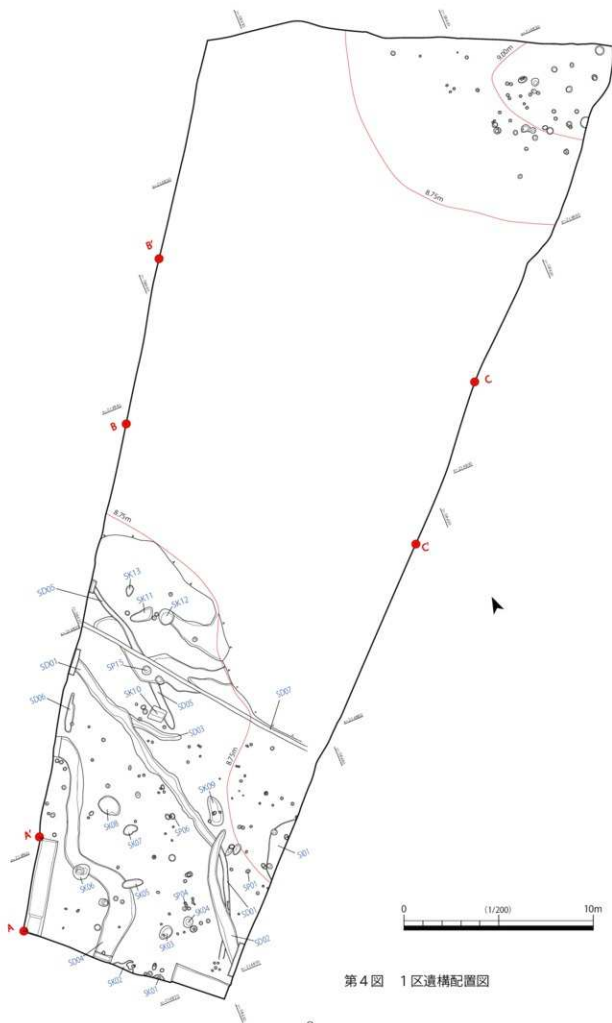
令和4年度の試掘調査によると、1区と2区の間には、やや幅の広い自然流路の存在が指摘されており、1区の北側の遺構面は、調査区外にはほとんど広がらないと思われる。南側の遺構面は4区へと広がる。

遺物は、遺構から土師器、須恵器が、遺構外では土師器、須恵器、瓦質土器が出土している。須恵器は8世紀後半が中心で、獣脚が1点出土している。自然流路を挟んで南側からの出土が中心で、北側の遺構からは、遺物がほとんど出土しなかった。

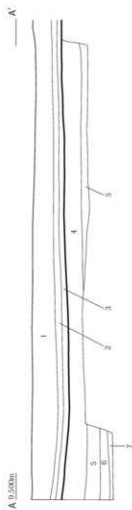
基本層序(第5図)は、現在の耕作土の下に盤土があり、その下には堆積層が幾重にも重なっている。A-A'の第4層が遺構検出面だが、自然流路の範囲にあるB-B'とC-C'では、砂層、砂質土層が重なり、堆積と浸食をくり返している様子がわかる。



第3図 笛給西寺遺跡調査範囲図



第4図 1区遺構配置図



第5图 1区土层断面图

(2) 主な遺構

SI01 (第6図、図版4)

調査区の南側に位置する竪穴建物である。東側の大半が調査区外で、残存する深さは3～8cm。調査区外に隣接する田圃との標高差は約40cmあるので、残りの遺構は失われているとみられる。平面形が円形とすれば直径5m前後とみられる。自然流路の畔にあり、この遺構より北側には検出された遺構はない。居住には不適な場所なので住居ではないとみられるが、用途を示すものはない。須恵器杯身(第36図、図版19)が出土しており、奈良時代後半の遺構とみられる。

SD01 (第7図)

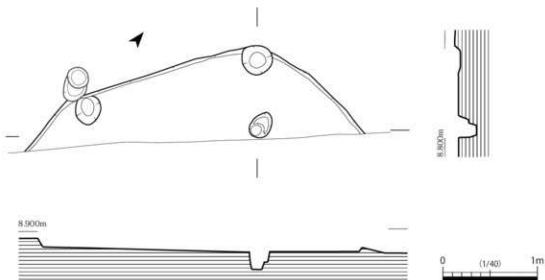
調査区南側に位置し、ほぼ南北方向に直線的に走行し、南端部で西側に弧状に屈曲する。北側の調査区外に延伸している。規模は、検出長18.10m、幅27～72cm、深さは、調査区の西壁付近で14cm、屈曲部で3cm。底面の標高は、西壁付近で8.85m、屈曲後消失するところで8.55m。西壁から約3mの南側壁面に、須恵器の獣脚(第36図、図版18)が出土した。壺か骨蔵器、火舎の一部とみられる。調査区の西側の山際から、流れ込んだものとみられる。このほか、須恵器の壺、杯身、土師器の杯(第36図、図版18)が出土した。奈良時代後半とみられる。SD02に切られ、SD03を切る。

SD02 (第7図)

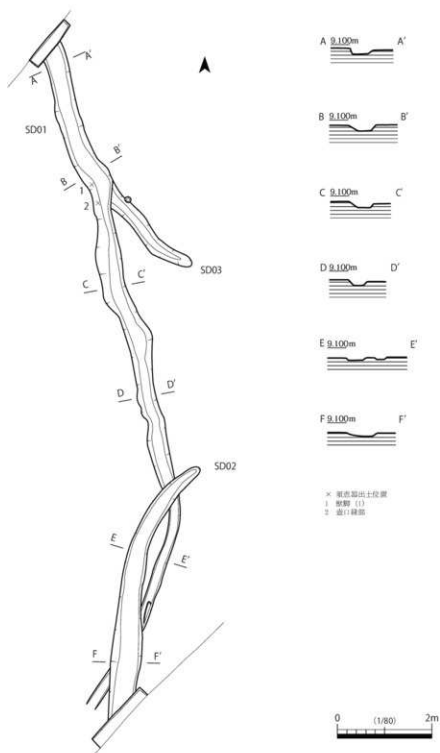
北半部は弧状に屈曲し、SD01が屈曲するあたりでSD01を切って交差し、南へ直線的に走行する。そのまま調査区外に延びている。規模は、検出長7.10m、幅46～80cm、深さ4～8cm。底面の標高は、北側で8.78m、東壁付近で8.75mである。須恵器の杯身、杯蓋(第36図、図版18)が出土している。平安時代初期とみられる。

SK04 (図版4)

調査区南隅付近に位置する。平面形はほぼ円形で、長径58cm、短径54cm。残存する深さ12cm。遺構の用途は不明だが、須恵器の杯身、杯蓋と甕の口縁部が出土した。奈良時代後半のものとみられる。



第6図 1区SI01実測図



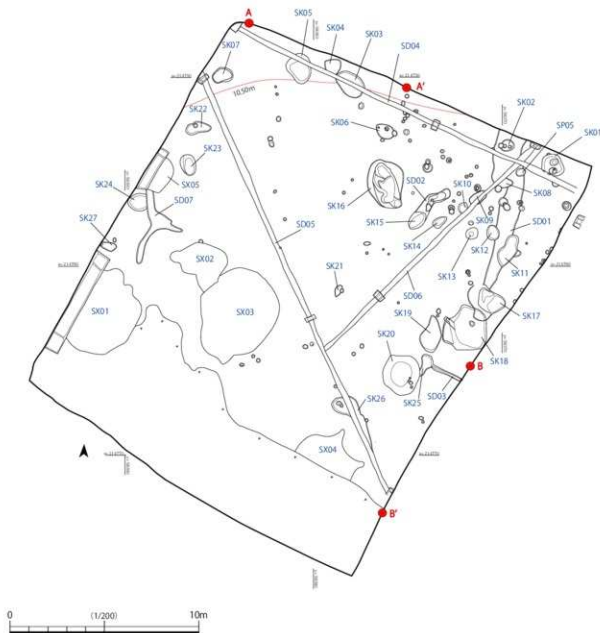
第7図 1区溝実測図

2 2区の遺構

(1) 調査区の概要

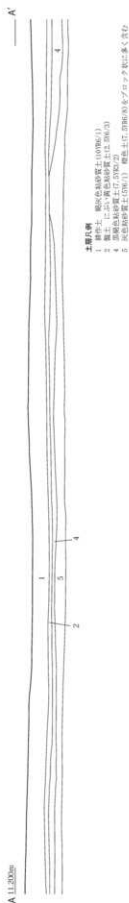
2区の標高は、遺構検出面で 10.10 mから 10.65 mと平坦だが、南方方向に緩やかに傾斜している。遺構検出面はやや不安定な砂質土である。土壌が水を含みやすく、土管の暗渠が3条設けられている(SD04、SD05、SD06)。このほか、溝7条、土坑27基、柱穴85個を検出したが、1区と同様、残りが浅い遺構が多く、後世の土地利用によって削平されているとみられる。また、調査区の南西側は、遺構がほとんど検出されておらず、後世の攪乱によって遺構面が壊されている。

SX01～SX05は、佐野焼陶土の採掘跡とみられる。佐野は大崎の西隣にあり、江戸時代を中心に

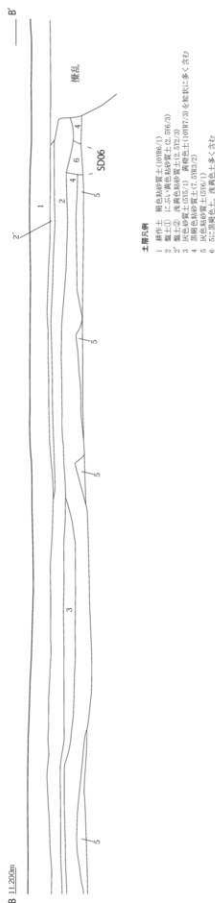


第8図 2区遺構配置図

2 区 北壁土層断面図 (A-A')

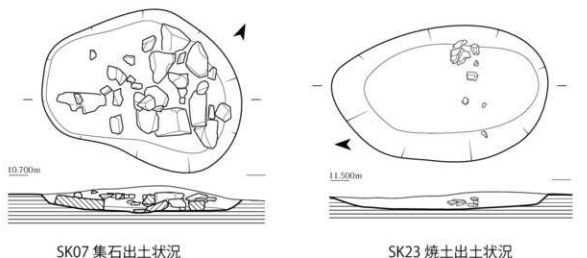


2 区 東壁土層断面図 (B-B')

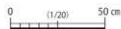


第 9 図 2 区土層断面図





第 10 図 2 区土坑遺物出土状況実測図



佐野焼の製陶が盛行した地域である。また、『防長風土注進案』には「上古今辺三所之野より土取焼物作り産業を致し故、三野焼と唱、三野村と称し候由、後世佐野村と書申候由」と記されている。江良地区を含む大崎でも粘土を採取していたようである。

遺物は、土師器、須恵器、瓦質土器、青磁、陶器（天目碗）が出土している。いずれも細片で、周囲からの流れ込みとみられる。

基本層序（第 9 図）は、現在の耕作土の下に盤土があり、その下は A-A'、B-B' とも遺構検出面が黒褐色の遺物包含層に覆われている。B-B' の 6 層は暗渠の掘り込みで、南西側で耕作土の下から掘り込まれている攪乱がある。これより南西方向は、攪乱によるものだけでなく、調査区全体に地形が深く落ち込んでいる。これは、1 区との間に自然流路があるためと考えられる。

（2）主な遺構

SK07（第 10 図、図版 6）

調査区の北隅に位置し、不整楕円形の平面形。長軸 106cm、短軸 78cm、残存する深さは 13cm である。底面に 10～15cm 大の礫が多く埋存していたが、その中に中世の瓦質土器片も含まれていた。

SK16（図版 6）

調査区の北東側の中央に位置し、不正楕円形の平面形。長軸 272cm、短軸 196cm、残存する深さは 34cm。黒色粘質土の埋土から採取した炭化材はコナラ属コナラ節に同定され、燃料材などに利用した残材の可能性が指摘されている。放射性炭素年代測定（第 18 表）では、 $7,980 \pm 30\text{yrBP}$ となった。この時期を示す遺物は出土しておらず、流れ込みと考えられる。

SK23（第 10 図）

調査区西壁沿いのほぼ中央に位置し、平面形は楕円形。長軸 115cm、短軸 72cm、残存する深さは 9cm である。西側から東側に向かって投棄されたような状態で 5cm 前後の焼土塊が出土した。中世の土師器の杯、皿の一部が出土している。

3 3区の遺構

(1) 調査区の概要

3区は、2枚の田の東側の部分になるが、「調査の経緯と概要」で述べたとおり、畦を残したまま調査せざるを得なかったため、便宜的に畦の北側を3区A、南側を3区Bとした。遺構検出面の標高は、3区Aで11.55mから11.76m。3区B11.25mから11.61m。3区A北東側から3区B南西側に向かって緩やかに下っている。

3区の横を流れる用水路は、『防長風土注進案』の「大崎村荒圖」に描かれている須川から取水して江良方面の田畑に水を送る水路とほぼ同じ位置にある。遺構検出面が、1、2、4区は砂質土であるのに対し、3区は明黄褐色粘質土で、比較的安定している。遺構は、3区全体で、掘立柱建物5棟、溝43条、土坑63基、柱穴約750個を検出した。また、SX01～04は、2区と同様に陶土の採掘跡とみられる。

遺物は、土師器、須恵器、瓦質土器、青磁、白磁、陶器（天目碗）が出土した。土師器は杯が多く、碗がそれに次ぐが、皿が比較的少ない。須恵器の出土はわずかである。瓦質土器は羽釜が多く、鍋、足鍋も出土している。このほか、土錘、鞆羽口片、石鍋、姫島産の黒曜石による石鏃と剥片が出土している。

基本層序（第16・17図）は3区A・Bとも、現在の耕作土の下に盤土があり、さらにその下に旧耕作土、盤土がある。その下に各層が整合して堆積している。このうち、A-A'、B-B'、C-C'の1～6層は共通している。A-A'にある攪乱は土管を使用した暗渠を設置した際の掘り込みで、1区、2区の暗渠と共通したものである。土管の中は土砂で埋まり、現在は機能していない。

9～10層はSD01の埋土である。9層が堆積したのちに8層が堆積し、その一部が浸食されたのち、7層が堆積している。また、13層、14層は旧耕土から掘り込まれている。15層は斜めに打ち込まれた杭の痕である。C-C'の8層はSD18、SK57の埋土で5層の上面から掘り込まれている。5層は遺物包含層だが、検出した遺構のいくつかは、5層の上面から掘り込まれている可能性がある。また、327、330（第54図、図版36）は、5層に含まれていたとみられる。

(2) 主な遺構

①掘立柱建物

SB01（第18図、図版10）

3区AとBを分ける畦をまたいで、調査区の東寄りに位置する。棟方向はN 22° E。桁行は2間で590cm、梁行は1間で432cm、床面積は25.5㎡。建物を構成する6個の柱穴のうち、検出できたのは5個で、1個は畦の下にあると推定する。検出した柱穴の直径は28～46cmで、深さは10～46cm。SP07、09、39、48、212から土師器片が出土した。

SB02（第19図、図版10）

3区AとBを分ける畦をまたいで、調査区の西寄りに位置する。棟方向はN 91° E。桁行は4間で855cm、梁行は3間で585cm、床面積は50.0㎡。建物を構成する主柱穴は20個で、総柱建物である。西側に補助的な柱穴が西側に3個みられる。北から2列目の柱穴のうち、4個は畦の下にあると推定する。検出した主柱穴の直径は25～42cmで、深さは18～65cm。補助的な柱穴の直径は20～

25cmで、深さは18～48cmである。SP100、245からそれぞれ土師器の杯（第39図、図版21）が出土した。SP88、105、226、231、247、251、268からも土師器片が出土した。SP226出土の炭化材はクリと同定され、放射性炭素年代測定では990±20yrBPとなった。

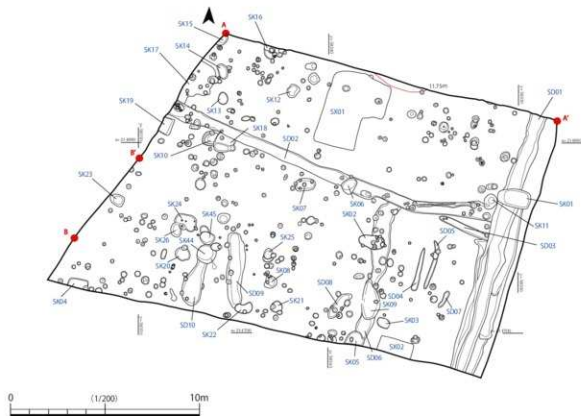
南側に幅58～74cm、深さ7～9cmのSD15が並行しており、SB02の付帯施設とみられる。SD15からは、土師器皿・椀（第49図、図版31）、白磁皿が出土した。平安時代後期から鎌倉時代とみられる。

SB03（第18図、図版10）

3区Bの北西隅に位置する。棟方向はN8°E。桁行は2間で388cm、梁行は1間で208cm、床面積は8.1㎡。建物を構成する柱穴6個のうち検出できたのは5個で、1個は調査区外である。検出した柱穴の直径は28～36cmで、深さは34～42cm。SP235、255から土師器片が出土した。

SB04（第20図、図版10）

3区B南西隅に位置し、南側がSB05と重なる総柱建物である。棟方向はN81°W。桁行は3間で640cm、梁行は410cmで、床面積は26.2㎡。建物を構成する柱穴は12個で、直径は22～36cm、深さは20～45cm。SP288から土師器の椀（第39図、図版21）、SP302から土師器皿、SP292、314から土師器椀が出土した。平安時代後期から鎌倉時代とみられる。北側に幅62～72cm、深さ3～4cmのSD19がほぼ並行している。出土した遺物はないが、SB04の付帯施設の可能性がある。



第11図 3区A遺構配置図(1)

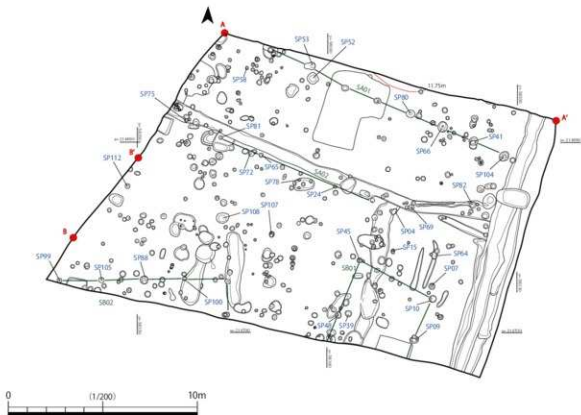
SB05 (第21図、図版10)

3区B南西隅に位置し、北側がSB04と重なる総柱建物である。棟方向はN 80°W。桁行は3間で680cm、梁行は650cmで、床面積は44.2㎡。建物を構成する柱穴16個のうち、1個は調査区外である。柱穴の直径は26～32cm、深さは20～43cm。SP277、279、285、290、298の柱穴から、土師器の杯、皿、高台付皿、碗と土鍾が、SP285から白磁、SP308からバレン状石製品(第39図、図版15・21)が出土している。東側に幅58～70cm、深さ2～11cmのSD39がほぼ並行しており、SB05の付帯施設の可能性がある。ここから土師器杯・皿、白磁碗が出土している。鎌倉時代後期とみられる。

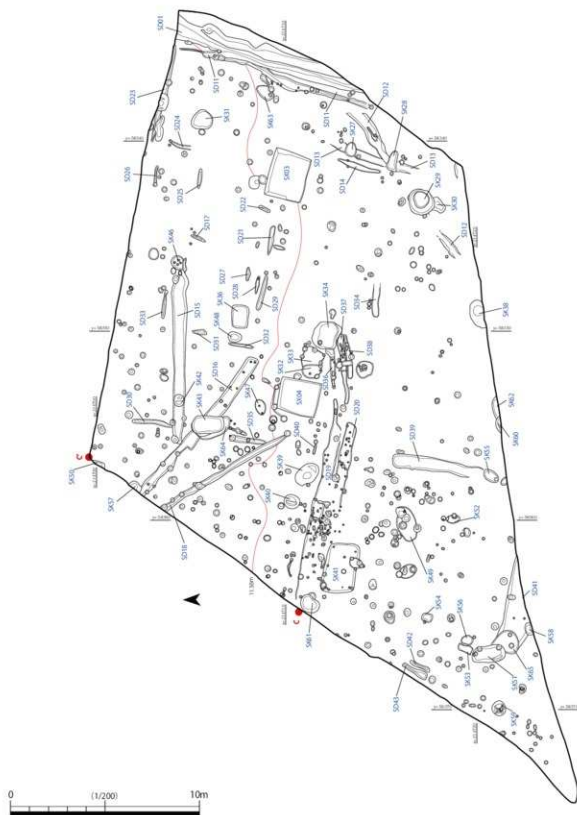
②柵列

SA01 (第22図、図版10)

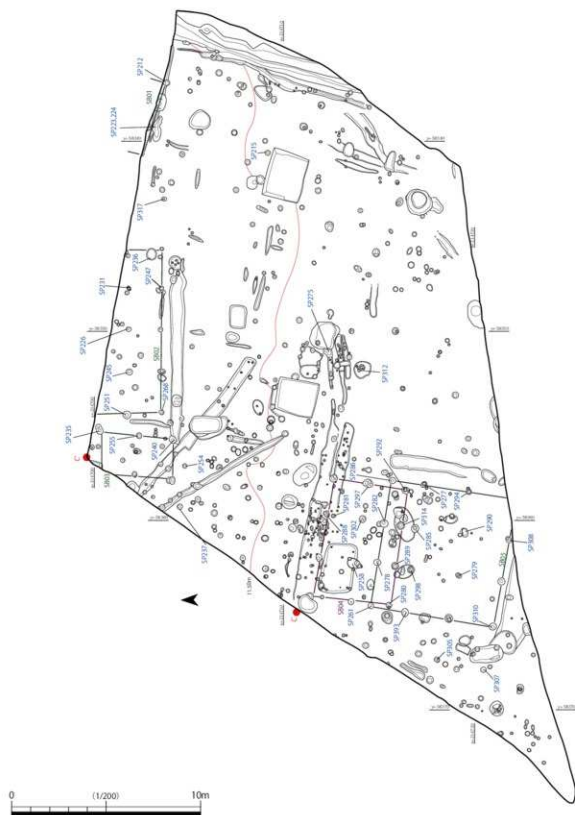
3区A北壁に沿って8個の柱穴が並ぶ。主軸方向は、N 68°W。柱穴の規模は、直径30～56cm、深さは、遺構検出面から44～62cm。柱間は176～232cmである。SP41、66には柱根が残存する。SP66はヒサカキ属に同定され、放射性炭素年代測定では390±20yrBPとなった。SP41から土師器の皿の底部(第39図、図版21)が出土している。ヒサカキ属は、農具の柄や小細工物、器具などに用いられ、柱材としての利用例は少ない。建築部材では垂木などへの利用がある程度で、柱材の可能性は低いことが指摘されている。したがって、柵列と考えられる。



第12図 3区A遺構配置図(2)



第 13 図 3区B遺構配置図(1)



第 14 図 3 区 B 遺構配置図(2)



第 15 图 3区掘立柱建物・柱列位置図

SA02 (第22図、図版10)

SA01の南に約5m離れた位置に並行している。5個の柱穴で構成され、SD02の南側に並行している。主軸方向はN 68°WでSA01と同じである。柱穴の規模は、直径がすべて20cm、深さ4～33cm。柱間は196～232cm。SP24、65、81から土師器片が出土しているが、図化できるものはなく、時代の決め手とはならない。

③溝

SD01 (第23図)

3区A・Bの東壁に沿って、南北に直線的に走行し、調査区外に延伸している。東岸には、流路に沿った平坦面がある。規模は検出長は24.83m、幅108～202cm、深さ8～30cm。SK01に切られる。底面の標高は、3区Aの北壁付近が11.46mで、南壁付近が11.36m、3区Bの東壁付近が11.13mで、北から南へと流下していたことを裏付けている。『防長風土注進案』の「大崎村荒圖」では、須川の上流で取水された用水が、霞山の東方に延びる西の山を迂回して江良地区に入り、道沿いに西へ進んでいる。現在の用水路は、これと同じルートを通っている。SD01は、この用水路と並行している。放射性炭素年代測定(第18表)でSD01出土の炭化材が、 $120 \pm 20\text{yrBP}$ となっているが、樹種はヤブツバキに同定され、燃料材や器具などの残材の可能性が指摘されている。これは、江戸時代後期に水路へ流れ込んだものが、紛れ込んだものと考えられる。

SD01の埋土である、第23図の土層断面図(F-F')の7層浅黄橙色粗粒砂と8層灰白色細粒砂の層からは、多くの遺物(第39図～48図、図版21～29)が出土した。須恵器の壺、土師器の杯・皿・高台付杯・高台付皿・椀・足鍋・壺・甕や、瓦質土器の鍋・足鍋・羽釜のほか、青磁の椀・皿、白磁の椀・皿があり、石鍋を転用したとみられる用途不明の滑石製品や、土鍾も出土している。どれも、水路に流れ込んだものとみられ、祭祀などを示唆する状況はなかった。時代は、平安時代後期から室町時代前期にあたる。この時代の水路は、まだ須川から取水したものではなく、西の山の西側の江良堤、あるいはその谷筋から水を引いていた水路である可能性もある。

SD02 (第24図)

3区Aの中央を東西に直線的に横断し、東側のSD01から約4.4mのところまで北へ屈曲している。西側は調査区外に延伸している。規模は、検出長が18.08m、幅54～86cm、深さ3～7cm。SA02と並行している。北側に約5m離れているSA01とも並行しており、SD01とほぼ直交する道の側溝の可能性もある。SK18を切り、SK06・11に切られる。土師器の杯、皿(第49図、図版31)が出土している。

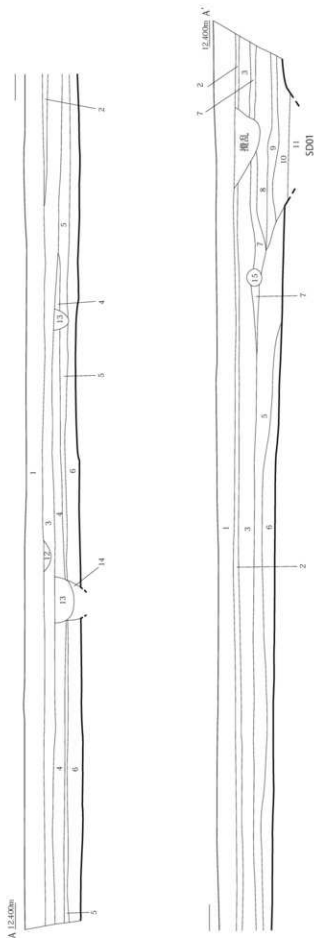
SD03 (第24図)

SD03は、SD02が屈曲部のすぐ東から直線的に延伸している。規模は、検出長が2.60m、幅28～35cm、深さ3～5cm。もともとはSD02の一部だったものが、SD02の流路が変わったことによって切り離され、そのあとに残ったものと考えられる。

SD09

調査区南側中央に位置し、南北に走行する。規模は、長さ3.98m、幅71～86cm、深さ15～31cm。土師器の杯、土鍾(第49図、図版31)が出土した。SK22に切られている。

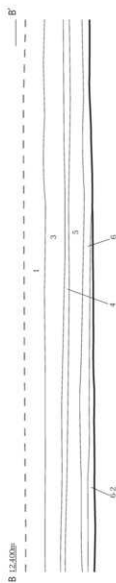
3 区 A 北壁土層断面図 (A-A')



- 土層凡例
- 1 砂土
 - 2 砂土
 - 3 砂土
 - 4 砂土
 - 5 砂土
 - 6 砂土
 - 7 砂土
 - 8 砂土
 - 9 砂土
 - 10 砂土
 - 11 砂土
 - 12 砂土
 - 13 砂土
 - 14 砂土
 - 15 砂土

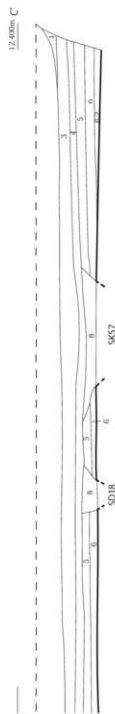
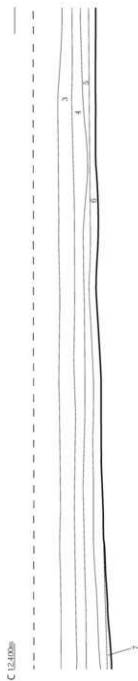
第 16 図 3 区土層断面図(1)

3 区 A 西壁土層断面図 (B-B')

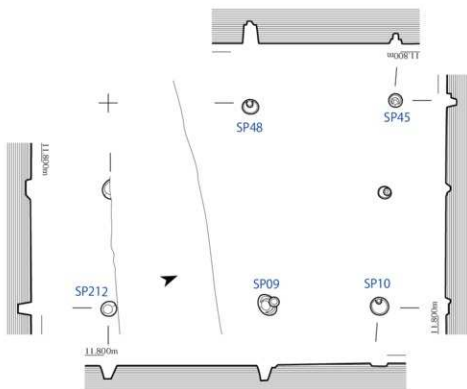


- 土層凡例
- 1 埋蔵土 (10000.0)
 - 2 埋蔵土 (10000.0)
 - 3 埋蔵土 (10000.0)
 - 4 埋蔵土 (10000.0)
 - 5 埋蔵土 (10000.0)
 - 6 埋蔵土 (10000.0)
 - 7 埋蔵土 (10000.0)
- 土層凡例
- 1 埋蔵土 (10000.0)
 - 2 埋蔵土 (10000.0)
 - 3 埋蔵土 (10000.0)
 - 4 埋蔵土 (10000.0)
 - 5 埋蔵土 (10000.0)
 - 6 埋蔵土 (10000.0)
 - 7 埋蔵土 (10000.0)

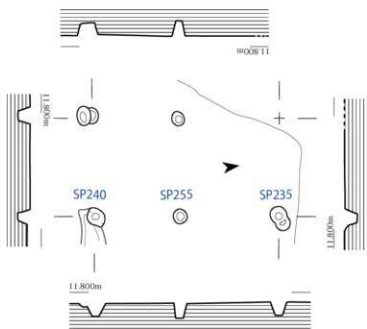
3 区 B 西壁土層断面図 (C-C')



第 17 図 3 区土層断面図 2)



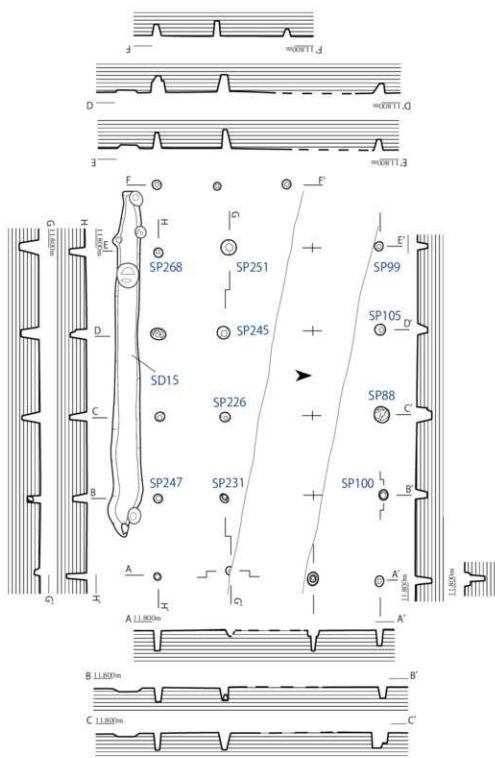
3 区 SB01 实测图



3 区 SB03 实测图

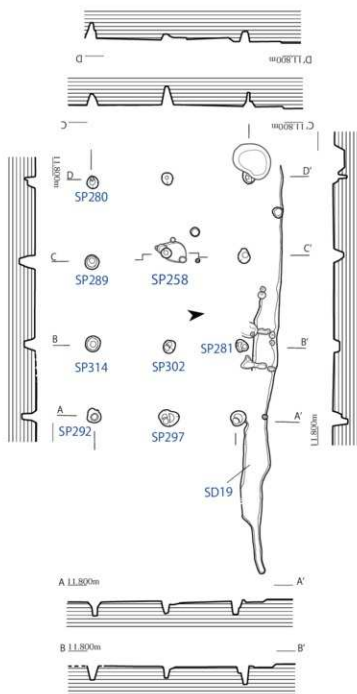


第 18 图 3 区掘立柱建物实测图(1)

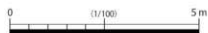


3 区 SB02 实测图

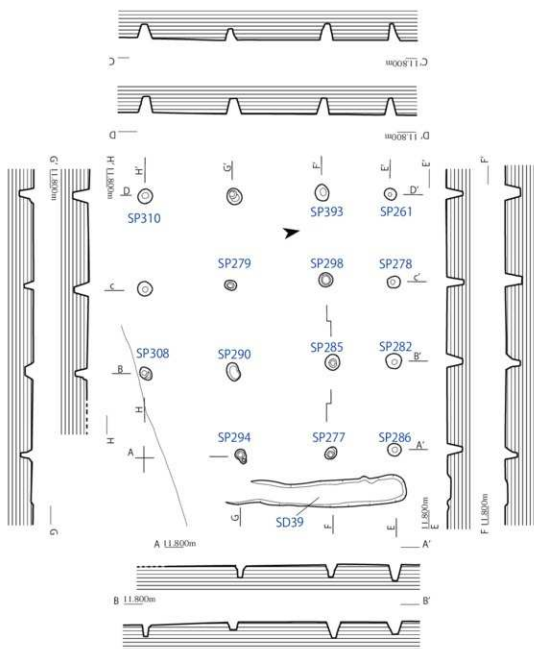
第 19 图 3 区据立柱建物实测图(2)



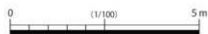
3 区 SB04 实测图



第 20 图 3 区掘立柱建物实测图(3)



3 区 SB05 实测图



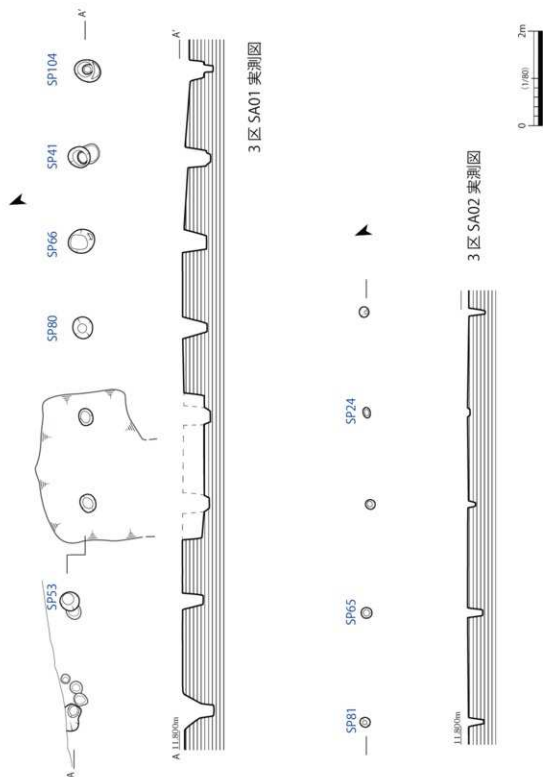
第 21 图 3 区掘立柱建物实测图(4)

SD10

調査区南西部に位置し、南北に走行する。南側の溝幅が広がっている。規模は、長さ 2.40 m、幅 46 ~ 103cm、深さ 8 ~ 14cm。土師器の皿、白磁の椀（第 49 図、図版 31）が出土した。SK44 に切られる。

SD15（第 19 図）

SB02 の南辺に沿って東西に直線的に走行し、東側の溝幅が広い。規模は、長さ 7.16 m、幅 58 ~



第 22 図 3 区柵列実測図

74cm、深さ7～9cm。土師器の椀、皿（第49図、図版31）が出土した。SB03(SP240)、SK46、SD30を切る。排水機能など、SB02の付帯施設である可能性がある。

SD16

3区Bの北西隅近くから南東方向に直線的に走行する。北西側は調査区外に延伸している。規模は、長さ9.68m、幅57～65cm、深さ4～7cm。土師器の杯、青磁碗、白磁皿が出土しているが、図化はできていない。鎌倉時代後半から室町時代の前半にあたる。SK43を切っている。

SD19（第20図）

SB04の北辺に沿って東西に直線的に走行する。北西側は削られて消失しているが、調査区外に延伸していた可能性がある。規模は、長さ10.78m、幅62～72cm、深さ3～4cm。東側は幅が16～20cmと細くなる。雨落溝など、SB04の付帯施設である可能性がある。

SD20

SD19と並行して東西に直線的に走行する。規模は、長さ4.50m、幅56～60cm、深さ1～5cm。西側は削平により消失しているが、SD19に切られている。土師器の椀、姫島産黒曜石の石鏃（第49図、図版31）が出土している。

SD39（第21図）

3区Bの南西部に位置し、SB05の東辺に沿って南北に直線的に走行する。規模は、長さ4.82m、幅58～70cm、深さ2～11cm。南側は削平により消失している。雨落溝など、SB05の付帯施設である可能性がある。

SD41

調査区南西隅に位置する。北西から南東方向へ、幅が広がりながら走行し、南側の調査区外へ延伸する。雨水などによる自然流路の可能性もある。土師器の皿（第49図、図版31）が出土している。SK58・65に切られる。

④土坑

SK01

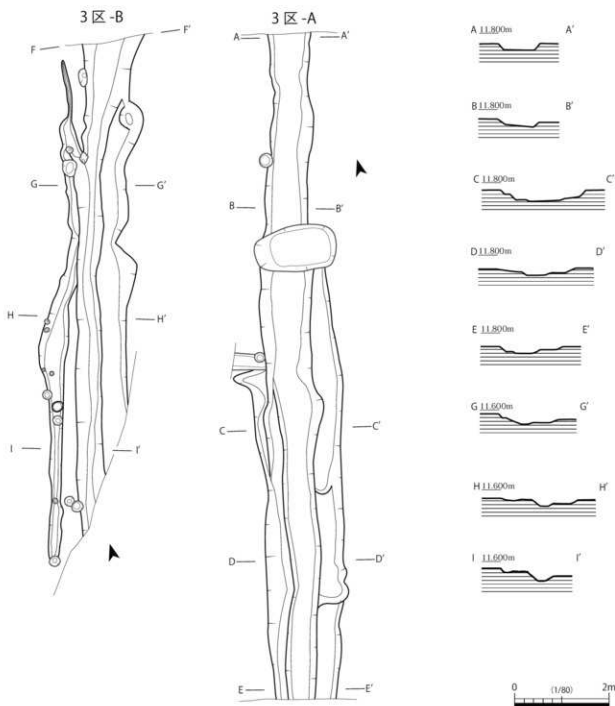
3区Aの東壁に近く、やや北寄りに位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸174cm、短軸96cm、深さ17cm。埋土は褐灰色粘質土。土師器の杯・皿・椀・鍋・羽釜、瓦質土器、陶器（第52図、図版34）が出土した。室町時代とみられる。SD01を切っている。

SK04

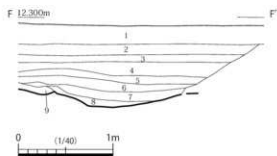
3区A南西隅に位置する。遺構の南の部分は調査区外である。平面形は方形もしくは長方形で、検出できた範囲では、長軸111cm、短軸48cm、深さ8cm。土師器の杯・皿・椀、瓦質土器の鍋・播鉢の破片が出土したが、図化はできなかった。室町時代とみられる。

SK07

3区Aの中央付近で、SD02のすぐ南側に位置する。平面形は楕円形で、長軸107cm、短軸58cm、深さ16cm。埋土は褐灰色粘質土である。土師器椀・皿（第52図、図版34）が出土した。平安時代後期とみられる。



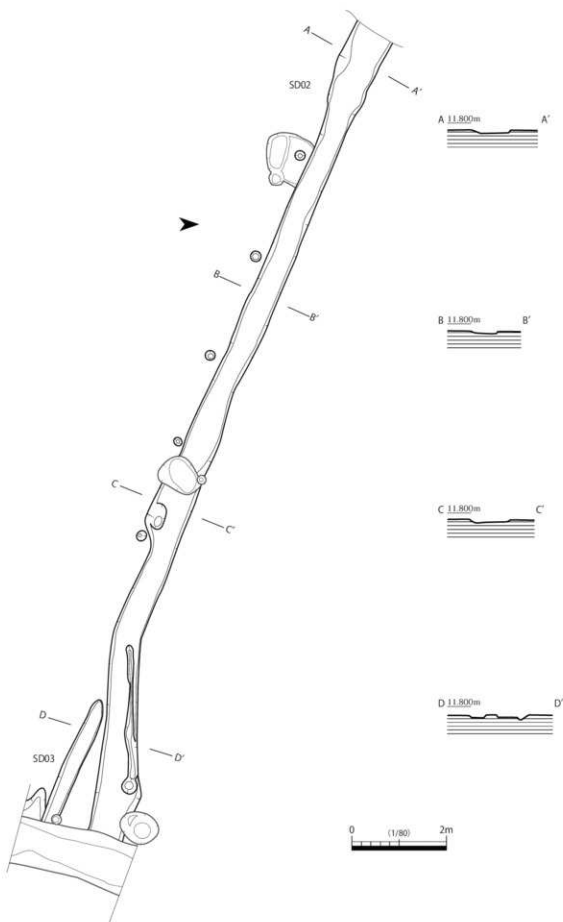
(F-F')



土層凡例

- 1 砂土・黄褐色土 (12, 574/1)
- 2 黄褐色土 (12, 575/1)
- 3 砂土① 灰黄褐色粘砂質土 (10195/2)
- 4 砂土② 明黄褐色粘砂質土 (10196/4)
- 5 砂土③ 黄褐色粘砂質土 (10195/4)
- 6 砂土④ 黄褐色粘砂質土 (10194/3)
- 7 砂土⑤ 黄褐色粘砂質土 (10195/3)
- 8 砂土⑥ 黄褐色粘砂質土 (10197/1)
- 9 黄褐色粘砂質土 (10196/1)

第 23 図 3 区 SD01 実測図



第 24 图 3 区 SD02・03 实测图

SK08

3区Aの南側中央付近に位置する。平面形は不整円形で、長軸70cm、短軸68cm、深さ7cm。埋土は灰黄褐色粘質土である。土師器の椀・皿、白磁椀（第52図、図版34）が出土した。平安時代後期から鎌倉時代とみられる。

SK11

3区Aの東側やや北寄りに位置する。SK01、SD01に隣接し、SD02を切っている。平面形はほぼ円形で、長軸82cm、短軸66cm、深さ45cm。埋土は褐灰色粘質土で、瓦質土器の擂鉢の一部が出土した。室町時代とみられる。

SK12

3区Aの北側やや西寄りに位置する。平面形は不整円形で、長軸69cm、短軸56cm、深さ13cm。埋土は褐灰色粘質土である。土師器の椀（第52図、図版34）が出土している。平安時代後期から鎌倉時代とみられる。

SK29（第25図、図版11）

3区Bの南東隅に位置し、平面形は不整楕円形で、長軸125cm、短軸58cm、深さ86cm。底面はほぼ円形で直径90～96cmで、緩やかに立ち上がり、30cm上がったところで不整楕円形となり、径も長軸122cm、短軸114cmと大きくなって、さらに袋状に立ち上がる。この規模が大きくなったところに、長辺68cm、短辺32cmを最大とする比較的扁平な角礫が集積する。井戸のように組み合っていない。当初は底面の規模だった井戸を破棄した際に、大きな角礫を埋め込んだものとも考えられるが、それを裏付けるものはない。水溜だった可能性もある。SK30を切る。

SK39

3区Bの中央やや西寄りに位置する。平面形は楕円形で、長軸138cm、短軸94cm、深さ30cm。土師器の杯・皿・高台付皿・椀が出土している。平安時代後期から鎌倉時代とみられる。

SK41（第26図、図版12）

3区Bの西側中央に位置し、平面形は隅丸長方形で、長軸265cm、短軸158cm、深さ12cm。SB04の範囲に入るが、直接の関係はないと思われる。住居ではなく、作業用の堅穴建物の可能性もある。底面上の3カ所から土師器が出土した。

出土遺物は、土師器の杯・皿・高台付皿・椀（第52図、図版33・34）である。平安時代後期から鎌倉時代前半にあたる。

SK42

3区B北側に位置し、SD15と重なるが、先後関係は不明。平面形は楕円形で、長軸64cm、短軸32cm、深さ18cm。土師器、瓦質土器、青磁の破片が出土した。室町時代とみられる。

SK43（第27図、図版13）

3区Bの北西部で、SB02の南西に位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸173cm、短軸92cm、深さ38cm。長軸の方位は真北を示す。北側の底面に木枠とみられる木片と獣歯の一部があった。木片は、樹種は状態が悪かったため広葉樹との同定までだったが、放射性炭素年代測定（第18表）では1230±20yrBPとなった。また、獣歯については「Ⅳ-1 笹給西寺遺跡出土の獣骨について」の

分析報告により牛の歯と同定され、性別や年齢も不明だが、左側の上顎臼歯と右側の下顎臼歯の2点が確認された。上下の臼歯が噛み合った状態で並んでいたとみられ、右下顎臼歯は、大臼歯の頬側面の一部、左上顎臼歯も頬側面の一部とみられることから、この牛の頭部は左側を天に向けた横向きであったと考えられる。また、歯の咬耗が進んでいることから、年齢の高い成体の可能性が指摘されている。この土坑は、在来種の牛であれば、成牛1頭が十分収まる大きさなので、全身が横たえて納められていた可能性がある（第58図）。

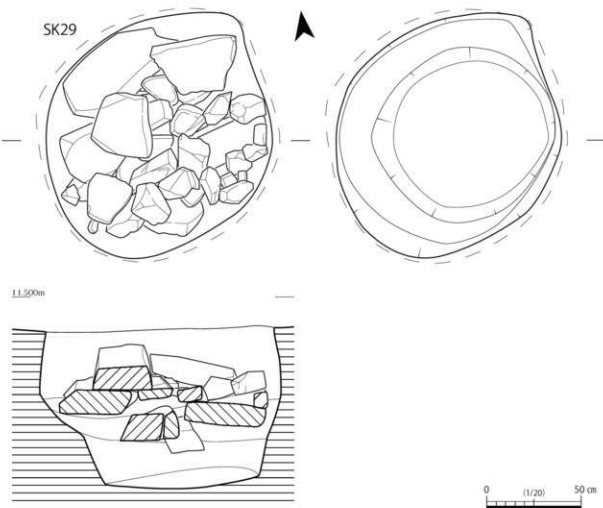
出土遺物は、土師器の杯・皿・椀、羽釜、須恵器があるが、図化できるものはなかった。

SK44

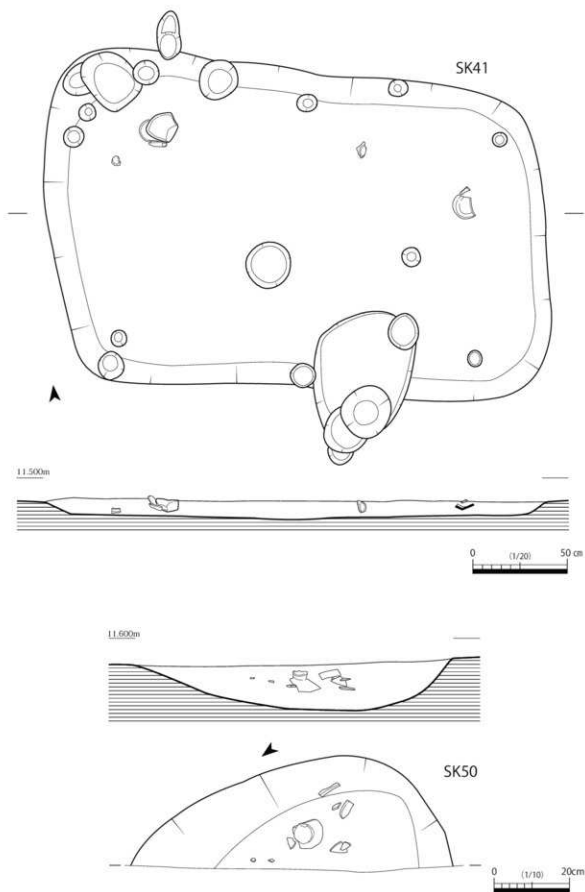
3区Aの南西部に位置する。平面形はほぼ円形で、長軸102cm、短軸98cm、深さ24cm。埋土は褐灰色粘質土。土師器の杯・皿・椀（第52図、図版33・34）が出土した。

SK49（第28図、図版13）

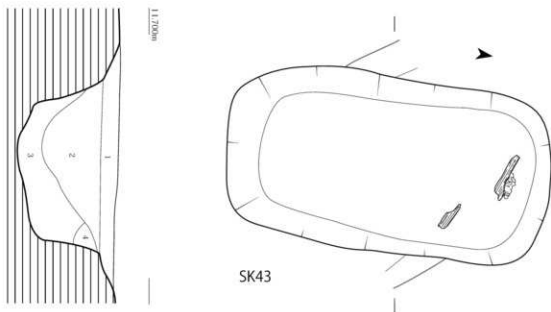
3区Bの南西部で、SB04とSB05の重複部に位置する。平面形は双円形で、長軸190cm、短軸102cm、深さ3cm。黄灰色粘質土の埋土に覆われた、炭を多く含む黒褐色の連結する円形の窪みがある。中から土師器の杯・皿・高台付皿・椀（第52図、図版34）が出土した。平安時代後期から鎌倉時代とみられる。SB04を構成するSP314に切られる。



第25図 3区SK29集石出土状況実測図

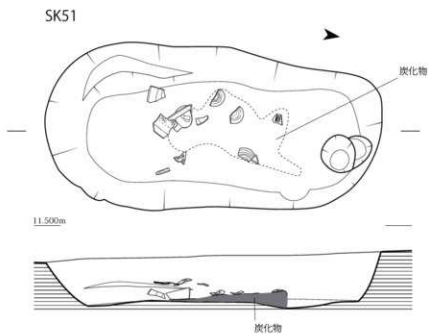


第 26 図 3 区土坑遺物出土状況実測図(1)



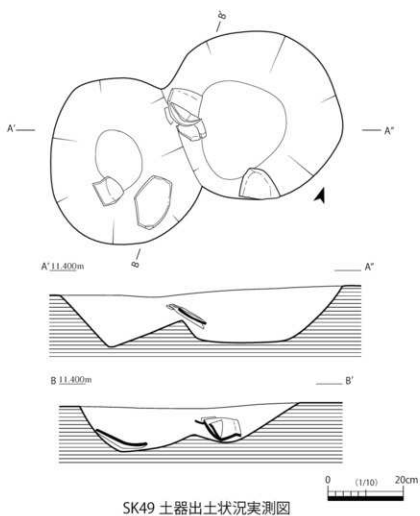
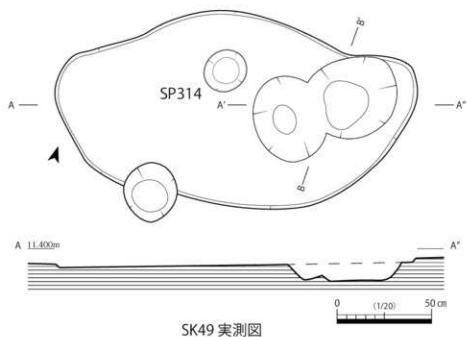
土層凡例

- 1 灰黄褐色粘質土(10YR4/2)
- 2 灰褐色粘質土(7.5YR4/3)に明黄褐色粘質土ブロック(10YR6/8)を含む10%
- 3 灰褐色粘質土(10YR3/2)に明黄褐色粘質土ブロック(10YR6/8)を多く含む20～30%
- 4 灰褐色粘質土(10YR3/2)

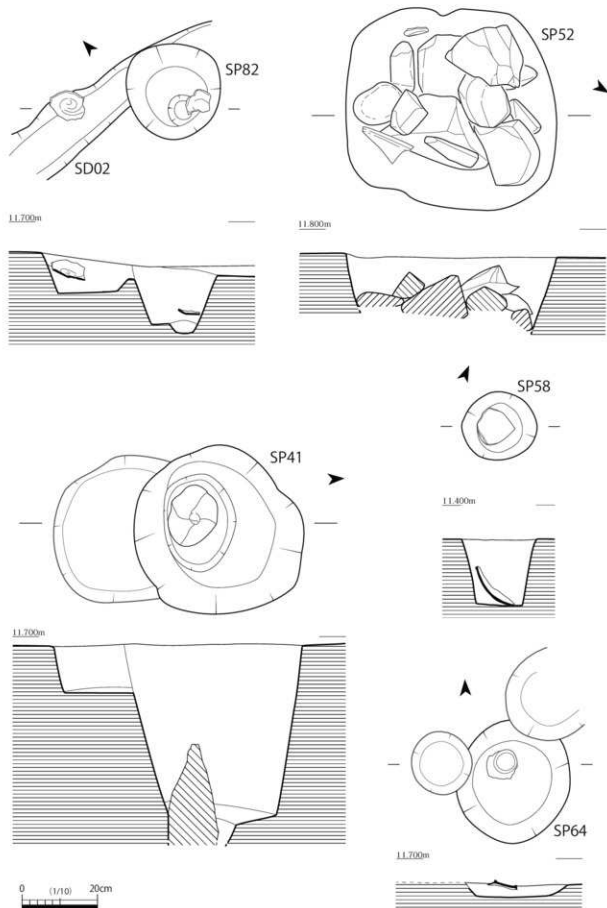


0 (1/20) 50 cm

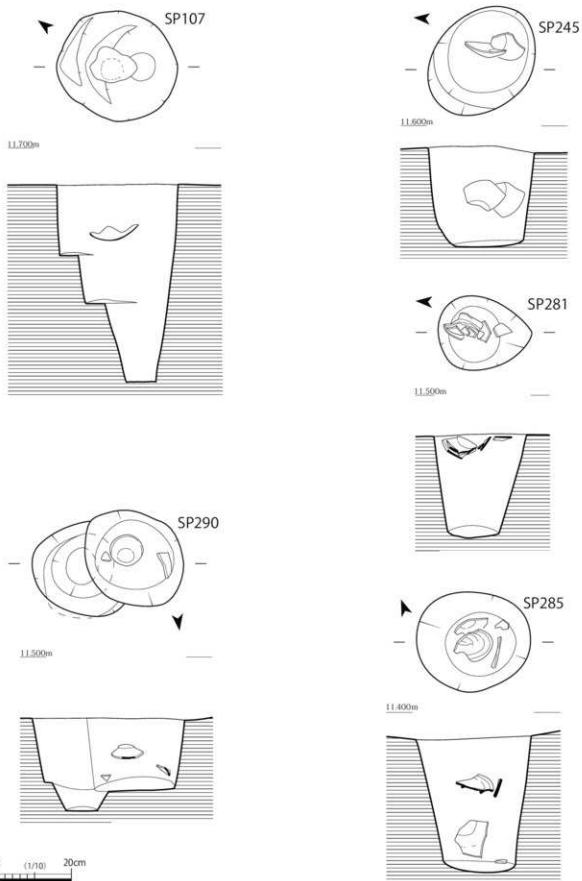
第 27 図 3 区土坑遺物出土状況実測図(2)



第 28 図 3 区土坑遺物出土状況実測図(3)



第 29 图 3 区柱穴遺物出土状況実測図(1)



第 30 图 3 区柱穴遺物出土状況実測図(2)

4 4 区の遺構

(1) 調査区の概要

4 区の遺構検出面の標高は、8.39 m から 8.95 m である。1 区に近い北側が高く、南側が低い。遺構は、1 区に隣接する調査区の北側に集中し、中央やや南西よりもわずかに分布している。その間に遺構がみられないのは、自然流路が横切っているためである。遺構は、溝 1 条、土坑 15 基、柱穴 30 個、井戸 1 基を検出した。1 区の SD04 が 4 区の方に流下しているが、続きにあたる遺構は検出されなかった。調査区南西端付近には、木の枝などを利用した暗渠が設置されていて、今でも常になが水が通っている。1 区と同様に残りが浅い遺構が多く、後世の土地利用によって上面が削り取られたとみられる。遺構検出面は、南西方向に向かって低くなっていき、調査区南西端付近で落ち込んでいる。地形的にみて、調査区の南西には大きな流路があるものとみられる。しかし、4 区南西の道を挟んだ隣接地は、現在は荒地となっているが、その標高は 4 区より 20～40cm 高くなっている。この土地の小字は「番所」という。

4 区の南西端から 50 m 余先には、「寄江」という小字がある。4 区は「ウツキ」という小字に位置するが、その名の由来が樹木のウツギだとすると、昔は耕作地の境界木としてよく植えられていたということなので、この流路が土地の境界だったのかもかもしれない。『防長風土注進案』の「大崎村荒圖」によると、「ウツキ」に隣接する「寄江」の先は「右田領山根佐野ノ内」となっているため、その境界に関係している可能性がある。4 区南西の隣接地「番所」という小字は、この境界に関わる地名である可能性がある。標高が高いのは、かつて盛土をしたためかもしれない。

遺物は、土師器、須恵器が出土しているが、出土数は少ない。

基本層序（第 32 図）は、現在の耕作土の下に、きわめて硬い盤土、その下に堆積土が重なっている。A-A' では、比較的整合して堆積している。7～9 層は、SK01、SK04 の埋土である。B-B'、C-C' では、さまざまな砂質土層が重なり、堆積と浸食をくり返している様子がわかる。C-C' では、南西に向かって、遺構検出面が自然流路の浸食で下っているところが 2 カ所ある。しかし、B-B' では 1 カ所しか見られず、調査区内で自然流路が 2 つに分かれていることがわかる。B-B' の 6 層からは、土師器甕（第 55 図、図版 36）の口縁部が出土している。古墳時代のものとみられる。

(2) 主な遺構

SE01（第 35 図、図版 17）

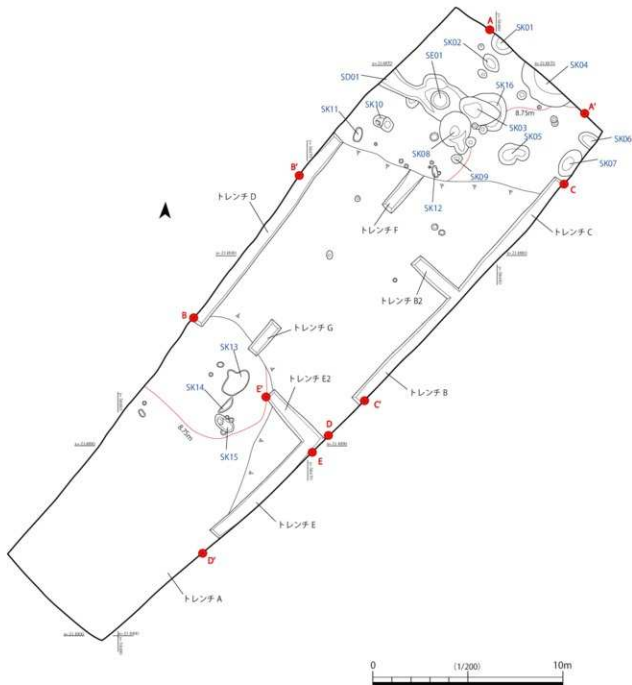
調査区北側のほぼ中央に位置する。SK03、SK08、SK16 及び SD01 と重複している。先後関係は、SE01 → SK03 → SK08、SK16 → SK03、SE01 → SD01。SE01 と SK16 の先後関係、SE01 と SD01 の先後関係は不明である。SE01 は、平面形がほぼ円形で、長径 102cm、短径 94cm。残存する深さは、SE01 のみでは 35cm、遺構面からは 65cm で、曲物による井戸枠があったものと考えられる。断面図 A-A' の 17 層が SE01 の埋土で、須恵器の杯身（第 55 図、図版 36）が出土している。井戸が埋まり、上部が削り取られたのに 6 層と 11～16 層が堆積し、その後、SK03 の 1・2 層と SD01 による 7～9 層が堆積したものとみられる。出土した須恵器の時期は、奈良時代後半である。

SK04

調査区北東端に位置する。半分程度は調査区外である。平面形は円形、もしくは楕円形で、長軸は312cm、直交方向は調査区内で120cm、深さ45cm。土師器の杯、椀（第55図、図版36）及び東播系須恵器片が出土している。すべて細片で、この遺構に流れ込んだものと考えられる。鎌倉時代とみられる。

SK08

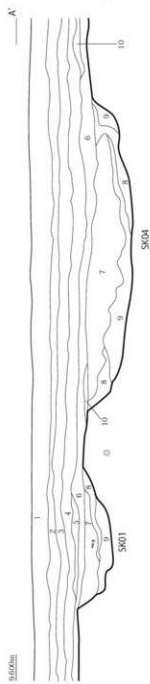
調査区北側のほぼ中央に位置し、SE01、SK03と重複している。平面形は不整形円形。長軸223cm、短軸170cm、深さ42cm。土師器片が出土している。



第31図 4区遺構配置図

4 区 北壁土層断面図 (A-A')

A 30.00m

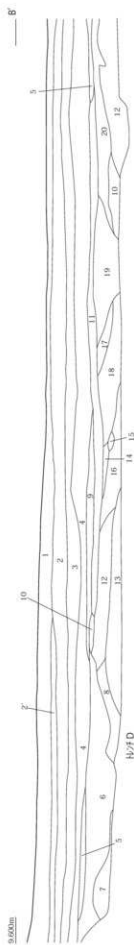


土層凡例

- 1 耕作土① 灰褐色土 (10YR5/2)
- 2 耕作土② 暗灰褐色土 (10YR5/2)
- 3 耕作土③ 暗灰褐色土 (10YR5/2)
- 4 耕作土④ 暗灰褐色土 (10YR5/2)
- 5 耕作土⑤ 暗灰褐色土 (10YR5/2)
- 6 耕作土⑥ 暗灰褐色土 (10YR5/2)
- 7 耕作土⑦ 暗灰褐色土 (10YR5/2)
- 8 耕作土⑧ 暗灰褐色土 (10YR5/2)
- 9 耕作土⑨ 暗灰褐色土 (10YR5/2)
- 10 耕作土⑩ 暗灰褐色土 (10YR5/2)

4 区 西壁土層断面図 (B-B')

B 30.00m



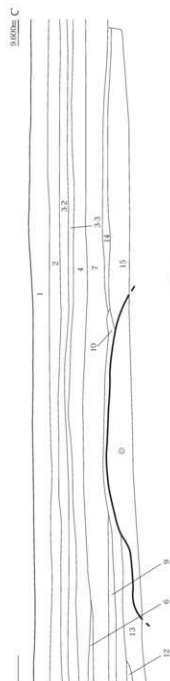
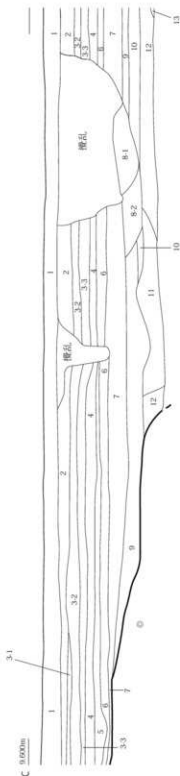
土層凡例

- 1 耕作土① 灰褐色土 (10YR5/2~5/1)
- 2 耕作土② 暗灰褐色土 (10YR5/2)
- 3 耕作土③ 暗灰褐色土 (10YR5/2)
- 4 耕作土④ 暗灰褐色土 (10YR5/2)
- 5 耕作土⑤ 暗灰褐色土 (10YR5/2)
- 6 耕作土⑥ 暗灰褐色土 (10YR5/2)
- 7 耕作土⑦ 暗灰褐色土 (10YR5/2)
- 8 耕作土⑧ 暗灰褐色土 (10YR5/2)
- 9 耕作土⑨ 暗灰褐色土 (10YR5/2)
- 10 耕作土⑩ 暗灰褐色土 (10YR5/2)
- 11 耕作土⑪ 暗灰褐色土 (10YR5/2)
- 12 耕作土⑫ 暗灰褐色土 (10YR5/2)
- 13 耕作土⑬ 暗灰褐色土 (10YR5/2)
- 14 耕作土⑭ 暗灰褐色土 (10YR5/2)
- 15 耕作土⑮ 暗灰褐色土 (10YR5/2)
- 16 耕作土⑯ 暗灰褐色土 (10YR5/2)
- 17 耕作土⑰ 暗灰褐色土 (10YR5/2)
- 18 耕作土⑱ 暗灰褐色土 (10YR5/2)
- 19 耕作土⑲ 暗灰褐色土 (10YR5/2)
- 20 耕作土⑳ 暗灰褐色土 (10YR5/2)

0 1m
(140)

第 32 図 4 区土層断面図(1)

4区 東壁土層断面図 (C-C')



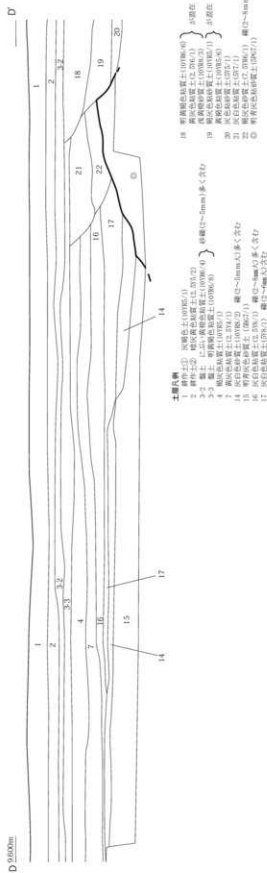
- 土層凡例
- 1 耕作土 (00000)
 - 2 耕作土 (00000)
 - 3-1 腐植土 (00000)
 - 3-2 腐植土 (00000)
 - 3-3 腐植土 (00000)
 - 4 腐植土 (00000)
 - 5 腐植土 (00000)
 - 6 腐植土 (00000)
 - 7 腐植土 (00000)

- 8-1 腐植土 (00000)
- 8-2 腐植土 (00000)
- 9 腐植土 (00000)
- 10 腐植土 (00000)
- 11 腐植土 (00000)
- 12 腐植土 (00000)
- 13 腐植土 (00000)
- 14 腐植土 (00000)
- 15 腐植土 (00000)



第 33 図 4区土層断面図(2)

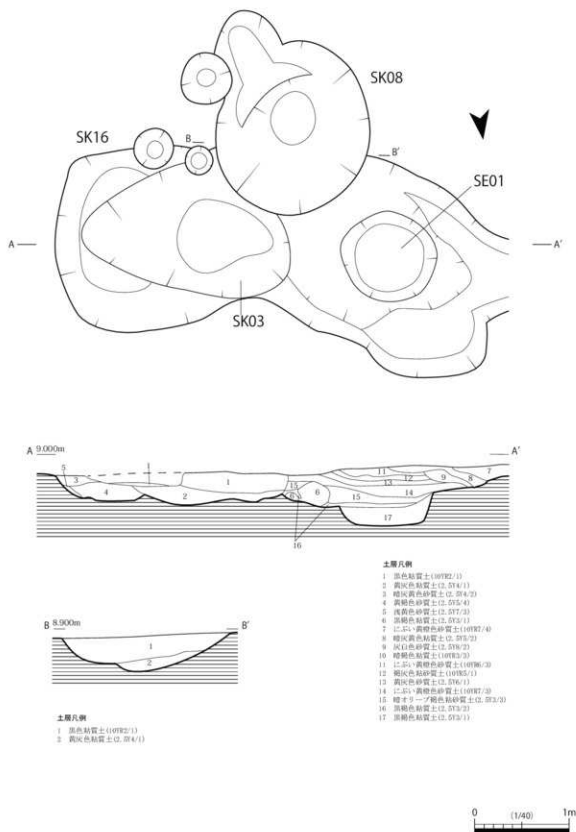
4区 東壁土層断面図 (D-D')



4区 N2/E2 土層断面図 (E-E')



第34図 4区土層断面図(3)



第 35 图 4区遺構実測図

第1表 溝一覧表(1)

地区	遺構 番号	規 模			出土遺物	時代	概要
		検出長 (m)	幅 (cm)	深さ (cm)			
1	SD01	18.10	27~72	3~14	須恵器壺か蔵骨器か火舎、 杯(身)、土師器杯	奈良後半	北西-南東方向へ直線的に走行し、南 端部で東側に向かって弧状に屈曲し延 伸。北への延伸につれて溝幅を増す。
1	SD02	7.10	46~80	4~8	須恵器杯(身・蓋)	平安初頭	北-南方向へ走行。北半部は西側に向 かって弧状に屈曲し、南半部は直線的 に延伸。
1	SD03	3.06	34~42	1~3	須恵器		北西-南東方向へやや南に屈曲しなが ら走行。
1	SD04	13.12	80~136	7~20			北-南方向へ「S」字状に屈曲。走行。 南端部では溝幅を増す。
1	SD05	7.19	24~46	5~6			北-南方向へ直線的に走行。
1	SD06	2.10	16~42	3~8			北東-南西方向へ直線的に走行。
2	SD01	8.20	64~160	4~5			北-南方向へ直線的に走行。北への延 伸につれて溝幅を増す。
2	SD02	2.14	47~64	6~21			北東-南西方向へ走行。中央部で東側 に向かって弧状に屈曲。
2	SD03	1.76	16~22	7~8	土師器		東-西方向へ直線的に走行。溝幅規模 は小さい。
2	SD04						暗渠
2	SD05						暗渠
2	SD06						暗渠
2	SD07	4.20	34~82	2~5			北-南方向へ走行。中央部で東へ分岐。
3	SD01	24.83	108~ 212以上	8~30	須恵器壺、土師器杯・皿・高台 付杯・高台付皿・台付皿・碗・ 足鍋・壺・甕、瓦質土器鍋・足 鍋・羽釜、青磁碗・皿、白磁 碗・皿、用途不明滑石製品、土 製品(管状土鉢)	平安後期 ~ 室町前期	北-南方向へ直線的に走行。東岸に流 路に沿った平坦面を有する。
3	SD02	18.08	54~86	3~7	土師器杯・皿、瓦質土器	鎌倉後半	東-西方向へ直線的に走行し、東端部 付近から北へ屈曲。
3	SD03	2.60	28~35	3~5	土師器皿・碗	平安末~ 鎌倉初頭	東-西方向へ直線的に走行。
3	SD04	2.31	20~31	2~3	土師器皿		北-南方向へ直線的に走行。南への延 伸につれて溝幅を増す。
3	SD05	2.68	22~24	1~4	土師器		北-南方向へ走行。南半部は直線的に 延伸し、北半部は西側に向かって弧状 に屈曲。
3	SD06	7.18	96~99	5~9	土師器杯・皿・碗	平安末~ 鎌倉前半	北-南方向へ直線的に走行。
3	SD07	0.98	18~22	2~4	土師器、東播系須恵器	鎌倉後半	北-南方向へ走行。
3	SD08	1.69	54	11~15	土師器皿		北東-南西方向へ走行。
3	SD09	3.98	71~86	15~31	土師器杯、土製品(管状土鉢)	平安末~ 鎌倉前半	北-南方向へ直線的に走行。
3	SD10	2.40	46~103	8~14	土師器杯・皿・碗、白磁碗、土製 品(管状土鉢)	平安末~ 鎌倉初	北-南方向へ直線的に走行。南への延 伸につれて溝幅を増す。
3	SD11	1.86	24~54	4~9	土師器皿・碗・甕、東播系須恵器	鎌倉後半	北-南方向へ直線的に走行。東岸に は、流路に沿った平坦面を有する。
3	SD12	4.90	66~82	2~4	土師器		北東-南西方向へ直線的に走行。
3	SD13	4.37	40~42	2~3	土師器		北-南方向へ直線的に走行。SD14と並 走。
3	SD14	2.34	最大幅 31	7~9	土師器碗	平安末~ 鎌倉前半	北-南方向へ直線的に走行。SD13と並 走。
3	SD15	7.16	58~74	7~9	土師器皿・碗、白磁皿	平安末~ 鎌倉前半	東-西方向へ直線的に走行。東への延 伸につれて溝幅を増す。

第2表 溝一覧表(2)

地区	遺構番号	規模			出土遺物	時代	概要
		検出長(m)	幅(cm)	深さ(cm)			
3	SD16	9.68	57~65	4~7	土師器杯、青磁碗、白磁皿	鎌倉後半 ～室町	北西～南東方向へ直線的に走行。
3	SD17	0.80	最大幅 18	3			北～南方向へ走行。
3	SD18	7.61	26~36	4~8	土師器碗、瓦質土器	中世	北西～南東方向へ直線的に走行。溝幅規模は小さい。
3	SD19	10.78	62~72	3~4			東～西方向へ直線的に走行。SD20を切る。
3	SD20	4.50	56~60	1~5	土師器皿・碗、石織	平安末 ～鎌倉前半	東～西方向へ直線的に走行。SD19に切られる。
3	SD21	1.56	最大幅 26	3~5	土師器杯		東～西方向へ走行。SD29と同一溝の可能性あり。
3	SD22	0.66	最大幅 20	2~4			北東～南西方向へ走行。
3	SD23	5.30	20~26	5~11			東～西方向へ直線的に走行。溝幅規模は小さい。
3	SD24	1.10	16~20	2~3			北～南方向へ走行。溝幅規模は小さい。
3	SD25	1.04	最大幅 22	3			東～西方向へ走行。
3	SD26	0.92	12~14	2~3			東～西方向へ走行。溝幅規模は小さい。
3	SD27	0.74	最大幅 22	3			東～西方向へ走行。
3	SD28	0.98	最大幅 22	2~3			東～西方向へ走行。
3	SD29	1.88	22~26	1~2			東～西方向へ走行。溝幅規模は小さい。SD21と同一溝の可能性あり。
3	SD30	2.12	22~25	2			北～南方向へ走行。溝幅規模は小さい。
3	SD31	0.78	最大幅 28	2~4	土師器		北～南方向へ走行。
3	SD32	1.34	24~26	1~2			北～南方向へ直線的に走行。溝幅規模は小さい。
3	SD33	1.50	15~19	1~2			東～西方向へ直線的に走行。溝幅規模は小さい。
3	SD34	1.54	32~38	2~3			東～西方向へ走行。
3	SD35	1.70	24~26	1~2	土師器		北～南方向へ直線的に走行。溝幅規模は小さい。
3	SD36	1.71	22~26	2~6			東～西方向へ直線的に走行。溝幅規模は小さい。
3	SD37	3.68	20~34	4~8			東～西方向へ直線的に走行。
3	SD38	1.96	26~28	2~3			東～西方向へ直線的に走行。
3	SD39	4.82	58~70	2~11	土師器杯・皿、白磁碗	鎌倉後半	北～南方向へ直線的に走行。
3	SD40	0.54	最大幅 12	3			東～西方向へ走行。
3	SD41	4.24	140	3~5	土師器杯・皿、東播系須恵器	鎌倉後半	北西～南東方向へ直線的に走行。
3	SD42	1.16	17~21	1~4			北東～南西方向へ走行。溝幅規模は小さい。SD43と並走。
3	SD43	1.43	20~30	3~7			北東～南西方向へ走行。SD42と並走。
4	SD01	2.35	70~125	6~16			北西～南東方向へ走行。

第3表 土坑一覧表(1)

地区	遺構 番号	平面形	規模 (cm) [現存長]			出土遺物	時代	備考
			長軸	短軸	深さ			
1	SK01	円形もしくは 楕円形	[66]	[25]	13	須恵器	古代	
1	SK02	不整円形もしくは 楕円形	[126]	[30]	4			
1	SK03	円形	78	58	9			
1	SK04	円形	58	54	12	須恵器杯(身・蓋)・甕	奈良後半	
1	SK05	楕円形	110	41	5			SD04を切る。
1	SK06	円形	90	79	47	須恵器	古代	SD04を切る。
1	SK07	不整楕円形	80	52	6			
1	SK08	円形	118	92	11			
1	SK09	不整楕円形	160	69	15	須恵器	古代	
1	SK10	方形	82	72	13	陶器	中世	SD05を切る。
1	SK11	不整楕円形	122	58	6			
1	SK12	円形	86	80	4			
1	SK13	楕円形	63	38	11			
2	SK01	不整円形	120	106	25			
2	SK02	円形	72	60	5	土師器		
2	SK03	楕円形	162	114	20			
2	SK04	不整円形	84	[78]	5			
2	SK05	不整楕円形	[126]	124	18			
2	SK06	楕円形	104	74	5			
2	SK07	不整楕円形	106	78	13	瓦質土器鍋	中世	底面に約10～15cmの 角礫散在。
2	SK08	不整長楕円形か	308	64	4			
2	SK09	隅円長方形	98	54	5	土師器杯	中世	
2	SK10	円形	[50]	50	9			
2	SK11	不整楕円形	177	82	10	瓦質土器足鍋	中世	SD01を切る。
2	SK12	円形	84	66	9			SD01を切る。
2	SK13	円形	70	60	15	土師器		
2	SK14	楕円形	80	47	7			
2	SK15	楕円形	108	74	12	土師器		SD02を切る。
2	SK16	不整楕円形	272	196	34	土師器		
2	SK17	不整楕円形	138	106	36	土師器		SK18を切る。

第4表 土坑一覧表(2)

地区	遺構 番号	平面形	規模 (cm) [現存長]			出土遺物	時代	備考
			長軸	短軸	深さ			
2	SK18	不整方形	242	234	17			SK17に切られる。
2	SK19	不整楕円形	195	113	8			
2	SK20	不整円形	212	192	51	土師器		SK26を切る。
2	SK21	楕円形	70	34	5			
2	SK22	不整楕円形	140	60	7			
2	SK23	楕円形	115	72	9	土師器杯・皿、粘土塊	中世	
2	SK24	楕円形	[99]	88	5	土師器皿・椀	古代末～ 中世	SD07に切られる。
2	SK25	長楕円形	[90]	56	5			SK20に切られる。
2	SK26	不整長楕円形	[316]	120	21			
2	SK27	不整長方形	[80]	46	4			
3	SK01	隅円長方形	174	96	17	土師器杯・皿・椀・鍋・羽 釜、瓦質土器・陶器	室町	SD01を切る。
3	SK02	楕円形	138	72	4	土師器皿		SD06を切る。
3	SK03	円形	68	50	3			
3	SK04	方形もしくは 長方形	[111]	[48]	8	土師器杯・皿・椀、瓦質土 器鍋・掻鉢	室町	
3	SK05	楕円形か	96	[72]	23	土師器皿	中世	SD06を切る。
3	SK06	不整楕円形	90	64	6	土師器皿	中世	SD02を切る。
3	SK07	楕円形	107	58	16	土師器椀・皿	平安末	
3	SK08	不整円形	70	68	7	土師器椀・皿、白磁椀	平安末～ 鎌倉	
3	SK09	楕円形	208	96	23		中世	SD06を切る。
3	SK10	円形か	76	[70]	6	土師器皿	中世	SK18に切られる。
3	SK11	円形	82	66	45	瓦質土器掻鉢	室町	SD02を切る。
3	SK12	不整円形	69	56	13	土師器椀	平安末～ 鎌倉初頭	
3	SK13	円形	65	53	3	土師器皿	中世	
3	SK14	不整楕円形	80	52	9	土師器皿・椀	古代末～ 中世	
3	SK15	円形もしくは 楕円形	[80]	[53]	7	土師器椀	古代末～ 中世	
3	SK16	円形もしくは 楕円形	[78]	[65]	3	土師器杯・皿	古代末～ 中世	SA01に切られる。
3	SK17	不整長方形	[243]	[124]	8	土師器杯・椀	古代末～ 中世	SD02・SP61に切られ る。
3	SK18	楕円形か	[100]	96	4	土師器杯・皿・椀	中世	SK10を切り、SD02・ SA02に切られる。
3	SK19	方形もしくは 長方形	84	[58]	7			
3	SK20	円形	78	74	12	土師器杯・椀	古代末～ 中世	

第5表 土坑一覧表(3)

地区	遺構 番号	平面形	規模 (cm) [現存長]			出土遺物	時代	備考
			長軸	短軸	深さ			
3	SK21	円形	62	52	10			
3	SK22	不整楕円形	94	46	3			SD09を切る。
3	SK23	不整円形	78	58	12	土師器碗	古代末～ 中世	
3	SK24	不整楕円形	118	74	11	土師器		SK26に切られる。
3	SK25	楕円形	74	54	19	土師器		
3	SK26	楕円形	78	55	12	土師器皿・碗	古代末～ 中世	SK24を切る。
3	SK27	楕円形	76	58	2	土師器		SD13を切る。
3	SK28	不整楕円形	105	43	5			SD12・13を切る。
3	SK29	不整円形	125	120	86	土師器杯・皿・碗、東播系 須恵器、瓦質土器	鎌倉～ 室町前半	中位に扁平角礫充 填。SK30を切る。
3	SK30	不整楕円形か	[88]	58	16	土師器碗	古代末～ 中世	
3	SK31	不整円形	110	98	15			
3	SK32	楕円形	106	72	3	土師器皿・碗	古代末～ 中世	
3	SK33	不整方形か	106	[90]	2			SK32に切られる。
3	SK34	不整円形	146	128	11	土師器	中世	
3	SK36	隅円長方形	122	88	10			
3	SK38	楕円形か	151	[74]	33			
3	SK39	楕円形	138	94	30	土師器杯・皿・高台付皿・ 台付皿・碗	平安末～ 鎌倉	
3	SK40	円形	84	74	13			
3	SK41	隅円長方形	265	168	12	土師器杯・皿・高台付皿・ 碗	平安末～ 鎌倉前半	
3	SK42	円形	64	32	18	土師器・瓦質土器・青磁	室町	
3	SK43	隅円長方形	173	92	46	土師器杯・皿・碗・羽釜・ 須恵器・牛歯・木杵	鎌倉	SK64を切り、SD16に 切られる。
3	SK44	円形	102	98	24	土師器杯・皿・碗	平安末～ 鎌倉前半	SD10を切る。
3	SK45	円形	78	[64]	35			
3	SK46	円形	68	64	4		古代	SD15に切られる。
3	SK47	楕円形	84	55	2			
3	SK48	楕円形	72	52	11			
3	SK49	不整楕円形	190	102	3	土師器杯・皿・高台付皿・ 碗・甕鍋	平安末～ 鎌倉	底面に連結する円形 の焼跡状の窪み。
3	SK50	楕円形	[85]	[31]	[14]	土師器杯・皿・高台付皿	中世	
3	SK51	長楕円形	178	85	30	土師器皿・高台付皿・鉢・ 瓦質土器鍋・足鍋・播鉢・ 青磁碗、鉄釘	室町	底面中央部に最大厚9 cmの炭化物。SK53・ 65を切る。
3	SK52	楕円形	[72]	47	3			

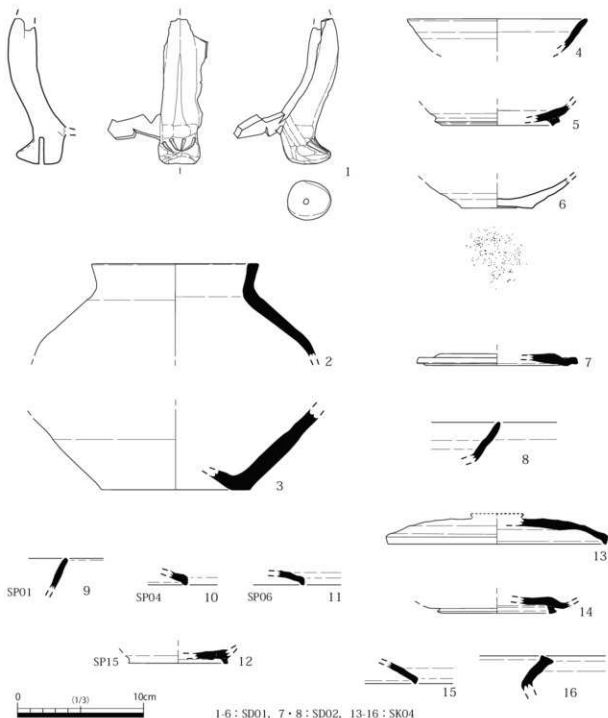
第6表 土坑一覧表(4)

地区	遺構 番号	平面形	規模 (cm) [現存長]			出土遺物	時代	備考
			長軸	短軸	深さ			
3	SK53	隅円長方形	[81]	40	4			SK56に切られる。
3	SK54	不整円形	60	46	7	須恵器		
3	SK55	楕円形	90	55	5			
3	SK56	円形	64	52	4			SK53を切る。
3	SK57	隅円方形もしくは長方形	[72]	[38]	17	土師器		
3	SK58	円形か	67	[40]	44	土師器杯・皿・羽釜、白磁 椀	鎌倉	
3	SK59	円形	80	70	12	土師器皿		
3	SK60	円形もしくは楕円形	[90]	[29]	18	瓦質土器足鍋	中世	
3	SK61	不整円形	104	84	29	土師器杯・高台付皿・椀、 瓦質土器	平安末～ 鎌倉	SB04(SP288)を切る。
3	SK62	円形もしくは楕円形	[122]	[32]	21			
3	SK63	不整楕円形	98	66	8	土師器椀	平安末～ 鎌倉前半	
3	SK64	楕円形か	186	[24]	9	土師器	古代	SK43に切られる。
3	SK65	不整楕円形	[132]	124	13			
4	SK01	円形もしくは楕円形	[130]	[67]	41	土師器杯		
4	SK02	楕円形	112	72	30			
4	SK03	不整楕円形	216	157	36	土師器		SE01・SK16を切り、 SK08に切られる。
4	SK04	円形もしくは楕円形	[312]	[120]	45	土師器杯・椀、東播系須恵 器	鎌倉	
4	SK05	不整楕円形	170	112	14			
4	SK06	楕円形か	[92]	75	4	土師器		
4	SK07	楕円形	160	[92]	39			
4	SK08	不整円形	223	170	42	土師器		SE01・SK03を切る。
4	SK09	円形	60	48	14			
4	SK10	楕円形	112	62	36			
4	SK11	隅円長方形	77	42	4			
4	SK12	楕円形	60	30	2			
4	SK13	不整楕円形	162	107	6			
4	SK14	不整楕円形	105	32	5			
4	SK15	楕円形	120	65	8			
4	SK16	円形	[210]	192	28			SK03に切られる。

5 出土した遺物

(1) 1区出土遺物

1はSD01出土（第7図）の須恵器の獣脚で、体部下半の一部がついている。残存器高は11.5cmで、体部下半は湾曲して立ち上がっており、壺、骨蔵器あるいは火舎に取り付けられた三足の脚部の1つとみられる。脚部は型によって成形され、体部に取り付けられたものとみられる。接地面に直径0.4cm、深さ2.1cmの円孔があるが、未貫通である。先端部には、ヘラ状の器具による押圧で4本の線を施し、獅子の足を表現している。2・3はSD01出土（第7図）の須恵器の壺である。1の近くで出土した。2は口縁部で、復元口径が13.0cm。内外面とも回転ナデ調整を施している。3

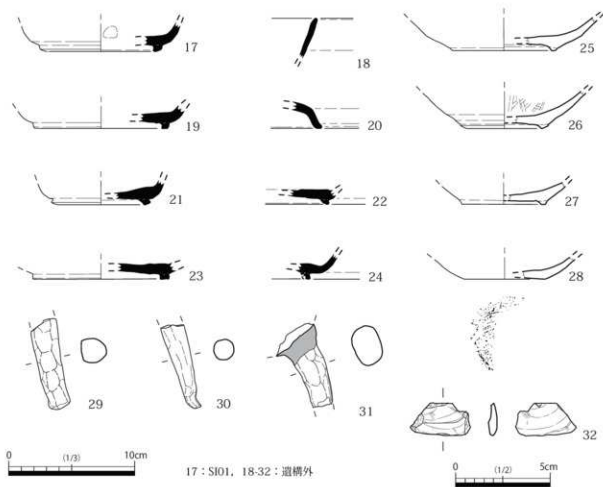


第36図 1区出土遺物実測図(1)

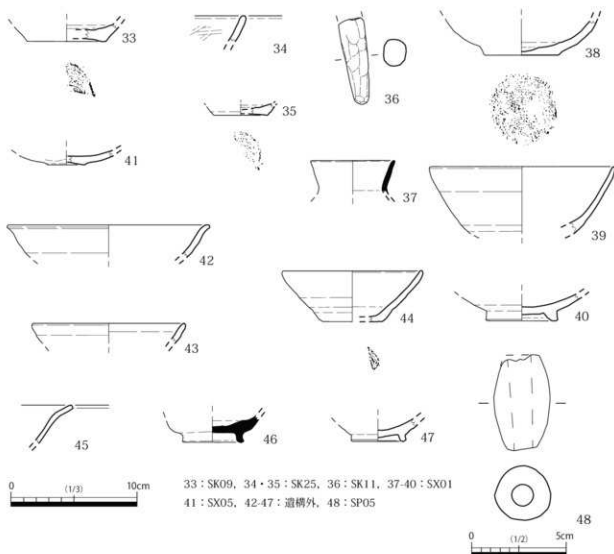
は底部で、復元底径は 11.8cm。内面には同心円の当て具痕が残っている。また、底部は焼きひずみによって歪んでいる。4～6も SD01 出土。4・5は須恵器の杯身である。4は口縁部で復元口径は 14.2cm。5は底部で、復元底径は 8.8cm、傾斜する高台の下面は窪んでいる。6は土師器の杯の底部で、復元底径 5.6cm。

7・8は SD02 出土の須恵器。7は杯蓋で復元口径は 12.8cm。中央部の形状は不明。8は杯身の口縁部である。9～12は柱穴から出土した須恵器。9は SP01 出土の杯身の口縁部。10は SP04 出土、11は SP06 出土の杯蓋の口縁部。ともに形状が鳥嘴状を呈する。12は SP15 出土の底部。13～16は SK04 出土の須恵器。13、15は杯蓋の口縁部。ともに鳥嘴状の形状を呈する。14は杯身の底部。高台の内側端が接地する。16は甕の口縁部で端部が肥厚している。17は SI01 出土の須恵器の杯身。内面に指紋が残っている。

18～32は遺構に伴わない遺物である。18は杯身の口縁部、19・21～24は須恵器の杯身の底部、20は杯蓋。22・23は高台の畳付が窪んでおり、23はそれが沈線状になっている。25～28は土師器で、25～27は椀で内面にヘラミガキ。25の底部は回転糸切りの後に高台を取り付けている。28は杯で、底部は回転糸切りである。29～31は足鐙の脚部である。29は土師器、30・31は瓦質土器。30は端部が獣脚状になっており、31の上端部には煤が付着している。32は姫島産黒曜石の剥片で、長さ 3.2cm、幅 1.7cm、厚さ 0.5cm である。



第 37 図 1 区出土遺物実測図(2)



第38図 2区出土遺物実測図

(2) 2区の出土遺物

33はSK09から出土した土師器の杯の底部で、回転糸切りである。復元底径は6.2cm。34・35はSK25出土の土師器で、34は碗の口縁部で内面にヘラミガキ、35は皿の底部で、回転糸切りである。復元底径は4.2cm。36はSK11から出土した瓦質土器の足鍋で、脚部の先端部である。

37～40はSX01から出土。37は須恵器で、小型壺の口縁部である。復元口径は6.7cm。38は土師器の杯で、底部は回転糸切りで、板目圧痕がみられる。39は土師器の碗である。復元口径は14.6cmで、底部を欠失する。40は青磁の碗の底部で、復元底径は5.7cm。高台はケズリ出しで、龍泉窯系である。41はSX05出土の青磁の皿の底部で、側面は軸を掻き取っている。

42～47は遺構に伴わない遺物である。42～45は土師器である。42は碗の口縁部で、復元口径は16.1cm。外面に煤が付着している。43・44は杯。43は口縁部で、復元口径12.2cm。外面に丹塗の痕がみられる。44は底部の中央部を欠失する。復元口径11.2cm、底径4.7cm、器高5.0cm。底部に糸切りがみられる。45は鉢の口縁部。46は須恵器の小型壺で、底径4.9cm。47は天目碗の底部で、底径4.4cm。釉は黒色で、高台脇は軸を掻き取っている。48はSP05出土の管状土錘で、長さ5.1cm、幅2.9cm、孔径0.9～1.2cm。

(3) 3区の出土遺物

①掘立柱建物・柵列

49・50はSB02を構成する柱穴から出土した土師器の杯である。49はSP245から出土した。口径は14.0cm、底径7.0cm、器高4.3cm。体部は内湾気味に立ち上がり、内外面とも回転ナデ調整で、底部に板目圧痕がある。50はSP100から出土した底部で、復元底径は5.6cm。底部は回転系切りである。

51はSB04を構成するSP288から出土した土師器の碗の底部である。復元底径は6.0cm。外面は回転ナデの後にナデ調整を施しているが、内面は摩滅により調整不明。

52～66・68・69はSB05を構成する柱穴から出土した。

52～54・61・62・66はSP285から出土した。52・53は土師器の杯である。52は底部である。回転系切りで、板目圧痕がみられる。復元底径は5.7cm。53は口縁部である。54は土師器の高台付皿である。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は、くの字状に屈折して外反している。復元口径は14.2cmで、復元底径は7.6cmである。内外面とも回転ナデによる調整を施し、回転系切りの後、高さ1.4cmの高台を取り付けている。高台はハの字状に広がっている。61は土師器の皿の底部で、回転系切りである。復元底径は6.0cmである。62は土師器の台付皿の底部である。底径は3.8cmで、内外面とも摩滅が進行しているが、回転系切りがみられる。66は白磁の皿である。復元口径は12.6cm、底径は5.8cm。内外面ともに施軸しているが、外面下半は露胎である。底部は回転ヘラケズリが施され、削り出し高台となっている。

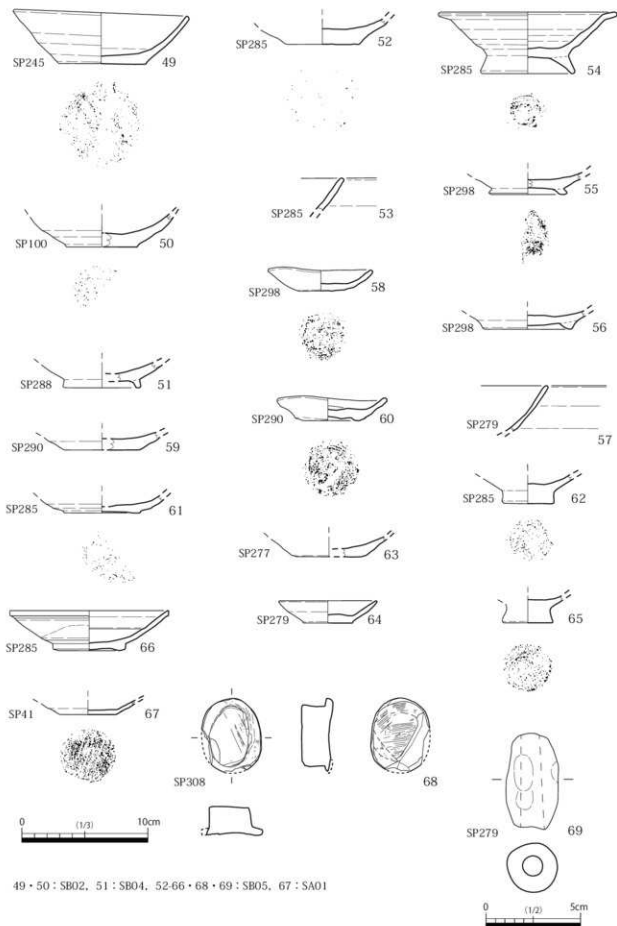
55・56・58はSP298から出土した土師器である。55・56は碗の底部である。55は復元底径が5.8cm。底部は回転系切りで、高台が貼り付けられている。56は復元底径が6.8cm。内外面とも摩滅が進行している。58は皿である。口径8.2cm、底径3.7cm、器高1.9cm。口縁部はやや歪んでおり、底部は回転系切りである。

57・64・69はSP279から出土した。57は土師器の碗の口縁部である。器壁が薄く、やや内湾している。内外面とも回転ナデの後、内面はさらにナデ調整で仕上げている。64は土師器の皿で、口縁部を欠損している。復元底径は3.9cm。底部は回転系切りである。69は管状土錘である。長さは5.0cm、幅2.7cmで、孔径は1.0～1.2cm。重さは29.7gである。灰白色で、外面は指圧整形とナデ調整がみられ、ふっくらとしたスタイルである。

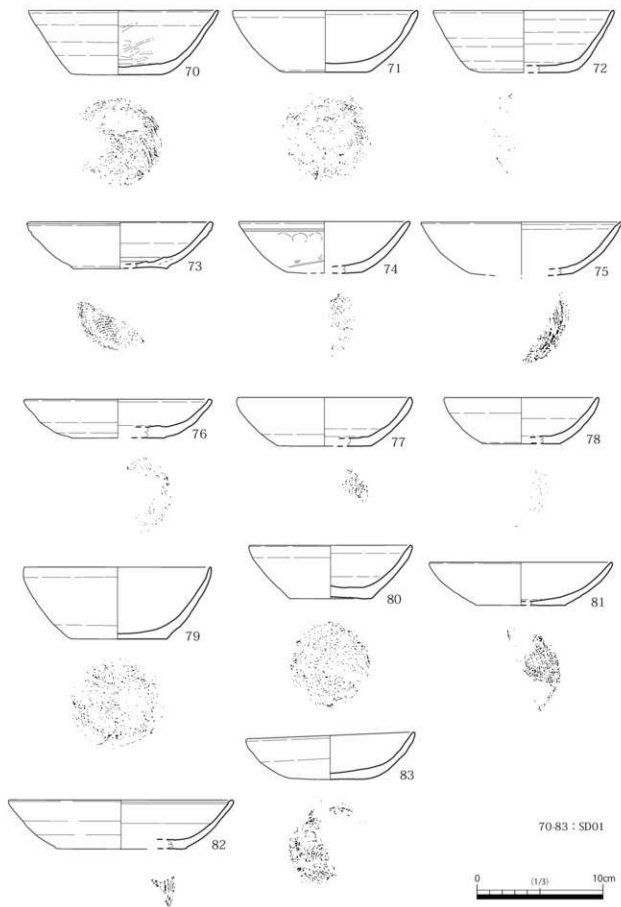
59・60はSP290出土の土師器である。59は杯の底部で、内外面ともに摩滅が進行している。60は皿で、口径は8.4cm、底径4.6cm、器高2.0cm。全体に歪んでおり、底部は回転系切りである。

63・65はSP277から出土した土師器である。63は皿で、復元底径5.2cm。全体的に摩滅により調整の観察が困難だが、底部は回転系切りとみられる。65は皿である。復元底径は3.8cmで、底部は回転系切りである。

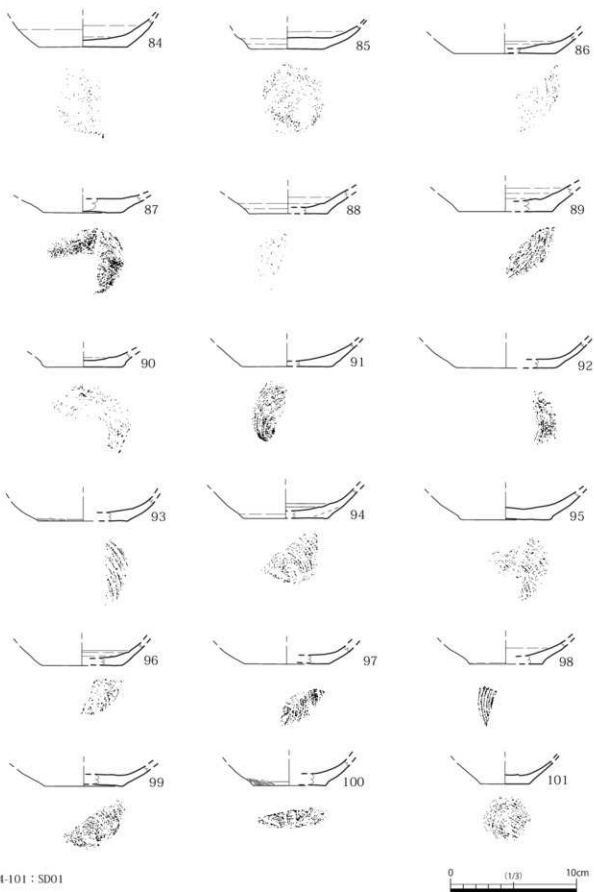
68はSP308から出土したバレン状石製品である。残存する長さは5.7cm、幅は4.7cm、厚さは2.2～2.4cm。平面形は楕円形で、外縁部の一部を欠損している。高さが1.9cmの突起部があり、シルクハットのような形状で滑石製である。突起部の一部も欠損している。石鍋の補修具とされるが、突起部に穿孔はなく、石鍋の内面となる面は、中央が緩やかに窪んでいる。



第 39 图 3 区出土遺物実測図(1)



第 40 图 3 区出土遺物実測図(2)



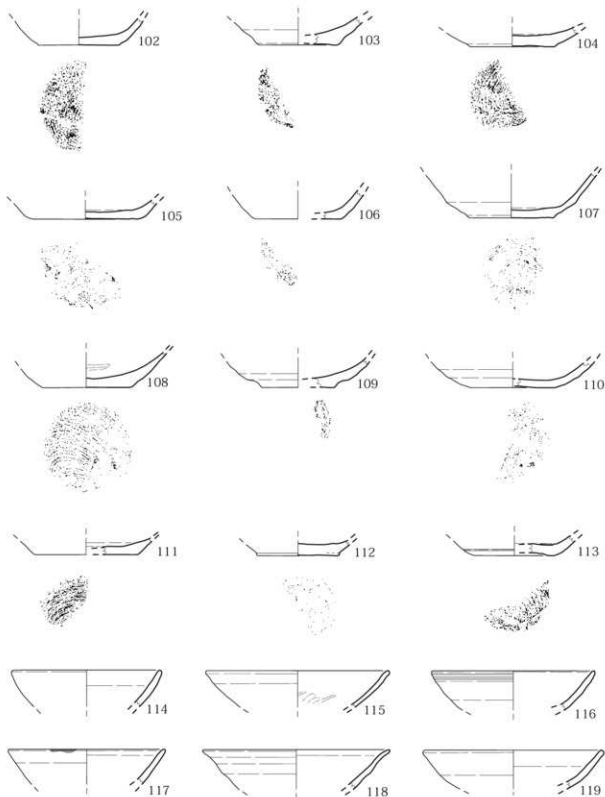
84-101 : SD01

第 41 图 3 区出土遗物实测图(3)

67 は SA01 を構成する SP41 から出土した土師器の皿で、器壁が薄い。底径は 4.4cm。底部は回転系切りで、板目圧痕がみられる。内外面ともに灰白色である。

② SD01

70 ～ 113 は土師器の杯で、底部は回転系切りである。



102-119 : SD01

第 42 図 3 区出土遺物実測図(4)

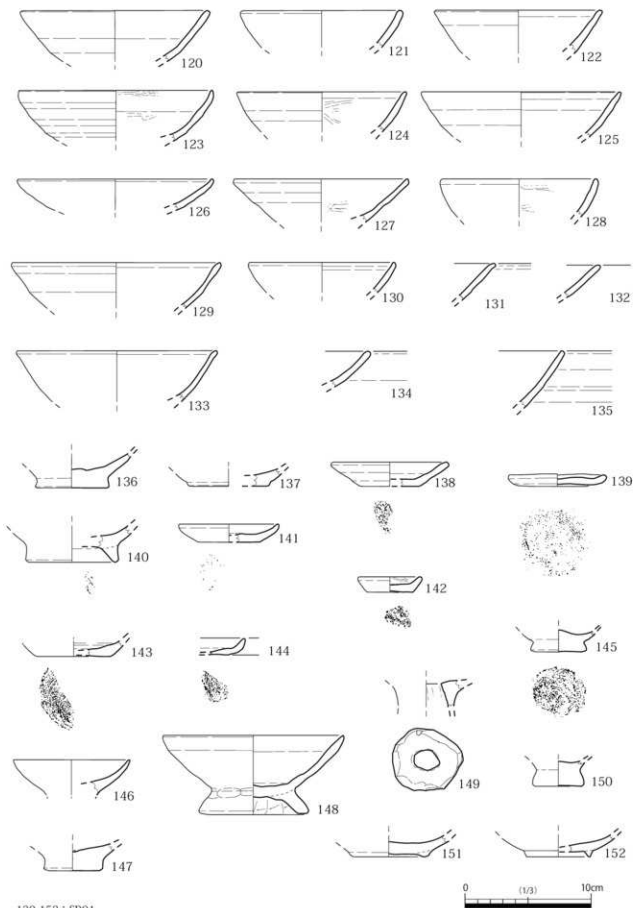


70 は復元口径 15.0cm、底径 7.4cm、器高 5.1cm。体部は外傾して立ち上がり、内面にヘラミガキがみられる。71 は復元口径 14.7cm、底径 7.4cm、器高 4.9cm。体部は内湾して立ち上がる。72 は復元口径 14.2cm、底径 7.0cm、器高 4.9cm。体部は外傾して立ち上がり、内外面ともに灰白色。73 は復元口径 14.4cm、復元底径 7.4cm、器高 3.7cm。体部はやや内湾して立ち上がり、内面にヘラケズリを施している。74 は復元口径 13.5cm、復元底径 6.0cm、器高 4.1cm。体部はやや内湾して立ち上がり、外面上位に沈線状の圈線がある。下位に指頭圧痕が並び、下部に工具痕がみられる。75 は復元口径 15.8cm、底径 8.2cm。内面にヘラミガキがみられる。76 は復元口径 15.0cm、復元底径 7.4cm、器高 3.1cm。体部は内湾して立ち上がる。77 は復元口径 13.7cm、復元底径 7.3cm、器高 3.9cm。体部は内湾して立ち上がる。78 は復元口径 12.3cm、復元底径 6.2cm、器高 3.7cm。体部はやや内湾して立ち上がる。79 は復元口径 14.8cm、復元底径 7.8cm、器高 5.7cm。体部は内湾して立ち上がる。外面下位が黒変している。80 は復元口径 12.9cm、底径 6.4cm、器高 4.2cm。体部はやや内湾して立ち上がる。81 は復元口径 14.5cm、復元底径 7.0cm、器高 3.4cm。体部は内湾して立ち上がる。82 は復元口径 17.6cm、復元底径 10.4cm、器高 4.9cm。体部は下位で内湾して立ち上がる。83 は復元口径 13.2cm、復元底径 6.8cm、器高 3.2cm。体部は外傾して開き、口縁部が傾いている。内面は回転ナデ後ヘラミガキか。

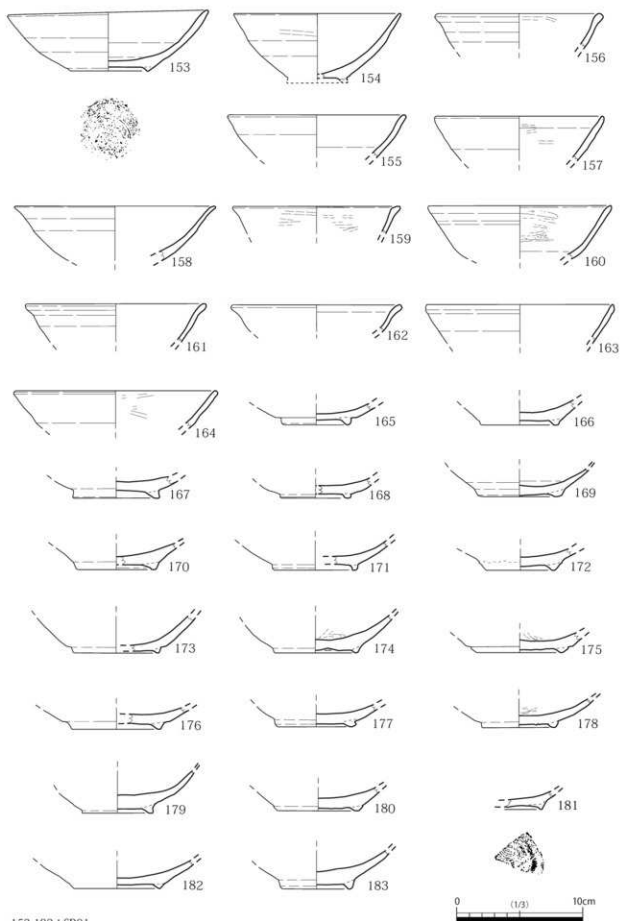
84～113 は口縁部を欠いている。84 は底部内面が中心まで湾曲している。86 は底部内面が緩やかに窪んでいる。87 はわずかに上げ底である。88 は見込みの周縁に段がついて内面中央が窪んでいる。89 は回転ナデによって見込みの周縁に凹線上の窪みができている。90 は見込みの中央がやや窪んでいる。91 は底部内面が中心付近まで湾曲している。94 は見込みの周縁に強い回転ナデによって段がついている。96 は内外面とも回転ナデだが、見込みの周縁に凹線上の段があり、その内側は回転ヘラケズリとなっている。99 はやや上げ底となっている。100 は外面に黒斑があり、糸切り痕が一部側面にはみ出している。101 は底部に板目圧痕がみられる。103・104 はわずかに上げ底となっている。107 は見込みの中央部が窪んでいる。体部は、外面下位に強い回転ナデによって凹凸ができており、薄い器壁で直線的に立ち上がっている。108 は内面に回転ナデの後にヘラミガキがみられる。109 は外面の底部と体部の接点で、強い回転ナデによって凹凸ができている。110 は底部の中央部がやや上がり、体部は底部から緩やかに立ち上がる。外面に強い回転ナデによってわずかに凹凸がみられる。113 は外面下位に沈線状の圈線があり、底部が上げ底になっている。

114～135 は土師器の杯の口縁部である。内外面とも回転ナデの調整がなされているものが多いが、115 は内面にヘラミガキがみられる。116 は口縁部外面に沈線状の工具の痕が複数巡っている。117 は口縁部の一部に煤が付着している。119・123・124～129・131・133・134 は内面にヘラミガキを施す。136・137 は土師器の杯の底部である。136 は内外面ともに灰白色で胎土に金雲母が含まれる。円盤状の底部で、内面に強い回転ナデの痕が残る。

138・139・141～144 は土師器の皿である。いずれも底部は回転糸切りである。138 は復元口径が 9.0cm、復元底径 4.6cm、器高 2.9cm。体部は直線的に外傾している。139 は口径が 6.5cm、底径 5.9cm、器高 1.0cm。口縁端部は丸くなっている。141 は復元口径が 8.0cm、復元底径 5.0cm、器高 1.4cm。体部は内湾して立ち上がる。142 は復元口径が 5.0cm、復元底径 3.6cm、器高 1.2cm。

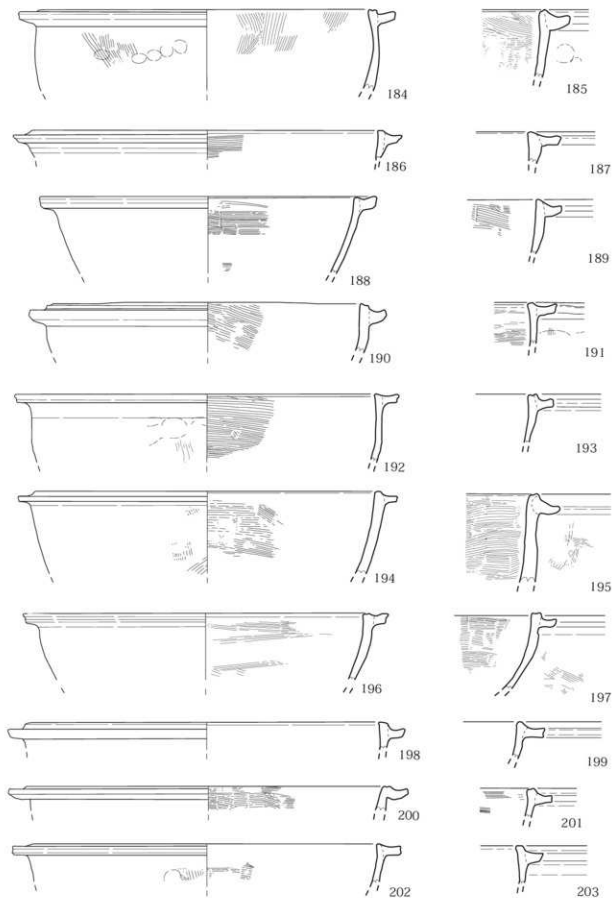


第43图 3区出土遺物実測図(5)

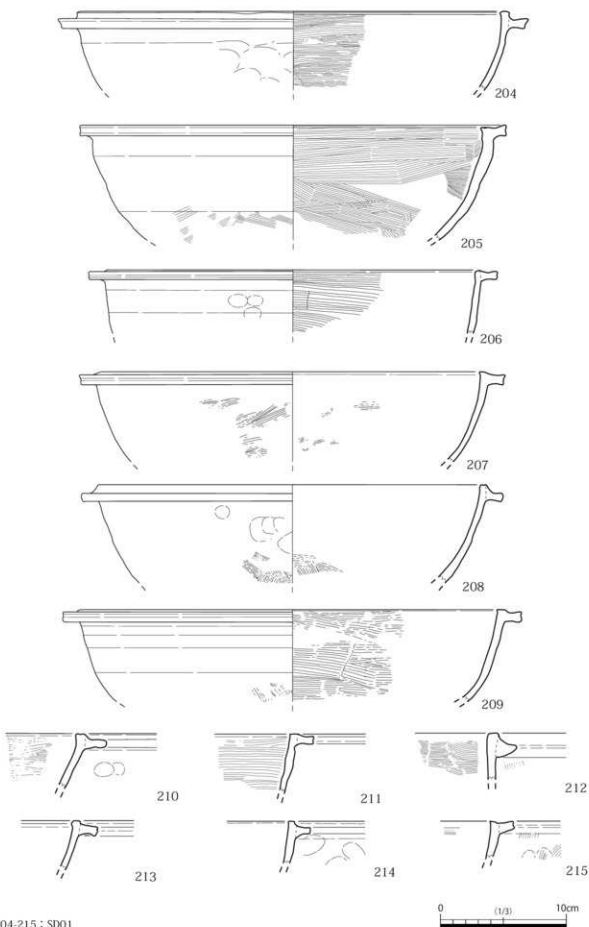


153-183 : SD01

第 44 图 3 区出土文物实测图(6)

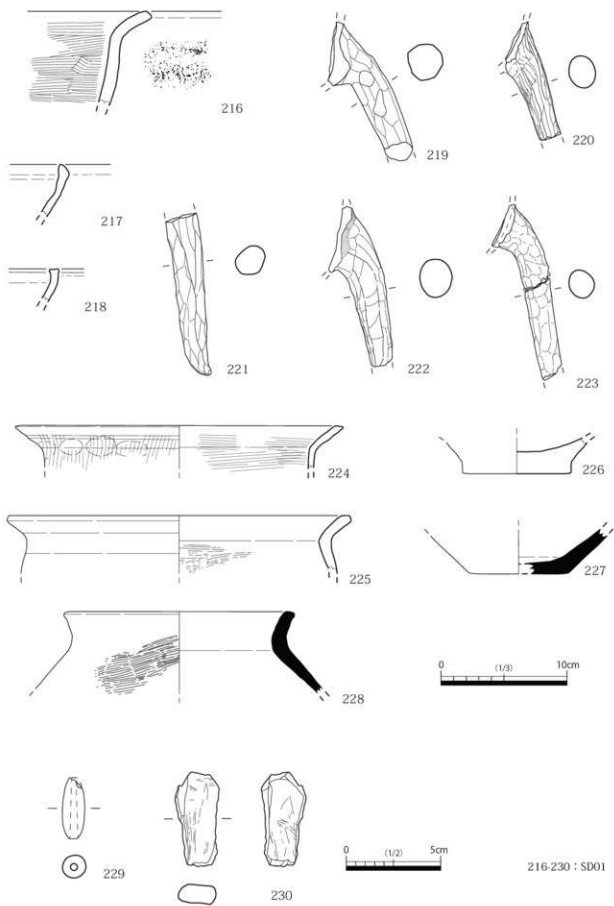


第45图 3区出土遗物实测图(7)

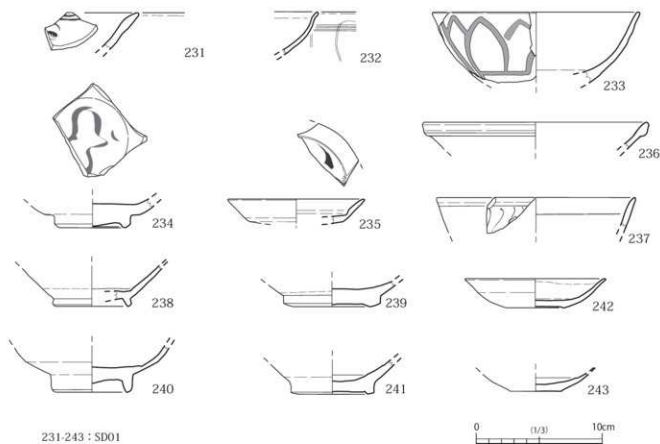


204-215 : SD01

第 46 图 3 区出土遺物実測図(8)



第47图 3区出土遗物实测图(9)



第 48 図 3 区出土遺物実測図(10)

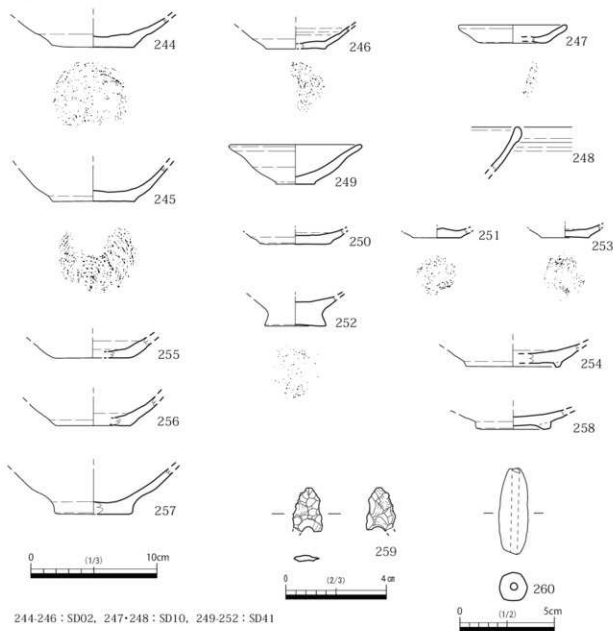
内面にハケ状工具の痕が残る。143 は復元底径 5.9cm。内面は強い回転ナデによって段状になっている。140 は土師器の高台付杯で、復元底径 6.8cm。ハの字状に開く高台の高さは 1.1cm。145 ～ 147・150 は皿である。145 は復元底径 4.5cm。底部は回転糸切りで薄い黒斑がある。146 は復元口径 9.2cm。体部は内湾している。147 は底径 4.4cm で、150 は底径 3.6cm。ともに全体に摩滅により調整が不明瞭である。148 は土師器の高台付杯で、復元口径 14.4cm、底径 8.6cm、器高 14.4cm。高台は高さが 1.4cm で、指押えによって取り付けられ、糸切りの後に内側を回転ヘラケズリによって成形している。149 は土師器の高台付皿である。底部に径 1.6 ～ 2.0cm の穿孔がある。

151 ～ 183 は土師器の椀である。153 は復元口径が 15.8cm、復元底径 6.4cm、器高 4.8cm。底部は回転糸切りの後に断面が逆三角形の高台を取り付け、体部が内湾して開く。154 は復元口径が 13.2cm、復元底径 6.8cm、残存器高 5.3cm。体部は内外面とも丁寧なヘラミガキ。底部は高台が欠損している。155 ～ 164 は口縁部である。内面は、163 は回転ナデの後ナデ調整だが、その他はヘラミガキである。157 には外面に黒斑がみられる。151・152・165 ～ 183 は底部である。169・171・181 の底部は回転糸切りがみられる。151・163・165・179・180・181 は内外面ともに灰白色である。

184 ～ 215 は瓦質土器の羽釜である。184 は復元口径 27.1cm。口縁端部から少し下がったところに、やや上向きの鐙が取り付けられている。鐙より下位に最大径があり、少しふっくらした形状である。内面は縦方向のハケ目の後ナデ調整を施している。内面に縦方向の調整があるものは 184 のみである。鐙に着目すると、鐙が 184 のように口縁端部から下がったところに取り付けられている

もの(193・194・197・198・199・201・204・208・209・210・213・214)、鐏が上向きに取り付けられているもの(188、193、196、205、215)、鐏の断面が三角形であるもの(195・212)がある。186も三角形に近い。また、外面に指オサエがみられるもの(184・185・191・192・202・204・206・208・210・214・215)、煤が付着しているもの(184・185・190・191・192・195・197・207・214)がある。

216～218は瓦質土器の鍋である。216は口縁部が外反し、内面には横方向のハケ目、外面にはタタキののちナデ調整が施されている。内外面とも煤が付着している。218は外面に煤が付着している。219～223は足鍋の脚部である。219・221～223は指オサエ、220はヘラナデによる成形がなされて外面上位に煤が付着している。219・220・222・223は先端部を欠き、221は鍋との接合部を欠いている。222・223は接合部の内面に横方向のナデ調整がみられる。222は接合部にハケ目がみられる。



244-246 : SD02, 247-248 : SD10, 249-252 : SD41

253・254 : SD15, 255-257・260 : SD09, 258・259 : SD20

第49図 3区出土遺物実測図(11)

224・225は土師器の甕の口縁部である。226は弥生土器の壺の底部で、内外面とも摩滅によって調整不明である。227・228は須恵器の壺である。229は管状土錘で、長さ3.3cm、幅1.2cmで、先端の一部を欠く。230は用途不明の石製品で、滑石製である。長さ4.9cm、幅2.0cm、厚さ1.0cmで、表裏両面に擦過痕がある。

231～235は青磁である。231は皿の口縁部で、内面に施文がある。龍泉窯系とみられる。232～234は椀である。232は口縁部で、外面に片彫蓮弁文。233は底部を欠くが、外面に無銘蓮弁文。234は見込みに片彫草花文で、高台の内側は軸を掻き取り露胎としている。235は皿で底部を欠失するが、見込みに劃花文。236～241は白磁の椀。236は玉縁口縁で釉だまりがみられる。237は口縁部で内面に沈線があり、外面にヘラ片切彫文。238～241は底部で、削り出し高台。238は見込みに蛇の目軸刺ぎ。240は削りが粗い。241は軸の発色がやや不良である。242・243は白磁の皿。242は口縁部内面に釉だまりがあり、底部外面は釉刺ぎで露胎して碁笥底高台である。243は底部外面が露胎している。

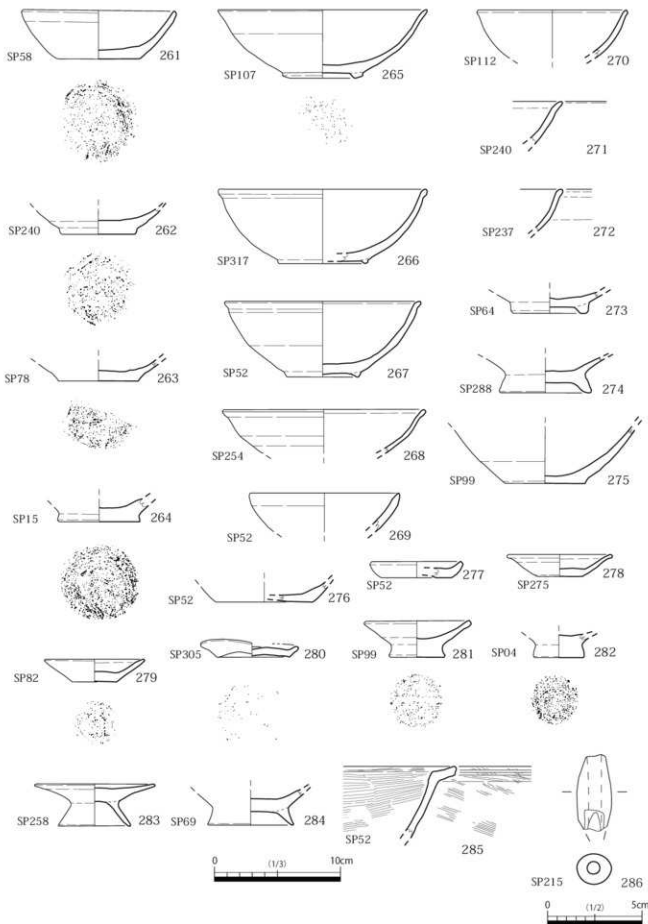
③その他の溝

244～246はSD02出土の土師器である。244・245は杯の底部で、回転系切りである。244の底径は6.4cm、245は復元底径が6.4cmである。246は皿である。復元底径は4.7cm。247・248はSD10出土である。247は土師器の皿で、復元口径8.6cm、復元底径5.5cm。248は白磁の椀で玉縁口縁である。249～252はSD41出土の土師器である。249～251は皿、252は台付皿で底部は回転系切り。いずれも内外面ともに回転ナデがみられるが、摩滅によって調整の観察は困難である。253・254はSD15出土の土師器である。253は皿で底部は回転系切り、胎土に金雲母を多く含む。254は椀で底部はヘラ切り、内外面とも灰白色である。255～257はSD09出土の土師器の杯で、いずれも底部は回転系切りである。258はSD20出土の椀で、底部はヘラ切りである。259はSD20から出土した姫島産黒曜石の石鏃である。凹基式で基部の片端を欠損している。残存する長さは1.7cm、幅1.2cm、厚さ0.3cmである。260はSD09出土の管状土錘で、長さ4.6cm、幅1.5cm、孔径0.3cm、重さ9.0gである。

④柱穴（掘立柱建物以外）

261～264・268は土師器の杯である。261はSP58出土、262はSP240、263はSP78、264はSP15出土である。いずれも底部は回転系切りである。268はSP254出土の口縁部である。265・266・270～273は土師器の椀である。265はSP107出土で底部は回転系切りである。266はSP317出土で口縁端部が玉縁状である。270はSP112出土。271はSP240出土、272はSP237出土で、ともに口縁部が外反している。ともに摩滅が進んでいる。273はSP64出土で、高台の畳付の幅が広い。267・269・276・277・285はSP52出土である。267は土師器の椀で摩滅が進んでいる。269は土師器の椀あるいは杯の口縁部である。276は土師器の杯で、底部は回転系切りである。277は土師器の皿。269・277の内面には有機物が付着していた。285は土師器の鍋。内面は横方向のハケ目調整、口縁端部に沈線がみられる。

274はSP281出土の高台付皿で、高台の高さは0.8cm。摩滅が進んでいる。275・281はSP99出土の土師器である。275は杯で底部は回転系切り、281は皿で底部は回転系切りと板目圧痕が



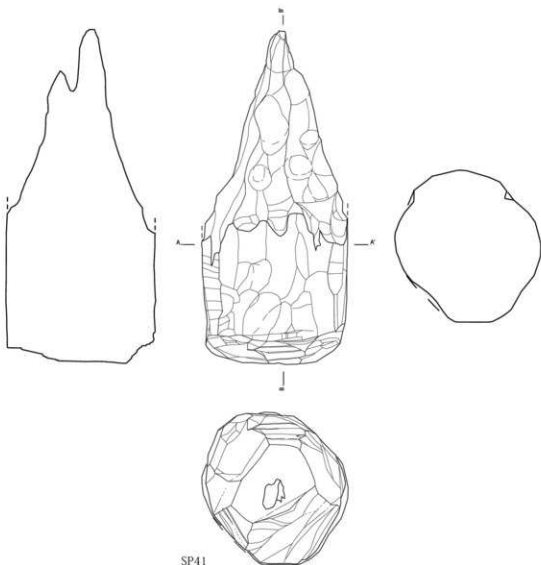
第 50 图 3 区出土遗物实测图(12)

みられる。278～280は土師器の皿である。278はSP275出土で底部に板目圧痕がある。279はSP82出土で底部には回転系切りと板目圧痕がみられる。280はSP305出土で全体に歪んでいるが、底部に回転系切りがみられる。282はSP04出土の土師器の皿で、底部は回転系切りである。283・284は高台付皿である。283はSP258出土で高台の高さが1.9cmある。284はSP69出土で底部は回転系切りである。286は、SP215出土の管状土鍾。片方の先端を欠く。孔径は0.7cm。

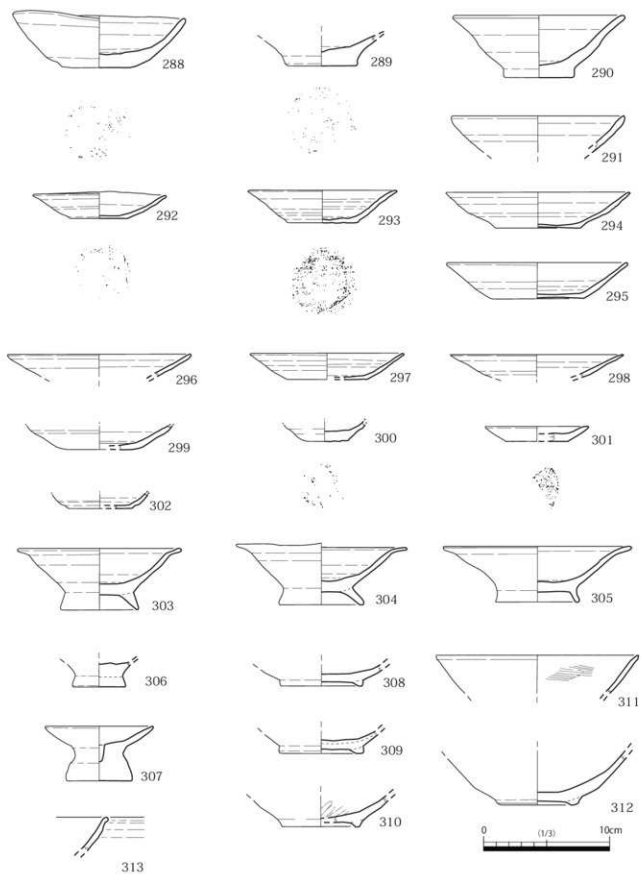
287はSA01を構成するSP41から出土した柱根で、横断面は円に近い。残存する長さは33.4cm、直径14.6～15.2cm、重さ3150g。底部と底部から12～15cmまでの側面に面取りの工具痕がみられる。

⑤土坑

288～313は土師器である。288・300・305・306・309はSK41出土である。288は杯で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部が歪んでいる。底部は回転系切りである。300は皿で口縁部を欠失する。底部は回転系切りと板目圧痕がみられる。305は高台付皿で、高台の高さは0.8cmである。306は皿で、摩滅が進んでいる。309は碗の底部。内面に0.2cmの厚さの粘土を貼ってヘラミガ

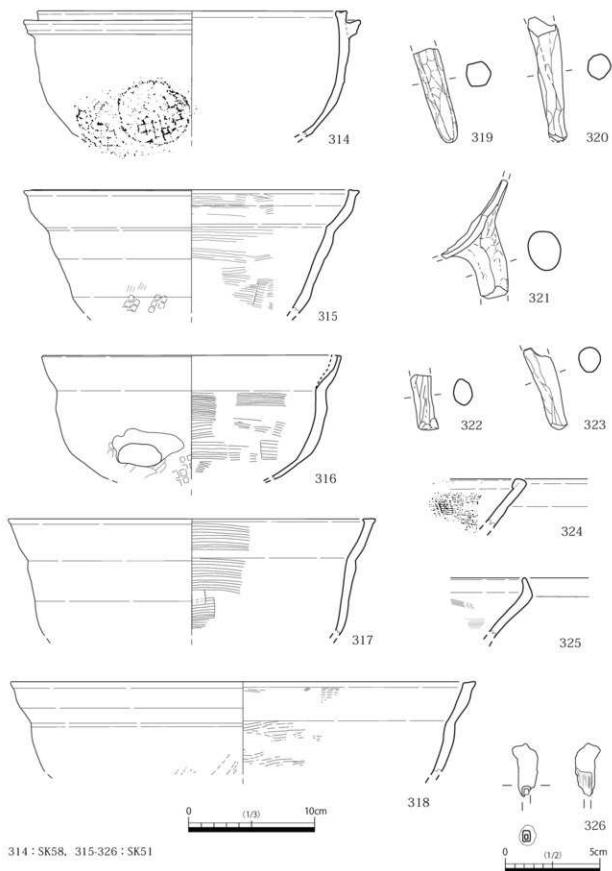


第51図 3区出土遺物実測図(13)



288・300・305・306・309：SK41，289・301：SK44，290：SK39，291：SK58，292-299：SK51，302：SK29
303：SK61，304：SK49，307：SK50，308：SK63，310：SK12，311：SK01，312：SK07，313：SK08

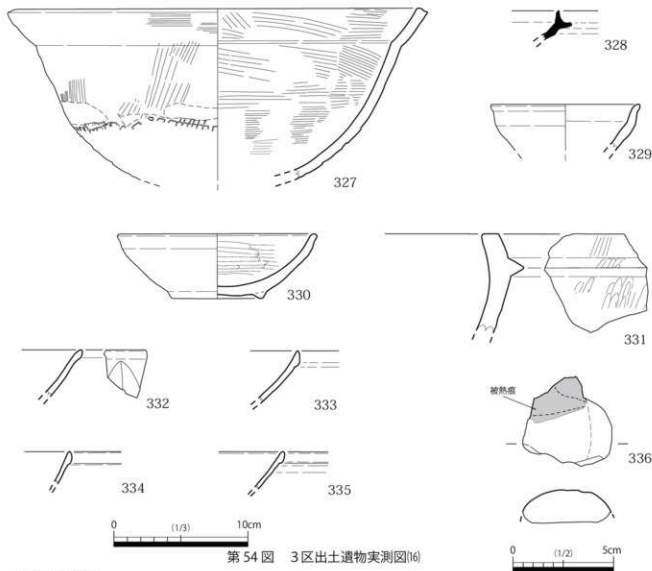
第52图 3区出土文物实测图[4]



第 53 図 3 区出土遺物実測図(15)

キをしている。289・301はSK44出土である。289は杯の底部で、回転系切りである。301は皿で、底部は回転系切りである。290はSK39出土の杯である。底部は回転系切りで、胎土に金雲母を含む。291はSK58出土の杯の口縁部である。292～299はSK51出土の皿で、器壁が薄く、灰白色かそれに近い色調である。292は底部に回転系切りと板目圧痕がみられる。内外面に有機物が付着していた。293は底部に板目圧痕がみられる。294は摩滅により調整不明。295・297は底部が回転系切りである。296・298は口縁部。302はSK29出土の皿。303はSK61出土の高台付皿である。高台の高さは1.2cm。304はSK49出土の高台付皿である。底部はヘラ切りで高台の高さは1.0cm。307はSK50出土の柱状高台付皿である。底部内面中央に直径0.4～0.8cm、深さ103cmの円孔がある。308はSK63出土の椀である。310はSK12出土の椀で、底部に回転系切りがみられる。311はSK01出土の椀の口縁部。312はSK07出土の椀で、底部は回転系切りである。313はSK08出土の白磁の椀の口縁部である。

314はSK58出土の土師器の足釜である。口縁端部から下がったところに、やや上向きに短い鐏が取り付けられている。鐏より下位に最大径があり、少しふくらした形状である。外面下位はタタキ調整がなされ、そのあとに脚部が取り付けられた痕がみられる。315～326はSK51出土で、



第54図 3区出土遺物実測図(16)

315～324は瓦質土器である。316は足鍋である。口縁部内面は剥離しているが、外面にはタタキがみられ、脚部の痕跡がみられる。315・317・318は鍋である。いずれも内面は横方向のハケ目。319～323は足鍋の脚部。321は接合部で、先端部を欠く。内面に横方向のハケ目が施されている。319・320・322・323は先端部で、指オサエで成形されている。324は播鉢。おろし目が5本みられる。325は土師器の鉢である。326は鉄釘の頭部である。残存する長さは2.8cmで、中空になっている。

⑥遺構外

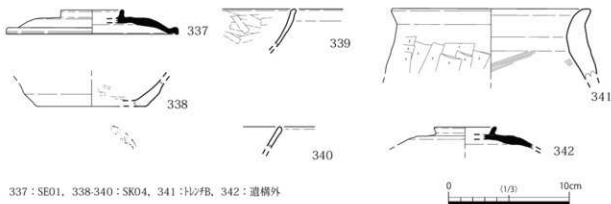
327は瓦質土器の鍋。内面は横方向のハケ目、外面は口縁部が横方向、体部上位は縦方向のハケ目で煤が付着している。体部下位は一部剥離しているが、タタキがみられる。328は須恵器の杯身。329は陶器の椀である。内外面は黒色、口縁部は暗褐色の施軸がなされた天目椀である。330は土師器の椀で、底部は回転糸切りである。331は石鍋の口縁部である。滑石製で外面の罫以下に煤が付着している。器壁の厚さが1.2～1.5cmである。332は青磁の椀である。外面に鎗蓮弁文がみられる。333～335は白磁の椀の口縁部で、玉縁状の口縁である。336は鞆羽口である。一部に被熱痕がみられる。

(4) 4区の出土遺物

337はSE01から出土した須恵器の杯蓋である。復元口径は14.2cm、器高は2.0cm。高さ0.6cm、口径5.0cmの輪状つまみがあり、口縁端部は鳥嘴状を呈する。天井部から体部上半部にかけて、焼成時の重ね焼きの痕がみられる。

338～340はSK04から出土した土師器である。338は杯の底部で、復元底径は8.9cm。回転糸切りがみられる。内面にはヘラミガキによる調整がなされている。339は椀の口縁部で、内面にやや幅が広いヘラミガキが施されている。340は杯の口縁部。内外面ともに回転ナデで調整し、口縁端部は丸みを帯びている。

341はトレンチBの6層から出土した土師器の甕の口縁部である。復元口径は16.2cmで、口縁端部の内外面に黒斑がある。内面の頸部以下はハケ目、外面の屈曲部以下にはヘラ状の工具による粗雑なナデ調整が施されている。342は、遺構に伴わない須恵器の杯蓋である。高さ0.7cm、口径5.0cmの輪状つまみを有するが、口縁端部を欠いている。



第55図 4区出土遺物実測図

第7表 出土土器・陶磁器観察一覧表(1)

No.	緯度	経度	地区	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備考
							口径 (最大値)	器高 (残存値)	底径 (最大値)					
1	36	18	1	S201	煎煮器	煎小儀 骨部か 火舎	—	[11.5]	—	密	良	灰色 (N6/7) 灰色 (N6/7)	ナデ、回転ナデ ナデ、ヘラナデ	体部下半に三思と 思われる痕跡。接地面 に木貫通孔。
2	36	18	1	S201	煎煮器	煎	(13.0)	[7.3]	—	やや 密	良	青灰色 (S15/1) 青灰色 (S15/1)	回転ナデ 回転ナデ	
3	36	18	1	S201	煎煮器	煎	—	[6.4]	(11.8)	やや 密	良	青灰色 (S15/1) 青灰色 (S15/1)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	内面同心円状に具痕 残存
4	36	18	1	S201	煎煮器	杯 (身)	(14.2)	[2.6]	—	やや 密	良	青灰色 (S15/1) 青灰色 (S15/1)	回転ナデ 回転ナデ	
5	36	18	1	S201	煎煮器	杯 (身)	—	[1.7]	(8.8)	やや 密	良	青灰色 (S15/1) 青灰色 (S15/1)	回転ナデ 回転ナデ	腹付中くぼみ
6	36	18	1	S201	土師器	杯	—	[2.3]	(5.6)	密	やや 良	灰白色 (10YR8/2) 灰白色 (10YR8/2)	ナデ、回転ナデか 回転ナデ	
7	36	18	1	S202	煎煮器	杯 (身)	(12.8)	[6.9]	—	やや 粗	良	灰色 (N6/1) 灰色 (N7/1)	回転ナデ 回転ヘラナデ、回転ナデ	
8	36	18	1	S202	煎煮器	杯	—	[3.1]	—	やや 密	良	灰色 (N6/1) 灰色 (N6/1)	回転ナデ 回転ナデ	
9	36	18	1	SP01	煎煮器	杯 (身)	—	[2.4]	—	密	良	青灰色 (S15/1) 灰色 (N5/7)	回転ナデ 回転ナデ	
10	36	18	1	SP04	煎煮器	杯 (身)	—	[1.1]	—	やや 良	良	灰色 (N7/7) 灰色 (N7/7)	回転ナデ 回転ナデ	口縁端部局腐状
11	36	18	1	SP06	煎煮器	杯 (身)	—	[1.1]	—	やや 密	良	青灰色 (S15/1) 青灰色 (S15/1)	回転ナデ 回転ナデ	口縁端部局腐状
12	36	18	1	SP15	煎煮器	杯 (身)	—	[1.1]	(7.8)	密	良	青灰色 (S15/1) 青灰色 (S15/1)	回転ナデ 回転ナデ	
13	36	18	1	SK04	煎煮器	杯 (身)	(17.2)	[2.9]	—	やや 粗	良	灰白色 (N7/7) 青灰色 (S15/1)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	口縁端部局腐状
14	36	18	1	SK04	煎煮器	杯 (身)	—	[1.3]	(8.4)	密	良	青灰色 (S15/1) 青灰色 (S15/1)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	接地面は高台内側部
15	36	18	1	SK04	煎煮器	杯 (身)	—	[1.7]	—	やや 粗	やや 良	青灰色 (S15/1) 青灰色 (S15/1)	回転ナデ 回転ナデ	口縁端部局腐状
16	36	18	1	SK04	煎煮器	腰	—	[2.7]	—	やや 密	良	灰色 (N5/7) 灰色 (N6/7)	回転ナデ 回転ナデ	口縁端部肥厚
17	37	18	1	S101	煎煮器	杯 (身)	—	[2.2]	(8.6)	やや 密	良	灰白色 (N7/7) 灰白色 (N7/7)	回転ナデ 回転ナデ	内面指紋付着
18	37	19	1	造橋外	煎煮器	杯 (身)	—	[3.1]	—	密	良	暗青灰色 (S14/1) 暗青灰色 (S14/1)	回転ナデ 回転ナデ	
19	37	19	1	造橋外	煎煮器	杯 (身)	—	[1.8]	(10.6)	やや 密	良	明青灰色 (S17/1) 灰色 (N6/1)	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	
20	37	19	1	造橋外	煎煮器	杯 (身)	—	[2.1]	—	やや 密	良	灰色 (N6/7) 灰白色 (N7/7)	回転ナデ 回転ナデ	
21	37	19	1	造橋外	煎煮器	杯 (身)	—	[1.9]	(6.8)	やや 粗	良	灰色 (N6/7) 暗青灰色 (S14/1)	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	
22	37	19	1	造橋外	煎煮器	杯 (身)	—	[1.1]	—	やや 粗	やや 良	青灰色 (S15/1) 青灰色 (S15/1)	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	腹付中くぼみ
23	37	19	1	造橋外	煎煮器	杯 (身)	—	[1.2]	(10.8)	やや 密	良	明青灰色 (S17/1) 明青灰色 (S17/1)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	腹付状縁部にややく ぼむ
24	37	19	1	造橋外	煎煮器	杯 (身)	—	[1.9]	—	やや 密	良	青灰色 (S15/1) 青灰色 (S15/1)	回転ナデ 回転ナデ	
25	37	19	1	造橋外	土師器	碗	—	[2.6]	(8.0)	密	良	にぶい黄褐色 (10YR7/3) にぶい黄褐色 (10YR7/3)	ヘラミガキ 回転ナデ	底部回転車切り
26	37	19	1	造橋外	土師器	碗	—	[3.0]	(5.8)	密	良	にぶい黄褐色 (10YR7/2) 灰白色 (10YR8/2)	ヘラミガキ 回転ナデ、ナデ	
27	37	19	1	造橋外	土師器	碗	—	[1.7]	(6.6)	やや 密	良	灰白色 (10YR7/3) 灰白色 (10YR8/2)	ヘラミガキ 摩滅により本明	
28	37	19	1	造橋外	土師器	杯	—	[1.7]	(6.4)	密	良	黄灰色 (2.5Y5/1) 黄灰色 (2.5Y4/1)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転車切り
29	37	19	1	造橋外	土師器	足筒	—	[7.2]	—	密	良	灰白色 (5YR8/1)	指オサエ	脚部
30	37	19	1	造橋外	瓦質土器	足筒	—	[6.7]	—	密	良	にぶい黄色 (2.5Y6/4)	指オサエ	脚部、靴状
31	37	19	1	造橋外	瓦質土器	足筒	—	[6.6]	—	やや 密	良	黒色 (10Y2/1) 灰褐色 (7.5YR4/2)	ナデ、指オサエ	脚部、上端部付着
33	38	20	2	SK09	土師器	杯	—	[1.4]	(6.2)	密	良	にぶい褐色 (7.5YR7/3) にぶい褐色 (7.5YR7/3)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転車切り
34	38	20	2	SK25	土師器	碗	—	[2.0]	—	密	良	灰白色 (10YR8/2) 灰白色 (10YR8/2)	回転ナデ、ヘラミガキ 回転ナデ	
35	38	20	2	SK25	土師器	皿	—	[6.9]	(4.2)	やや 密	やや 良	にぶい黄褐色 (10YR7/3) にぶい黄褐色 (10YR7/3)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転車切り
36	38	20	2	SK11	瓦質土器	足筒	—	[6.9]	—	やや 粗	良	灰色 (N5/7)	指オサエ	脚部
37	38	20	2	S301	煎煮器	煎	(6.7)	[2.7]	—	密	良	青灰色 (S15/1) 青灰色 (S15/1)	回転ナデ 回転ナデ	小型品
38	38	20	2	S301	土師器	杯	—	[2.9]	(5.8)	やや 密	良	にぶい褐色 (7.5YR7/4) にぶい褐色 (7.5YR7/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転車切り、板 目状残存
39	38	20	2	S301	土師器	杯	(14.6)	[5.3]	—	密	良	黄褐色 (10YR8/3) にぶい黄褐色 (10YR7/3)	摩滅により本明 回転ナデ後ナデ	
40	38	20	2	S301	青磁	碗	—	[2.1]	(5.7)	密	良	緑釉：灰白色 (N7/7) 緑釉：灰オリーブ色 (5YR6/2)	回転ヘラナデリ 回転ヘラナズリ	高台付ズリ出し、龍 巻文

第8表 出土土器・陶磁器観察一覧表(2)

No.	邦国	地区	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	構成	色調 (内)	主な調整 (内)	備考
						口径 (内径)	器高 (外径)	底径 (内径)					
41	38	20	2	S305	青磁	皿	—	[1.1]	(2.9)	密	黒釉：灰白色 (7.5/8/3) 輪：灰オリーブ色 (7.5/8/2)	同転ナゲ 同転ナゲ、同転ヘラケズリ	底部側面縁縁取り
42	38	20	2	遺構外	土師器	碗	(16.1)	[2.6]	—	密	やや良 灰白色 (10/18/2) 灰白色 (10/18/2)	同転ナゲ 同転ナゲ	外面に窪み付
43	38	20	2	遺構外	土師器	杯	(12.2)	[1.6]	—	やや良	同良 灰黄褐色 (10/18/2) にふい黄褐色 (10/18/2)	同転ナゲ 同転ナゲ	外面に内縁部
44	38	20	2	遺構外	土師器	杯	(11.2)	5.0	(4.7)	密	良 灰色 (5/8/1) 灰白色 (2.5/7/1)	同転ナゲ 同転ナゲ	底部同転糸切り
45	38	20	2	遺構外	土師器	鉢	—	[3.1]	—	やや良	同良 浅黄褐色 (10/18/3) 浅黄褐色 (10/18/3)	ヘラミガキ 同転ナゲ	
46	38	20	2	遺構外	黒土器	皿	—	[2.1]	4.9	やや良	良 灰色 (5/6/7)	同転ナゲ、ナゲ 同転ナゲ、ケズリ	小型品
47	38	20	2	遺構外	陶器	碗	—	[1.6]	4.4	密	黒釉：灰白色 (2.5/7/1) 輪：黒色 (7.5/8/1, 7/1)	同転ナゲ ヘラケズリ	高台盤縁縁取り 天目碗 (瀬戸産)
49	39	21	3	S302 (SP245)	土師器	杯	14.0	4.3	7.0	密	良 浅黄褐色 (10/18/3) 浅黄褐色 (10/18/3)	同転ナゲ 同転ナゲ	板目圧痕残存
50	39	21	3	S302 (SP100)	土師器	杯	—	[2.6]	(5.6)	やや密	同良 浅黄褐色 (7.5/8/3) 浅黄褐色 (7.5/8/3)	同転ナゲ 同転ナゲ	底部同転糸切り
51	39	21	3	S304 (SP288)	土師器	碗	—	[2.0]	(6.0)	やや密	同良 褐色 (5/8/7/6)	厚縁により不明 同転ナゲ後ナゲ	
52	39	21	3	S305 (SP285)	土師器	杯	—	[2.0]	5.7	やや密	同良 にふい黄褐色 (10/18/3) 浅黄褐色 (10/18/3)	同転ナゲ 同転ナゲ	底部同転糸切り、板目圧痕残存
53	39	21	3	S305 (SP285)	土師器	杯	—	[2.6]	—	やや密	同良 浅黄褐色 (7.5/8/4) にふい褐色 (7.5/8/7/3)	同転ナゲ後ナゲ 同転ナゲ	
54	39	21	3	S305 (SP285)	土師器	高台付皿	(14.2)	4.9	(7.6)	やや良	同良 浅黄褐色 (10/18/3) 浅黄褐色 (10/18/3)	同転ナゲ 同転ナゲ	底部同転糸切り
55	39	21	3	S305 (SP296)	土師器	碗	—	[1.6]	(5.8)	やや密	同良 灰黄褐色 (10/18/2) 浅黄褐色 (10/18/3)	ナゲ 同転ナゲ	底部同転糸切り
56	39	21	3	S305 (SP296)	土師器	碗	—	[1.5]	(6.8)	やや密	同良 にふい褐色 (7.5/8/7/3) 浅黄褐色 (5/8/7/4)	厚縁により不明 同転ナゲ	
57	39	21	3	S305 (SP279)	土師器	碗	—	[3.6]	—	やや密	同良 浅黄褐色 (10/18/3) 浅黄褐色 (10/18/3)	同転ナゲ後ナゲ 同転ナゲ	
58	39	21	3	S305 (SP296)	土師器	皿	8.2	1.9	3.7	やや密	同良 褐色 (5/8/7/6) 褐色 (5/8/7/6)	同転ナゲ、ナゲ 同転ナゲ	底部同転糸切り
59	39	21	3	S305 (SP290)	土師器	杯	—	[1.4]	(6.0)	やや密	同良 浅黄褐色 (10/18/3) にふい黄褐色 (10/18/2)	同転ナゲ 同転ナゲ後ナゲ	
60	39	21	3	S305 (SP290)	土師器	皿	8.4	2.9	4.6	やや密	同良 浅黄褐色 (7.5/8/3/4) 浅黄褐色 (7.5/8/4)	同転ナゲ 同転ナゲ	底部同転糸切り、裏面
61	39	21	3	S305 (SP285)	土師器	皿	—	[1.4]	(6.0)	やや密	同良 浅黄褐色 (7.5/8/6) 浅黄褐色 (7.5/8/6/4)	同転ナゲ 同転ナゲ後ナゲ	底部同転糸切り
62	39	21	3	S305 (SP285)	土師器	皿	—	[2.3]	(3.8)	やや密	同良 浅黄褐色 (10/18/4) 浅黄褐色 (10/18/3)	同転ナゲ、ナゲ 同転ナゲ	底部同転糸切り
63	39	21	3	S305 (SP277)	土師器	皿	—	[1.6]	(5.2)	やや密	同良 浅黄褐色 (10/18/3) 浅黄褐色 (10/18/4)	同転ナゲ、ナゲ 同転ナゲ	底部同転糸切り
64	39	21	3	S305 (SP279)	土師器	皿	(7.8)	1.8	(3.9)	やや密	同良 にふい黄褐色 (10/18/2) 浅黄褐色 (10/18/3)	同転ナゲ 同転ナゲ	底部同転糸切り
65	39	21	3	S305 (SP277)	土師器	皿	—	[2.1]	3.8	やや密	同良 浅黄褐色 (10/18/3) 浅黄褐色 (10/18/3)	同転ナゲ、ナゲ 同転ナゲ	底部同転糸切り
66	39	21	3	S305 (SP285)	白磁	皿	(12.6)	3.2	5.8	密	黒釉：灰白色 (5/8/1) 輪：灰白色 (7.5/8/1)	同転ナゲ 同転ナゲ、同転ヘラケズリ	内外面施釉、側り出し
67	39	21	3	S401 (SP41)	土師器	皿	—	[1.2]	4.4	密	良 灰白色 (10/18/2) 灰白色 (10/18/2)	同転ナゲ 同転ナゲ	板目圧痕残存
70	40	22	3	S301	土師器	杯	(15.0)	5.1	7.4	密	同良 にふい黄褐色 (10/18/2) にふい黄褐色 (10/18/2)	同転ナゲ後ナゲ、ヘラミガキ 同転ナゲ	底部同転糸切り
71	40	22	3	S301	土師器	杯	(14.7)	4.9	7.4	密	同良 にふい褐色 (7.5/8/7/3) にふい褐色 (10/18/3)	同転ナゲ後ナゲ 同転ナゲ	底部同転糸切り
72	40	22	3	S301	土師器	杯	(14.2)	4.9	(7.0)	密	不良 灰白色 (2.5/8/1) 灰白色 (2.5/8/1)	同転ナゲ 同転ナゲ	底部同転糸切り
73	40	22	3	S301	土師器	杯	(14.4)	3.7	(7.4)	やや密	同良 褐色 (5/8/7/6) 浅黄褐色 (7.5/8/4)	同転ナゲ、同転ヘラケズリ 同転ナゲ	底部同転糸切り
74	40	22	3	S301	土師器	杯	(13.3)	4.1	(6.0)	やや密	同良 にふい褐色 (5/8/6/4) にふい褐色 (7.5/8/7/4)	同転ナゲ、ナゲ 同転ナゲ後ナゲ	底部同転糸切り
75	40	22	3	S301	土師器	杯	(15.8)	[4.2]	(8.1)	密	同良 にふい黄褐色 (10/18/3) にふい黄褐色 (10/18/3)	同転ナゲ、ヘラミガキ 同転ナゲ	底部同転糸切り
76	40	22	3	S301	土師器	杯	(15.0)	3.1	(7.4)	密	同良 にふい黄褐色 (10/18/2) にふい黄褐色 (10/18/2)	同転ナゲ 同転ナゲ	底部同転糸切り
77	40	22	3	S301	土師器	杯	(13.7)	3.9	(7.3)	やや密	同良 灰黄色 (2.5/7/2) 灰黄色 (2.5/7/2)	同転ナゲ、ナゲ 同転ナゲ	底部同転糸切り
78	40	22	3	S301	土師器	杯	(12.3)	3.7	(6.2)	やや密	同良 灰黄褐色 (10/18/2) にふい黄褐色 (10/18/2)	同転ナゲ、ナゲ 同転ナゲ	底部同転糸切り
79	40	22	3	S301	土師器	杯	(14.8)	5.7	7.8	やや密	同良 浅黄褐色 (7.5/8/3/2) 灰白色 (10/18/2)	同転ナゲ後ナゲ 同転ナゲ	外面低位累突、底部同転糸切り
80	40	22	3	S301	土師器	杯	(12.9)	4.2	6.4	やや密	同良 浅黄褐色 (7.5/8/3/2) 浅黄褐色 (7.5/8/3)	同転ナゲ 同転ナゲ	底部同転糸切り
81	40	22	3	S301	土師器	杯	(14.5)	3.4	(7.0)	同良	同良 にふい褐色 (5/8/6/3) にふい褐色 (5/8/6/3)	同転ナゲ 同転ナゲ	底部同転糸切り
82	40	22	3	S301	土師器	杯	(17.6)	4.9	(10.4)	やや密	同良 明褐色 (7.5/8/7/2) にふい褐色 (7.5/8/7/3)	同転ナゲ 同転ナゲ	底部同転糸切り
83	40	22	3	S301	土師器	杯	(13.2)	3.8	(6.8)	やや密	同良 灰褐色 (7.5/8/5/2) 灰褐色 (7.5/8/5/2)	ヘラミガキ 同転ナゲ	底部同転糸切り

第9表 出土土器・陶磁器観察一覧表(3)

No.	墳号	国	地区	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内) 調 (外)	主な調整 (外)	備考
							口径 (最大径)	器高 (残存量)	底径 (最大径)					
84	41	22	3	S201	土師器	杯	—	[2.2]	(7.0)	やや 密	やや 良	浅黄褐色 (10YR8/3) にぶい褐色 (7.5YR7/4)	同転ナデ 同転ナデか	底面同転糸切り
85	41	22	3	S201	土師器	杯	—	[1.8]	6.2	やや 粗	良	浅黄褐色 (10YR8/3) にぶい褐色 (7.5YR7/3)	同転ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
86	41	22	3	S201	土師器	杯	—	[1.7]	(8.0)	密	良	にぶい褐色 (7.5YR7/3) にぶい黄褐色 (10YR7/2)	同転ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
87	41	22	3	S201	土師器	杯	—	[1.4]	(6.0)	やや 密	やや 良	浅黄褐色 (10YR8/3) にぶい黄褐色 (10YR7/3)	同転ナデ、ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
88	41	22	3	S201	土師器	杯	—	[1.9]	(6.2)	密	良	にぶい褐色 (7.5YR7/3) にぶい褐色 (7.5YR7/4)	同転ナデ、ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
89	41	22	3	S201	土師器	杯	—	[2.1]	(7.4)	やや 密	良	灰黄褐色 (10YR6/2) 灰黄褐色 (10YR6/2)	同転ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
90	41	22	3	S201	土師器	杯	—	[1.2]	(6.0)	やや 良	やや 良	にぶい黄褐色 (10YR7/3) にぶい黄褐色 (10YR7/3)	同転ナデ、ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
91	41	22	3	S201	土師器	杯	—	[1.9]	(7.4)	やや 密	やや 良	浅黄褐色 (7.5YR8/3) 浅黄褐色 (7.5YR8/3)	同転ナデ、ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
92	41	22	3	S201	土師器	杯	—	[2.0]	(7.8)	密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) 灰黄褐色 (10YR6/2)	同転ナデ、ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
93	41	22	3	S201	土師器	杯	—	[2.0]	(7.0)	やや 粗	良	灰白色 (10YR8/2) ～ 褐色 (2.5YR7/6) 褐色 (2.5YR7/6)	ヘラミガキ 摩滅により不明	底面同転糸切り
94	41	23	3	S201	土師器	杯	—	[2.4]	6.6	密	良	褐色 (5YR7/6) ～ 灰白色 (10YR8/2) 灰白色 (10YR8/2) ～ にぶ い褐色 (5YR6/4)	同転ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
95	41	23	3	S201	土師器	杯	—	[2.2]	(6.9)	やや 粗	良	褐色 (10YR5/1) 褐色 (10YR4/1)	同転ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
96	41	23	3	S201	土師器	杯	—	[1.8]	(6.4)	やや 密	やや 良	灰白色 (5YR8/2) 明褐色 (7.5YR7/2)	同転ナデ、同転ヘラミガキ か、同転ナデ	底面同転糸切り
97	41	23	3	S201	土師器	杯	—	[1.4]	(6.6)	やや 密	やや 良	浅黄褐色 (10YR8/3) にぶい黄褐色 (10YR7/3)	同転ナデか、ナデか 同転ナデ	底面同転糸切り
98	41	23	3	S201	土師器	杯	—	[1.9]	(5.8)	やや 密	やや 良	明褐色 (7.5YR7/2) 明褐色 (7.5YR7/2)	同転ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
99	41	23	3	S201	土師器	杯	—	[1.6]	(6.2)	粗	やや 良	にぶい褐色 (7.5YR6/3) にぶい褐色 (7.5YR6/3)	同転ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
100	41	23	3	S201	土師器	杯	—	[2.2]	(5.7)	やや 密	やや 良	灰色 (5N/5) 灰褐色 (5YR6/2) ～ 暗灰 色 (5Y/3)	同転ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り、板 外面に黒焼
101	41	23	3	S201	土師器	杯	—	[1.8]	3.9	やや 密	やや 良	浅黄褐色 (10YR8/3) 浅黄褐色 (10YR8/3)	同転ナデ、ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り、板 目圧痕残存
102	42	23	3	S201	土師器	杯	—	[2.1]	(6.4)	やや 密	やや 良	浅黄褐色 (10YR8/3) 黄灰色 (2.5Y5/1)	ナデ、ヘラミガキ 同転ナデ後ナデ	底面同転糸切り
103	42	23	3	S201	土師器	杯	—	[2.2]	(6.2)	やや 密	良	にぶい黄褐色 (10YR7/3) にぶい黄褐色 (10YR7/3)	同転ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
104	42	23	3	S201	土師器	杯	—	[1.6]	(6.6)	密	やや 良	灰黄色 (2.5Y6/2) 褐色 (5YR7/6)	同転ナデ、ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
105	42	23	3	S201	土師器	杯	—	[1.5]	(8.2)	密	良	黄白色 (2.5Y6/1) 黄白色 (2.5Y6/1)	同転ナデ、ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
106	42	23	3	S201	土師器	杯	—	[2.3]	(6.8)	やや 密	やや 良	暗灰色 (10YR5/1) 灰黄褐色 (10YR6/2)	同転ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
107	42	23	3	S201	土師器	杯	—	[3.5]	(6.6)	密	良	にぶい黄褐色 (10YR7/3) 灰黄色 (2.5Y7/2)	同転ナデ、ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
108	42	23	3	S201	土師器	杯	—	[2.8]	7.0	やや 密	やや 良	浅黄褐色 (7.5YR8/4) 褐色 (5YR7/6)	ヘラミガキ 同転ナデ	底面同転糸切り
109	42	23	3	S201	土師器	杯	—	[2.4]	(5.7)	密	良	にぶい黄褐色 (10YR7/2) にぶい黄褐色 (10YR7/2)	同転ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
110	42	23	3	S201	土師器	杯	—	[2.1]	(6.6)	密	やや 良	灰白色 (2.5Y8/2) 灰白色 (10YR8/2)	同転ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
111	42	23	3	S201	土師器	杯	—	[1.3]	(8.2)	やや 密	良	にぶい褐色 (7.5YR7/3) にぶい褐色 (5YR7/2)	同転ナデ、ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
112	42	23	3	S201	土師器	杯	—	[2.2]	6.4	密	不良	赤褐色 (5YR8/3) 赤褐色 (5YR8/4)	同転ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
113	42	23	3	S201	土師器	杯	—	[1.6]	(6.4)	密	良	にぶい黄褐色 (10YR7/2) にぶい黄褐色 (10YR7/2)	同転ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
114	42	23	3	S201	土師器	杯	(12.0)	[2.9]	—	密	良	灰黄褐色 (10YR6/2) 暗黄灰色 (2.5Y5/2)	同転ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
115	42	23	3	S201	土師器	杯	(14.4)	[2.9]	—	密	良	灰白色 (10YR8/2) にぶい黄褐色 (10YR7/2)	ヘラミガキ 同転ナデ	底面同転糸切り
116	42	23	3	S201	土師器	杯	(12.8)	[3.1]	—	やや 粗	良	にぶい黄褐色 (10YR7/2) にぶい褐色 (7.5YR7/2)	同転ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
117	42	24	3	S201	土師器	杯	(13.2)	[3.2]	—	やや 密	やや 良	浅黄褐色 (7.5YR8/4) 浅黄褐色 (7.5YR8/4)	同転ナデ、ヘラミガキ 同転ナデ	底面同転糸切り
118	42	24	3	S201	土師器	杯	(15.7)	[3.6]	—	密	やや 良	にぶい黄褐色 (10YR7/2) にぶい黄褐色 (10YR7/2)	同転ナデ、ヘラミガキ 同転ナデ	底面同転糸切り
119	42	24	3	S201	土師器	杯	(15.4)	[2.5]	—	やや 密	やや 良	浅黄褐色 (10YR8/3) 浅黄褐色 (10YR8/3)	ヘラミガキ 同転ナデ	底面同転糸切り
120	43	24	3	S201	土師器	杯	(14.8)	[4.1]	—	密	良	灰黄褐色 (10YR6/2) 暗黄灰色 (2.5Y5/2)	同転ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
121	43	24	3	S201	土師器	杯	(12.4)	[2.9]	—	やや 粗	良	にぶい黄褐色 (10YR7/3) にぶい黄褐色 (10YR6/3)	同転ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り

第10表 出土土器・陶磁器観察一覧表(4)

No.	採国	採地	出土場所	種類	器種	法量 (cm)			胎土	構成	色調 (内)	主な調整 (内)	備考	
						口径 (復元値)	器高 (復元値)	底径 (復元値)						
122	43	24	3	S001	土師器	杯	(13.0)	[3.4]	—	やや 密	やや 良	浅黄褐色 (10YR8/3) 浅黄褐色 (10YR8/3)	同船ナゲ後ナゲ 同船ナゲ	
123	43	24	3	S001	土師器	杯	(15.4)	[4.0]	—	密	良	明褐色 (7.5YR7/2) にぶい黄褐色 (10YR7/2)	ヘラミガキ 同船ナゲ	
124	43	24	3	S001	土師器	杯	(13.2)	[3.2]	—	やや 密	やや 良	浅黄褐色 (7.5YR8/4) 浅黄褐色 (7.5YR8/4)	同船ナゲ、ヘラミガキ 同船ナゲ	
125	43	24	3	S001	土師器	杯	(15.7)	[3.6]	—	密	やや 良	にぶい黄褐色 (10YR7/2) にぶい黄褐色 (10YR7/2)	同船ナゲ、ヘラミガキ 同船ナゲ	
126	43	24	3	S001	土師器	杯	(15.4)	[2.5]	—	やや 密	やや 良	浅黄褐色 (10YR8/3) 浅黄褐色 (10YR8/3)	ヘラミガキ 同船ナゲ	
127	43	24	3	S001	土師器	杯	(13.8)	[3.4]	—	やや 密	やや 良	褐色 (5YR7/4) 褐色 (5YR7/4)	同船ナゲ、ヘラミガキ 同船ナゲ	
128	43	24	3	S001	土師器	杯	(12.2)	[2.9]	—	やや 密	やや 良	にぶい褐色 (7.5YR7/3) にぶい褐色 (7.5YR7/3)	ヘラミガキ 同船ナゲ	
129	43	24	3	S001	土師器	杯	(16.5)	[4.6]	—	密	良	浅黄褐色 (7.5YR8/3) 浅黄褐色 (7.5YR8/3)	ヘラミガキ 同船ナゲ	
130	43	24	3	S001	土師器	杯	(11.4)	[2.4]	—	密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	同船ナゲ 同船ナゲ	
131	43	24	3	S001	土師器	杯	—	[2.9]	—	密	やや 良	灰白色 (10YR8/2) 灰白色 (10YR8/2)	ヘラミガキ 同船ナゲ	
132	43	24	3	S001	土師器	杯	—	[2.6]	—	やや 密	やや 良	にぶい黄褐色 (10YR7/3) にぶい褐色 (7.5YR7/4)	同船ナゲ 同船ナゲ	
133	43	24	3	S001	土師器	杯	(15.8)	[4.0]	—	密	不良	灰白色 (10YR8/2) 灰白色 (10YR8/2)	ヘラミガキ 摩滅により不明	
134	43	24	3	S001	土師器	杯	—	[2.6]	—	密	やや 良	灰白色 (10YR8/2) 浅黄褐色 (10YR8/3)	ヘラミガキ 同船ナゲ	
135	43	24	3	S001	土師器	杯	—	[4.5]	—	密	良	にぶい黄褐色 (10YR6/4) にぶい黄褐色 (10YR6/3)	同船ナゲ 同船ナゲ	
136	43	24	3	S001	土師器	杯	—	[2.7]	5.6	やや 密	やや 良	灰白色 (10YR8/2) 灰褐色 (7.5YR4/2)	同船ナゲ 同船ナゲ	円盤状の底面
137	43	24	3	S001	土師器	杯	—	[1.4]	(6.4)	やや 密	やや 良	褐色 (5YR6/6) 褐色 (5YR6/6)	同船ナゲ 同船ナゲ	
138	43	24	3	S001	土師器	皿	(9.0)	2.9	(4.6)	やや 密	やや 良	浅黄褐色 (10YR8/3) 浅黄褐色 (10YR8/3)	同船ナゲ、ナゲ 同船ナゲ	底面同船未切り
139	43	25	3	S001	土師器	皿	6.5	1.0	5.9	やや 密	良	灰黄褐色 (10YR5/2) 灰黄褐色 (10YR5/2)	同船ナゲ 同船ナゲ	底面同船未切り
140	43	25	3	S001	土師器	碗または高台付皿	—	[2.9]	(6.8)	やや 密	やや 良	にぶい褐色 (7.5YR7/3) にぶい褐色 (7.5YR7/3)	同船ナゲ 同船ナゲ	底面同船未切り
141	43	25	3	S001	土師器	皿	(8.0)	1.4	(5.0)	密	良	灰黄色 (2.5Y7/2) 灰黄色 (2.5Y7/2)	同船ナゲ、ナゲ 同船ナゲ	底面同船未切り
142	43	25	3	S001	土師器	皿	(5.0)	1.2	(3.6)	やや 粗	やや 良	にぶい黄褐色 (10YR7/3) にぶい黄褐色 (10YR7/3)	同船ナゲ 同船ナゲ	底面同船未切り
143	43	25	3	S001	土師器	皿	—	[1.2]	(5.9)	やや 密	良	にぶい黄褐色 (10YR7/3) にぶい黄褐色 (10YR7/3)	同船ナゲ 同船ナゲ	底面同船未切り
144	43	25	3	S001	土師器	皿	—	[1.3]	—	密	やや 良	にぶい黄褐色 (10YR7/3) にぶい黄褐色 (10YR7/3)	同船ナゲ 同船ナゲ	底面同船未切り
145	43	25	3	S001	土師器	皿	—	[1.6]	4.5	やや 密	良	浅黄褐色 (10YR6/2) 浅黄褐色 (10YR6/2)	摩滅により不明 同船ナゲ	底面同船未切り
146	43	25	3	S001	土師器	皿	(9.2)	[2.6]	—	やや 密	やや 良	浅黄褐色 (10YR8/3) にぶい黄褐色 (10YR7/2)	同船ナゲ後ナゲ 同船ナゲ	
147	43	25	3	S001	土師器	皿	—	[2.1]	4.4	やや 密	やや 良	浅黄褐色 (7.5YR8/4) 浅黄褐色 (7.5YR8/4)	同船ナゲナゲ 同船ナゲ	底面同船未切り
148	43	25	3	S001	土師器	高台付皿	(14.4)	6.3	8.6	やや 密	やや 良	にぶい褐色 (7.5YR7/3) にぶい褐色 (7.5YR7/3)	同船ナゲ、指オコシ、ナゲ 同船ナゲ	底面同船未切り
149	43	25	3	S001	土師器	柱状高台皿	—	[2.0]	—	やや 密	やや 良	浅黄褐色 (10YR6/2) 浅黄褐色 (10YR6/2)	ヘラミガキ 同船ナゲ	底面に付孔
150	43	25	3	S001	土師器	皿	—	[2.0]	3.6	やや 密	不良	灰白色 (10YR8/2) 灰白色 (10YR8/2)	摩滅により不明 摩滅により不明	
151	43	25	3	S001	土師器	碗	—	[1.7]	5.7	やや 密	不良	灰白色 (10YR8/2) 灰白色 (10YR8/2)	摩滅により不明 摩滅により不明	
152	43	25	3	S001	土師器	碗	—	[1.8]	(7.0)	やや 密	やや 良	浅黄褐色 (7.5YR8/4) 浅黄褐色 (7.5YR8/4)	ヘラミガキ 摩滅により不明	
153	44	25	3	S001	土師器	碗	15.8	4.8	6.4	やや 密	やや 良	浅黄褐色 (10YR8/3) ～ にぶい黄褐色 (10YR7/3) にぶい黄褐色 (10YR7/3)	同船ナゲ、ヘラミガキ 同船ナゲ	底面同船未切り
154	44	25	3	S001	土師器	碗	(13.2)	[5.3]	(6.8)	密	良	にぶい黄褐色 (10YR7/2) にぶい黄褐色 (10YR7/2)	ヘラミガキ、ナゲ ヘラミガキ、ナゲ	
155	44	25	3	S001	土師器	碗	(13.8)	[3.4]	—	密	やや 良	にぶい黄褐色 (10YR7/3) 浅黄褐色 (10YR8/3)	ヘラミガキ 同船ナゲ、ナゲ	
156	44	25	3	S001	土師器	碗	(13.4)	[2.6]	—	密	やや 良	浅黄褐色 (10YR8/3) 浅黄褐色 (10YR8/4)	同船ナゲ、ヘラミガキ 同船ナゲ	
157	44	26	3	S001	土師器	碗	(13.2)	[3.5]	—	密	良	にぶい黄褐色 (10YR7/2) にぶい黄褐色 (10YR7/2)	ヘラミガキ 同船ナゲ	体部外面に黒痕
158	44	26	3	S001	土師器	碗	(15.8)	[4.3]	—	やや 密	やや 良	浅黄褐色 (10YR8/3) 浅黄褐色 (10YR8/3)	ヘラミガキ 同船ナゲ	
159	44	26	3	S001	土師器	碗	(13.2)	[2.2]	—	密	良	浅黄褐色 (10YR8/3) 浅黄褐色 (10YR8/3)	ヘラミガキ 同船ナゲ	
160	44	26	3	S001	土師器	碗	(14.4)	[4.2]	—	密	良	浅黄褐色 (10YR8/4) 浅黄褐色 (10YR8/4)	ヘラミガキ 同船ナゲ	
161	44	26	3	S001	土師器	碗	(14.0)	[3.6]	—	やや 密	良	明褐色 (10YR7/2) 明褐色 (10YR7/2)	ヘラミガキ 同船ナゲ	

第 11 表 出土土器・陶磁器観察一覧表(5)

No.	調査年度	調査地区	出土場所	種類	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	(内) 色調 (外)	(内) 主な調整 (外)	備考
						口径 (底元端)	器高 (底元端)	底径 (底元端)					
162	44	26	3	S201	土師器	柄	(13.2)	[2.2]	—	密	やや良 灰白色 (10YR8/2) 黄褐色 (10YR8/2)	ヘラミガキ 回転ナデ	
163	44	26	3	S201	土師器	柄	(14.8)	[3.1]	—	密	良 灰白色 (10YR8/2) 灰白色 (10YR8/2)	回転ナデ後ナデ 回転ナデ	
164	44	26	3	S201	土師器	柄	(16.2)	[3.0]	—	密	良 にぶい黄褐色 (10YR7/3) にぶい黄褐色 (10YR7/3)	ヘラミガキ 回転ナデ	
165	44	26	3	S201	土師器	柄	—	[1.7]	(5.0)	密	やや良 灰白色 (10YR8/2) 灰白色 (10YR8/2)	ナデ後ヘラミガキ 回転ナデ、ナデ	
166	44	26	3	S201	土師器	柄	—	[2.0]	(6.0)	やや密	やや良 黄褐色 (10YR8/3) 黄褐色 (10YR8/3)	摩滅により不明 摩滅により不明	
167	44	26	3	S201	土師器	柄	—	[1.7]	(6.8)	やや密	やや良 にぶい黄褐色 (10YR7/3) 黄褐色 (10YR7/2)	ナデ 回転ナデ後ナデ ヘラミガキ	
168	44	26	3	S201	土師器	柄	—	[1.6]	(5.0)	密	やや良 にぶい黄褐色 (10YR7/3) 黄褐色 (10YR8/3)	回転ナデ、ナデ	
169	44	26	3	S201	土師器	柄	—	[2.2]	(6.6)	密	やや良 灰白色 (10YR8/2) 黄褐色 (10YR8/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底面回転糸切り
170	44	26	3	S201	土師器	柄	—	[2.1]	(6.0)	やや粗	にぶい黄褐色 (10YR7/2) にぶい黄褐色 (10YR7/2)	ヘラミガキ 摩滅により不明	
171	44	26	3	S201	土師器	柄	—	[2.0]	(6.4)	密	良 にぶい黄褐色 (10YR7/3) 黄褐色 (10YR8/3)	ヘラミガキ 回転ナデ、ナデ	底面回転糸切り
172	44	26	3	S201	土師器	柄	—	[1.7]	(5.4)	やや密	やや良 黄褐色 (10YR8/2) 黄褐色 (10YR8/2)	摩滅により不明 回転ナデ、底面ナデ	
173	44	26	3	S201	土師器	柄	—	[2.9]	(6.8)	やや密	やや良 黄褐色 (10YR8/2) 黄褐色 (10YR8/2)	摩滅により不明 摩滅により不明	
174	44	26	3	S201	土師器	柄	—	[2.9]	(6.4)	やや密	やや良 黄褐色 (10YR8/2) 黄褐色 (10YR8/2)	ヘラミガキ 回転ナデ	
175	44	26	3	S201	土師器	柄	—	[1.6]	(6.8)	密	やや良 にぶい黄褐色 (10YR7/2) 黄褐色 (10YR8/2)	ヘラミガキ 回転ナデ、底面ナデ	
176	44	26	3	S201	土師器	柄	—	[1.7]	(7.0)	密	やや良 黄褐色 (10YR8/2) 灰白色 (10YR8/2)	回転ナデ後ナデ 回転ナデ、底面ナデ	
177	44	26	3	S201	土師器	柄	—	[1.8]	(5.8)	密	良 灰白色 (10YR8/2) 灰白色 (10YR8/2)	回転ナデ、ナデ	
178	44	26	3	S201	土師器	柄	—	[2.3]	(5.8)	やや密	やや良 灰白色 (10YR8/2) 黄褐色 (10YR8/3)	ヘラミガキ 回転ナデ、底面ナデ	
179	44	26	3	S201	土師器	柄	—	[3.3]	(5.6)	やや粗	不目 灰白色 (10YR8/2) 灰白色 (10YR8/2)	ヘラミガキ 回転ナデ	底面ヘラ切り
180	44	26	3	S201	土師器	柄	—	[1.9]	(6.5)	密	やや良 灰白色 (2.5YR8/2) 灰白色 (2.5YR8/2)	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	
181	44	26	3	S201	土師器	柄	—	[1.4]	—	密	やや良 灰白色 (10YR8/2) 灰白色 (10YR8/2)	ヘラミガキ 回転ナデ	底面回転糸切り
182	44	26	3	S201	土師器	柄	—	[2.2]	(6.8)	やや密	良 にぶい黄褐色 (10YR7/3) にぶい黄褐色 (10YR7/4)	ヘラミガキ 回転ナデ、底面ナデ	
183	44	26	3	S201	土師器	柄	—	[3.1]	(7.4)	やや密	やや良 黄褐色 (10YR8/2) 灰白色 (10YR8/2)	摩滅により不明 摩滅により不明	
184	45	27	3	S201	瓦質土器	羽釜	(27.1)	[6.5]	—	やや密	灰褐色 (10YR5/1) 灰褐色 (10YR4/1)	ハケ目後ナデ ハケ目、指サエ	外面に煤付着
185	45	27	3	S201	瓦質土器	羽釜	—	[5.4]	—	やや粗	黄灰色 (2.5Y5/1) 黄灰色 (2.5Y5/1)	ハケ目 回転ナデ、指サエ後ナデ	外面に煤付着
186	45	27	3	S201	瓦質土器	羽釜	(27.0)	[2.3]	—	密	良 灰色 (5Y4/1) 灰色 (5Y5/1)	ハケ目 回転ナデ、ヨコナデ	
187	45	27	3	S201	瓦質土器	羽釜	—	[2.5]	—	やや密	にぶい黄褐色 (10YR7/2) 褐色 (7.5YR7.6)	回転ナデ 回転ナデ	
188	45	27	3	S201	瓦質土器	羽釜	(26.8)	[6.1]	—	やや粗	黒色 (2.5Y2/1) 黄灰色 (2.5Y6/1)	ハケ目 回転ナデ	
189	45	27	3	S201	瓦質土器	羽釜	—	[4.3]	—	やや粗	黒色 (7.5YR2/1) 黒色 (2.5Y2/1)	ハケ目、ナデ 回転ナデ	
190	45	27	3	S201	瓦質土器	羽釜	(24.4)	[4.0]	—	やや粗	暗灰色 (N3/3) 暗灰色 (N3/3)	ハケ目 回転ナデ	外面に煤付着
191	45	27	3	S201	瓦質土器	羽釜	—	[3.4]	—	密	灰色 (N5/7) 黄灰色 (2.5Y5/1)	ハケ目 ハケ目、指サエ	外面に煤付着
192	45	27	3	S201	瓦質土器	羽釜	(28.5)	[5.5]	—	やや粗	黒褐色 (2.5Y3/1) 黒褐色 (2.5Y3/1)	ハケ目 ハケ目、指サエ	外面に煤付着
193	45	27	3	S201	瓦質土器	羽釜	—	[3.8]	—	やや密	黒色 (2.5Y2/1) 灰色 (N5/7)	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	
194	45	27	3	S201	土師器	羽釜	(27.4)	[6.5]	—	やや粗	明赤褐色 (5YR5/8) 褐色 (5YR6/6)	ハケ目 ハケ目	
195	45	27	3	S201	瓦質土器	羽釜	—	[7.0]	—	やや粗	灰褐色 (10YR5/1) 灰褐色 (5YR5/1)	ハケ目 ハケ目	外面に煤付着
196	45	27	3	S201	瓦質土器	羽釜	(26.0)	[5.3]	—	やや粗	暗灰色 (7.5YR6/1) 暗褐色 (7.5YR6/2)	ハケ目 ナデ、ハケ目	
197	45	27	3	S201	瓦質土器	羽釜	—	[6.0]	—	やや粗	灰褐色 (7.5YR6/2) 暗灰色 (7.5YR5/1)	ハケ目後ナデ ハケ目、指サエ	外面に煤付着
198	45	27	3	S201	瓦質土器	羽釜	(27.6)	[2.1]	—	やや密	黄灰色 (2.5Y4/1) 灰褐色 (2.5Y4/1)	回転ナデ 回転ナデ	
199	45	27	3	S201	瓦質土器	羽釜	—	[2.9]	—	やや密	黄灰色 (2.5Y4/1) 暗灰色 (10YR4/1)	回転ナデ 回転ナデ	
200	45	27	3	S201	瓦質土器	羽釜	(29.0)	[1.9]	—	やや密	黄灰色 (2.5Y6/1) 灰色 (10YR7/1)	ハケ目 回転ナデ	
201	45	28	3	S201	瓦質土器	羽釜	—	[2.3]	—	やや密	灰褐色 (10YR4/1)~5/1) 暗灰色 (10YR4/1)	ハケ目 回転ナデ	

第12表 出土土器・陶磁器観察一覧表(6)

No.	邦国	国版	地区	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			新	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備考
							口径 (復元値)	器高 (復元値)	底径 (復元値)					
202	45	28	3	S001	瓦質土器	羽釜	(27.6)	[3.4]	—	やや 密	良	黄灰色 (2.5Y5/1) 黒色 (10YR1.7/1)	ハク目後調整ナゲ 調整ナゲ、ハク目後指サエ	
203	45	28	3	S001	瓦質土器	羽釜	—	[3.0]	—	密	良	黄灰色 (2.5Y6/1) 黄灰色 (2.5Y6/1)	調整ナゲ 調整ナゲ	
204	46	28	3	S001	瓦質土器	羽釜	(33.6)	[6.3]	—	やや 密	良	灰色 (N6~N4/) 灰色 (N6.1)	調整ナゲ、ハク目 調整ナゲ、指サエ	
205	46	28	3	S001	瓦質土器	羽釜	(33.8)	[9.1]	—	密	良	オリーブ灰色 (5Y3/1) オリーブ灰色 (5Y3/1)	調整ナゲ、ナゲ、ハク目 調整ナゲ、ハク目	
206	46	28	3	S001	瓦質土器	羽釜	(29.0)	[4.9]	—	やや 密	良	黄灰色 (2.5Y5/1) 黄灰色 (2.5Y4/1)	ハク目 調整ナゲ、指サエ後ナゲ	
207	46	28	3	S001	瓦質土器	羽釜	(30.0)	[7.1]	—	やや 密	良	黄灰色 (2.5Y4/1) 黒色 (2.5Y2/1)	ハク目後調整ナゲ 調整ナゲ、ハク目	外面に覆行者
208	46	28	3	S001	瓦質土器	羽釜	(30.8)	[7.6]	—	やや 密	良	黄灰色 (2.5Y4/1) 灰色 (5Y4/1)	調整ナゲ、ハク目 調整ナゲ、タタキ後ハク目	
209	46	28	3	S001	瓦質土器	羽釜	(32.6)	[7.3]	—	やや 密	良	黄灰色 (2.5Y5/1) 黒褐色 (2.5Y3/1)	ハク目 ナゲ、調整ナゲ	
210	46	28	3	S001	瓦質土器	羽釜	—	[4.4]	—	やや 密	良	褐色 (10YR4/1) 灰黄褐色 (10YR4/2)	ハク目 調整ナゲ、指サエ	
211	46	28	3	S001	瓦質土器	羽釜	—	[4.7]	—	やや 密	良	灰色 (N5/) 灰色 (5Y4/1)	ハク目 調整ナゲ、ナゲ	
212	46	28	3	S001	瓦質土器	羽釜	—	[3.7]	—	やや 粗	良	黒色 (7.5Y2/1) 黒色 (7.5Y2/1)	ハク目 調整ナゲ、ハク目	
213	46	28	3	S001	瓦質土器	羽釜	—	[3.9]	—	やや 密	良	黒色 (10YR2/1) 黒色 (10YR2/1)	調整ナゲ 調整ナゲ	
214	46	29	3	S001	瓦質土器	羽釜	—	[3.3]	—	やや 密	良	褐色 (10YR6/1) 褐色 (10YR6/1)	調整ナゲ 調整ナゲ後指サエ	外面に若干泥付着
215	46	29	3	S001	瓦質土器	羽釜	—	[3.0]	—	密	良	灰褐色 (7.5YR6/2) 褐色 (7.5YR5/1)	ハク目後ナゲ ハク目、指サエ後ハク目	
216	47	29	3	S001	瓦質土器	甕	—	[7.4]	—	やや 密	良	灰黄褐色 (10YR6/2) 灰黄褐色 (10YR5/2)	調整ナゲ、ハク目 調整ナゲ、タタキ後ナゲ	内外面に覆行者
217	47	29	3	S001	瓦質土器	甕	—	[4.1]	—	やや 粗	不良	灰黄色 (2.5Y7/2) 青灰色 (3B5/1)	調整ナゲ 調整ナゲ	
218	47	29	3	S001	瓦質土器	甕	—	[2.6]	—	やや 密	良	緑灰色 (N3/) 緑灰色 (N3/)	調整ナゲ 調整ナゲ	外面に覆行者
219	47	29	3	S001	土師器	足鉢	—	[10.9]	—	やや 粗	良	灰黄褐色 (10YR5/2)	指サエ整形	脚部
220	47	29	3	S001	瓦質土器	足鉢	—	[9.6]	—	やや 密	良	灰色 (N6/) 灰色 (N6/1)~灰白色 (N7/)	ハク目 ヘラナゲ	脚部、外面に覆行者
221	47	29	3	S001	土師器	足鉢	—	[12.8]	—	やや 粗	良	— にぶい褐色 (10YR6/3~6/4)	指サエ	脚部、縦状足
222	47	29	3	S001	瓦質土器	足鉢	—	[12.8]	—	やや 粗	良	黄灰色 (2.5Y4/1)	指サエ、一部ハク目	脚部
223	47	29	3	S001	瓦質土器	足鉢	—	[14.0]	—	やや 粗	良	黒色 (N2/) にぶい黄褐色 (10YR7/2)	ハク目 指サエ、ナゲ	脚部
224	47	29	3	S001	土師器	甕	(26.0)	[3.4]	—	やや 密	良	にぶい褐色 (5YR7/4) にぶい褐色 (7.5YR7/4)	ナゲ、ハク目後ナゲ ナゲ、指サエ後ハク目	
225	47	29	3	S001	土師器	甕	(27.0)	[4.6]	—	やや 密	良	浅黄褐色 (10YR8/3) にぶい褐色 (7.5YR6/3)	調整ナゲ、ハク目 調整ナゲ	
226	47	29	3	S001	弥生土器	甕	—	[2.6]	8.6	やや 密	良	浅黄褐色 (10YR8/3) にぶい褐色 (5YR7/4)	厚縁により不明 厚縁により不明	
227	47	29	3	S001	弥生土器	甕	—	[3.6]	(8.0)	やや 密	良	灰色 (N6/) 灰色 (N6/)	調整ナゲ、ナゲ 調整ナゲ、ナゲ	
228	47	29	3	S001	弥生土器	甕	(17.6)	[6.6]	—	密	良	灰色 (N6/) 灰色 (N5/)	調整ナゲ、ナゲ 調整ナゲ、タタキ	
231	48	30	3	S001	青磁	甕	—	[2.9]	—	密	良	緑釉：明黄灰色 (5YR7/3) 釉：オリーブ灰色 (2.5Y6/1)	調整ナゲ 調整ナゲ	内面に藍文、縦帯筋 透か
232	48	30	3	S001	青磁	甕	—	[3.6]	—	密	良	緑釉：灰白色 (N8/) 釉：明オリーブ灰色 (2.5Y7/1)	調整ナゲ 調整ナゲ	片蓋無文 (片蓋短 り縦沈線)
233	48	30	3	S001	青磁	甕	(16.4)	[5.7]	—	密	良	緑釉：明オリーブ灰色 (2.5Y7/1) 釉：灰オリーブ色 (5Y5/2)	調整ナゲ 調整ナゲ、調整ナゲ	外面に無縁の垂文文 飾
234	48	30	3	S001	青磁	甕	—	[2.3]	(5.2)	密	良	緑釉：灰白色 (10Y7/1) 釉：オリーブ灰色 (10Y6/2)	調整ナゲ 調整ナゲ、調整ナゲ	見込みに片蘭草文花 飾
235	48	30	3	S001	青磁	甕	(10.6)	[2.9]	—	密	良	緑釉：灰白色 (5YR/1) 釉：灰白色 (5Y7/1, 5)	調整ナゲ 調整ナゲ	見込みに蘭花文 飾
236	48	30	3	S001	白磁	甕	(17.7)	[2.2]	—	密	良	緑釉：灰白色 (N8/) 釉：灰白色 (7.5Y7/1)	調整ナゲ 調整ナゲ	
237	48	30	3	S001	白磁	甕	(15.7)	[1.6]	—	密	良	緑釉：灰白色 (N8/1) 釉：灰白色 (7.5Y7/1)	調整ナゲ 調整ナゲ	外面にヘタ片藍文 内面に1本沈線
238	48	30	3	S001	白磁	甕	—	[3.2]	(5.8)	密	良	緑釉：灰白色 (N8/) 釉：灰白色 (5Y7/1)	調整ナゲ 調整ナゲ、調整ナゲ	見込みに目録刺 し、削り出し高台
239	48	30	3	S001	白磁	甕	—	[2.0]	(7.6)	密	良	緑釉：灰白色 (2.5YR/3) 釉：灰白色 (2.5Y7/1)	調整ナゲ 調整ナゲ	削り出し高台
240	48	30	3	S001	白磁	甕	—	[3.7]	5.2	密	良	緑釉：灰白色 (10YR/1) 釉：灰白色 (2.5Y7/1)	調整ナゲ 調整ナゲ	
241	48	30	3	S001	白磁	甕	—	[2.7]	(5.7)	密	良	緑釉：灰白色 (2.5YR/3) 釉：灰白色 (10Y7/1)	調整ナゲ 調整ナゲ	緑色の髪やや不定 形

第 13 表 出土土器・陶磁器観察一覧表(7)

No.	調査年度	調査地区	出土場所	種類	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内)		主な調整 (内)	備考
						口径 (底元径)	器高 (残存高)	底径 (底元径)			色調 (外)			
242	48	30	3	SD01	白磁	皿	(11.0)	2.3	(4.4)	やや 密	良	黄緑：灰白色 (5Y8/1) 輪：灰白色 (5Y7.5/1)	同転ナデ 同転ナデ	口縁内面に輪だまり、 基部筋線剥落、 基部高台付
243	48	30	3	SD01	白磁	皿	—	[1.4]	(4.0)	密	良	黄緑：灰白色 (7.5Y8/1) 輪：灰白色 (10Y8/1)	同転ヘラケツリ 同転ナデ、同転ヘラケツリ	
244	49	31	3	SD02	土師器	杯	—	[2.3]	6.5	やや 密	良	浅黄褐色 (7.5Y8/4) 浅黄褐色 (7.5Y8/4)	同転ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
245	49	31	3	SD02	土師器	杯	—	[2.9]	(6.5)	やや 密	良	浅黄褐色 (7.5Y8/3) 浅黄褐色 (7.5Y8/4)	同転ナデ後ナデ 同転ナデ後ナデ	底面同転糸切り
246	49	31	3	SD02	土師器	皿	—	[1.8]	(4.7)	密	良	灰白色 (7.5Y8/2) 灰白色 (10Y8/2)	同転ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
247	49	31	3	SD10	土師器	皿	(8.6)	1.4	(5.5)	やや 密	良	にぶい褐色 (7.5Y7/3) にぶい褐色 (5Y8/6)	同転ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
248	49	31	3	SD10	白磁	碗	—	[3.5]	—	密	良	黄緑：灰白色 (7.5Y8/1) 輪：灰白色 (7.5Y7/1)	同転ナデ 同転ナデ	
249	49	31	3	SD41	土師器	皿	(10.4)	3.1	(3.0)	やや 密	良	にぶい褐色 (7.5Y7/4) にぶい褐色 (7.5Y7/4)	同転ナデ、ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
250	49	31	3	SD41	土師器	皿	—	[1.2]	5.6	やや 密	良	浅黄褐色 (7.5Y8/4) にぶい褐色 (7.5Y7/3)	同転ナデ、ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
251	49	31	3	SD41	土師器	皿	—	[6.7]	(3.6)	やや 密	良	灰白色 (7.5Y8/2) 灰白色 (7.5Y8/2)	同転ナデ、ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
252	49	31	3	SD41	土師器	皿	—	[2.3]	4.6	やや 密	良	浅黄褐色 (7.5Y8/4) 浅黄褐色 (7.5Y8/4)	同転ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
253	49	31	3	SD15	土師器	皿	—	[1.0]	(3.8)	やや 密	良	にぶい褐色 (7.5Y7/3) にぶい褐色 (7.5Y7/4)	同転ナデ、ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
254	49	31	3	SD15	土師器	碗	—	[1.8]	(7.4)	やや 密	良	灰白色 (7.5Y8/2) 灰白色 (7.5Y8/2)	同転ナデ 同転ナデ、ナデ	底面ヘラ切り
255	49	31	3	SD09	土師器	杯	—	[1.6]	(6.4)	やや 密	良	にぶい褐色 (7.5Y7/4) にぶい褐色 (7.5Y7/4)	同転ナデ後ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
256	49	31	3	SD09	土師器	杯	—	[2.3]	(6.0)	やや 密	良	浅黄褐色 (10Y8/2) にぶい褐色 (10Y8/3)	同転ナデ後ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
257	49	31	3	SD09	土師器	杯	—	[3.6]	(6.2)	密	良	灰白色 (10Y8/2) 浅黄褐色 (10Y8/2)	同転ナデ後ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
258	49	31	3	SD20	土師器	碗	—	[1.5]	(5.8)	やや 密	良	浅黄褐色 (7.5Y8/3) ~ 明褐色 (7.5Y7/2) 浅黄褐色 (7.5Y8/4) ~ 明褐色 (7.5Y7/2)	ヘラミガキか 同転ナデ、ナデ	底面ヘラ切り
261	50	31	3	SP58	土師器	杯	12.0	3.9	6.6	やや 密	良	褐色 (5Y8/6) 褐色 (5Y8/6)	同転ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
262	50	32	3	SP240	土師器	杯	—	[2.0]	5.8	やや 密	良	浅黄褐色 (10Y8/2) 浅黄褐色 (10Y8/2)	同転ナデ、ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
263	50	32	3	SP78	土師器	杯	—	[1.7]	6.4	密	良	浅黄褐色 (7.5Y8/4) 浅黄褐色 (7.5Y8/4)	同転ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
264	50	32	3	SP15	土師器	杯	—	[1.8]	6.4	やや 密	良	明褐色 (7.5Y7/2) 浅黄褐色 (10Y8/2)	同転ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
265	50	31	3	SP107	土師器	碗	(16.6)	5.4	6.4	密	良	浅黄褐色 (7.5Y8/3) 灰白色 (10Y8/2)	ヘラミガキか 同転ナデ	底面同転糸切り
266	50	31	3	SP317	土師器	碗	(16.4)	5.9	(6.8)	やや 密	良	浅黄褐色 (7.5Y8/4) 浅黄褐色 (7.5Y8/4)	ヘラミガキか 同転ナデ	口縁端部ニ線状
267	50	32	3	SP52	土師器	碗	(15.6)	6.0	(5.6)	やや 密	良	浅黄褐色 (10Y8/2) 灰白色 (10Y8/2)	同転ナデ 同転ナデ	断面逆三角形の低い 高台
268	50	31	3	SP254	土師器	杯	(16.2)	[3.5]	—	やや 密	良	にぶい黄褐色 (10Y8/2) にぶい黄褐色 (10Y8/2)	同転ナデ後ナデ 同転ナデ	
269	50	32	3	SP52	土師器	杯5~6	(11.8)	[3.1]	—	やや 密	良	褐色 (5Y8/6) 褐色 (5Y8/6)	同転ナデ 同転ナデ	内面に有機物付着
270	50	31	3	SP112	土師器	碗	(11.8)	[3.8]	—	やや 密	良	浅黄褐色 (7.5Y8/3) 浅黄褐色 (7.5Y8/3)	同転ナデ後ナデ 同転ナデ	
271	50	32	3	SP240	土師器	碗	—	[3.4]	—	やや 密	良	浅黄褐色 (10Y8/2) 浅黄褐色 (10Y8/2)	同転ナデ 同転ナデ	口縁端部外反
272	50	32	3	SP237	土師器	碗	—	[3.3]	—	やや 密	良	灰白色 (10Y7/1) 浅黄褐色 (10Y8/2)	摩滅により不明 同転ナデ	口縁端部外反
273	50	32	3	SP64	土師器	碗	—	[1.7]	6.1	密	良	浅黄褐色 (10Y8/2) 浅黄褐色 (10Y8/2)	同転ナデか 同転ナデ、ナデ	骨付編込
274	50	32	3	SP281	土師器	高台付 底盤	—	[2.8]	(7.2)	やや 密	良	浅黄褐色 (10Y8/2) 浅黄褐色 (10Y8/2)	同転ナデか 摩滅により不明	
275	50	32	3	SP90	土師器	杯	—	[4.5]	6.3	やや 密	良	にぶい褐色 (5Y8/4) にぶい褐色 (5Y8/4)	同転ナデ後ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
276	50	32	3	SP52	土師器	杯	—	[1.6]	(7.6)	密	良	浅黄褐色 (7.5Y8/3) 浅黄褐色 (7.5Y8/3)	同転ナデ後ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り
277	50	32	3	SP52	土師器	皿	(7.0)	1.3	(5.4)	やや 密	良	褐色 (5Y8/6) 褐色 (5Y8/6)	同転ナデ 同転ナデ	内外面に有機物付着
278	50	32	3	SP275	土師器	皿	(8.4)	1.8	(3.8)	やや 密	良	にぶい黄褐色 (10Y8/2) にぶい黄褐色 (10Y8/2)	同転ナデ 同転ナデ	板目正底残存
279	50	32	3	SP92	土師器	皿	(7.8)	1.8	3.4	やや 密	良	にぶい黄褐色 (10Y8/2) にぶい黄褐色 (10Y8/2)	同転ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り、板目 正底残存
280	50	32	3	SP305	土師器	皿	7.7	1.4	5.8	やや 密	良	にぶい褐色 (7.5Y7/3) にぶい褐色 (7.5Y7/4)	同転ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り、黒 み大
281	50	32	3	SP90	土師器	皿	8.2	2.9	4.2	やや 密	良	浅黄褐色 (7.5Y8/4) 浅黄褐色 (7.5Y8/4)	同転ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り、板目 正底残存
282	50	32	3	SP04	土師器	皿	—	[1.8]	3.9	やや 密	良	浅黄褐色 (10Y8/2) 浅黄褐色 (10Y8/2)	同転ナデ 同転ナデ	底面同転糸切り

第14表 出土土器・陶磁器観察一覧表(8)

No.	邦国	地区	出土場所	種類	器種	法量 (cm)			胎土	構成	(内) 色調 (外)	(内) 主な調整 (外)	備考
						口径 (復元値)	底高 (復元値)	底径 (復元値)					
283	50	32	3	SP258	土師器	高台付蓋	9.6	3.3	5.8	密	浅黄褐色 (10YR8/3) 浅黄褐色 (10YR8/3)	同転ナデ	高い高台
284	50	32	3	SP69	土師器	高台付蓋	—	[2.8]	(7.0)	密	灰白色 (10YR8/2) 灰白色 (10YR8/2)	同転ナデ	底部回転糸切り
285	50	32	3	SP52	土師器	蓋	—	[5.7]	—	密	浅黄褐色 (7.5YR8/3) 浅黄褐色 (10YR8/3)	ハケ目 ハケ目後ナデ	—
288	52	33	3	SK41	土師器	杯	13.5	4.5	5.5	やや密	にぶい黄褐色 (10YR7/3) にぶい黄褐色 (10YR7/3)	同転ナデ	底部回転糸切り
289	52	33	3	SK44	土師器	杯	—	[2.4]	5.8	やや密	にぶい褐色 (7.5YR7/4) にぶい褐色 (7.5YR7/4)	同転ナデ後ナデ	底部回転糸切り
290	52	33	3	SK39	土師器	杯	(13.6)	4.9	(5.6)	やや密	にぶい褐色 (7.5YR7/4) にぶい褐色 (7.5YR7/4)	同転ナデ	底部回転糸切り
291	52	33	3	SK58	土師器	杯	(13.6)	[2.9]	—	やや密	褐色 (7.5YR7/4) にぶい黄褐色 (7.5YR7/4)	同転ナデ	—
292	52	33	3	SK51	土師器	皿	10.6	2.1	4.6	やや密	灰白色 (10YR8/2) 灰白色 (10YR8/2)	同転ナデ	底部回転糸切り、板目圧痕残存、内外面に有機物付着
293	52	33	3	SK51	土師器	皿	(11.6)	2.6	5.6	やや密	にぶい黄褐色 (10YR7/2) にぶい黄褐色 (10YR7/2)	同転ナデ、ナデ	板目圧痕残存
294	52	33	3	SK51	土師器	皿	(14.6)	3.6	(6.6)	やや密	灰白色 (10YR8/2) 灰白色 (10YR8/2)	同転ナデ	—
295	52	33	3	SK51	土師器	皿	(14.2)	2.6	(7.4)	やや密	浅黄褐色 (10YR8/3) 灰白色 (10YR8/2)	同転ナデ、ナデ	底部回転糸切り
296	52	33	3	SK51	土師器	皿	(14.4)	1.8	—	やや密	灰白色 (10YR8/2) 灰白色 (10YR8/2)	同転ナデ	—
297	52	34	3	SK51	土師器	皿	(12.0)	[2.1]	(6.4)	密	灰白色 (7.5YR8/1) 明褐色 (7.5YR7/1)	同転ナデ	底部回転糸切り
298	52	34	3	SK51	土師器	皿	(13.6)	[1.8]	—	やや密	灰白色 (10YR7/1) にぶい黄褐色 (10YR7/2)	同転ナデ	—
299	52	34	3	SK51	土師器	皿	—	[1.9]	(6.0)	やや密	灰白色 (10YR8/3) 灰白色 (10YR8/3)	同転ナデ	底部回転糸切り
300	52	34	3	SK41	土師器	皿	—	[1.6]	3.8	やや密	浅黄褐色 (7.5YR8/4) 浅黄褐色 (7.5YR8/4)	同転ナデ、ナデ	底部回転糸切り、板目圧痕残存
301	52	34	3	SK44	土師器	皿	(8.2)	1.2	(5.0)	やや密	褐色 (7.5YR7/3) にぶい褐色 (7.5YR7/3)	同転ナデ	底部回転糸切り
302	52	34	3	SK29	土師器	皿	—	[1.2]	(5.0)	やや密	灰白色 (10YR8/2) 灰白色 (10YR8/2)	同転ナデ、ナデ	—
303	52	34	3	SK61	土師器	高台付蓋	(13.0)	4.9	(6.2)	密	浅黄褐色 (7.5YR8/4) 浅黄褐色 (10YR8/3)	同転ナデ	—
304	52	34	3	SK49	土師器	高台付蓋	13.6	4.9	6.6	やや密	浅黄褐色 (10YR8/3) 浅黄褐色 (10YR8/4)	同転ナデ、ナデ	底部ヘラ切り
305	52	34	3	SK41	土師器	高台付蓋	15.0	4.4	6.6	やや密	浅黄褐色 (7.5YR8/4) 浅黄褐色 (7.5YR8/4)	ハケミガキ 同転ナデ、ナデ	底部ヘラ切り
306	52	34	3	SK41	土師器	皿	—	[1.9]	(4.2)	密	灰黄褐色 (10YR5/2) 浅黄褐色 (10YR8/3)	同転ナデ 同転ナデム	—
307	52	34	3	SK50	土師器	柱状高台付蓋	(8.6)	4.3	(5.2)	やや密	にぶい褐色 (7.5YR7/4) 浅黄褐色 (7.5YR8/4)	摩滅により不明	底部内面中央に未貫通の円孔
308	52	34	3	SK63	土師器	碗	—	[1.7]	(6.4)	密	灰白色 (10YR8/2) にぶい黄褐色 (10YR7/2)	ナデム ナデム	—
309	52	34	3	SK41	土師器	碗	—	[1.8]	(6.8)	密	浅黄褐色 (10YR8/3) 浅黄褐色 (10YR8/3)	ハケミガキ 同転ナデ	—
310	52	34	3	SK12	土師器	碗	—	[2.5]	(6.2)	密	浅黄褐色 (7.5YR8/3) 浅黄褐色 (10YR8/3)	ハケミガキ 同転ナデ	底部回転糸切り
311	52	34	3	SK01	土師器	碗	(16.1)	[3.1]	—	密	浅黄褐色 (10YR8/3) 浅黄褐色 (10YR8/3)	ハケミガキ 同転ナデ	—
312	52	34	3	SK07	土師器	碗	—	[4.3]	6.5	密	にぶい黄褐色 (10YR7/4) にぶい黄褐色 (10YR7/4)	ハケミガキ 同転ナデ	底部回転糸切り
313	52	34	3	SK08	白磁	碗	—	[2.7]	—	密	緑青：灰白色 (5YR/1) 緑：灰白色 (2.5Y/1)	同転ナデ	内外面施釉
314	53	35	3	SK38	瓦質土器	羽釜	(24.4)	[10.0]	—	やや密	浅黄褐色 (10YR8/3) にぶい黄褐色 (10YR7/2)	同転ナデ	—
315	53	35	3	SK51	瓦質土器	鍋	(26.6)	[10.6]	—	やや密	灰色 (5N5) 黄灰色 (2.5Y5/1)	ハケ目後同転ナデ 同転ナデ、ナデ、タタキ	—
316	53	35	3	SK51	瓦質土器	足鉢	(23.9)	[9.8]	—	やや密	黄灰色 (2.5Y5/1) 黄灰色 (10YR5/1)	ハケ目 同転ナデ、タタキ	—
317	53	35	3	SK51	瓦質土器	鍋	(29.2)	[9.2]	—	密	灰白色 (10YR8/1) 灰黄褐色 (10YR5/2)	ハケ目 同転ナデ	—
318	53	35	3	SK51	瓦質土器	鍋	(37.0)	[7.5]	—	やや密	灰色 (5N5) にぶい褐色 (7.5YR5/3)	ハケ目後同転ナデ ハケ目後同転ナデ	外面一部に剥落
319	53	35	3	SK51	瓦質土器	足鉢	—	[7.5]	—	やや粗	にぶい褐色 (5YR7/4) ~ 灰白色 (10YR8/2)	指ササエ	脚部
320	53	35	3	SK51	瓦質土器	足鉢	—	[9.8]	—	やや粗	灰白色 (2.5YR/2)	指ササエ	脚部
321	53	35	3	SK51	瓦質土器	足鉢	—	[9.4]	—	密	灰白色 (10YR7/1) 黒色 (10Y2/1) ~ 灰白色 (10YR/2)	ハケ目、ハケ目後ナデ 指ササエ	脚部
322	53	35	3	SK51	瓦質土器	足鉢	—	[4.4]	—	やや密	灰白色 (2.5Y7/1)	指ササエ	脚部
323	53	35	3	SK51	瓦質土器	足鉢	—	[5.6]	—	やや粗	灰白色 (2.5YR/1)	指ササエ	脚部

第 15 表 出土土器・陶磁器観察一覧表(9)

No.	国名	地区	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			粘土	焼成	(内)		(内)		備考
						口径 (最大値)	器高 (最大値)	底径 (最大値)			色調 (外)	主な調整 (外)			
324	53	35	3	SK51	瓦質土器	鉢	(20.2)	[3.9]	—	密	良	灰色 (N6/1) 灰白色 (2.5/7/1)	回転ナデ、ハケ目機ナデ 回転ナデ		おろし目覆付5条
325	53	35	3	SK51	土師器	鉢	—	[4.8]	—	やや密	やや良	灰白色 (2.5/8/1~7/1) 灰白色 (2.5/8/1) ~黄灰色 (2.5/8/1)	回転ナデ、ハケ目 回転ナデ		
327	54	36	3	造溝外	瓦質土器	鉢	31.4	[12.8]	—	やや密	やや良	灰白色 (2.5/8/1) 焼灰色 (10YR5/1)	ハケ目 ハケ目、タタキ		外面覆付着
328	54	36	3	造溝外	須恵器	杯 (身)	—	[2.2]	—	密	良	灰色 (N7/1) 灰色 (N6/1)	回転ナデ 回転ナデ		
329	54	36	3	造溝外	陶器	碗	(11.1)	[3.4]	—	密	良	粉土：灰白色 (10YR8/1) 釉：黒色 (N1.5/1) ~暗褐色 (10YR3/4)	回転ナデガキ 回転ナデガキ		内外面施釉、天目柄 (瀬戸美濃)
330	54	36	3	造溝外	土師器	碗	(14.6)	4.8	6.8	密	良	浅黄褐色 (10YR8/3) 浅黄褐色 (10YR8/3)	回転ナデ、ヘラミガキ 回転ナデ		底部回転車切り
332	54	36	3	造溝外	青磁	碗	—	[3.5]	—	密	良	緑釉：灰白色 (N7/1) 釉：灰白色 (10Y6/1~6.5/1)	回転ナデ 回転ナデ		内外面施釉、外面編 蓮華文
333	54	36	3	造溝外	白磁	碗	—	[3.9]	—	密	良	緑釉：灰白色 (N8/1) 釉：灰白色 (7.5/7/1)	回転ナデ 回転ナデ		口縁部玉縁
334	54	36	3	造溝外	白磁	碗	—	[2.4]	—	密	良	緑釉：灰白色 (5Y8/1) 釉：灰白色 (5Y7.5/1)	回転ナデ 回転ナデ		内外面施釉、口縁部 玉縁
335	54	36	3	造溝外	白磁	碗	—	[2.8]	—	密	良	緑釉：灰白色 (2.5/8/1) 釉：灰白色 (2.5/7/1)	回転ナデ 回転ナデ		内外面施釉、口縁部 玉縁
337	55	36	4	SB01	須恵器	杯 (身)	(14.2)	2.0	—	やや密	良	灰白色 (N5/1) 灰白色 (N5/1)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ		天目部~体部上半面 おろし目
338	55	36	4	SK04	土師器	杯	—	[2.2]	08.9	密	良	灰白色 (2.5/8/2) 灰黄色 (2.5/7/2)	ヘラミガキ 回転ナデ後ナデ		
339	55	36	4	SK04	土師器	碗	—	[3.1]	—	密	良	浅黄褐色 (10YR8/3) 浅黄褐色 (10YR8/3)	ヘラミガキ 回転ナデ		
340	55	36	4	SK04	土師器	杯	—	[1.8]	—	密	良	浅黄褐色 (10YR8/3) 浅黄褐色 (10YR8/3)	回転ナデ 回転ナデ		
341	55	36	4	トレンツナ	土師器	甕	(16.2)	[5.8]	—	やや粗	やや良	焼灰色 (10YR6/1) にじみ黄褐色 (10YR6/3)	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、ヘラ状工具ナデ		口縁部内外面に黒 地
342	55	36	4	造溝外	須恵器	杯 (身)	—	[1.8]	—	やや密	やや良	青灰色 (5YR5/1) 青灰色 (5YR5/1)	回転ナデ 回転ナデ		輪状つまみ

第 16 表 出土土器・石製品観察一覧表

No	国名	地区	出土場所	器種	法量 (cm)				重さ(g) [残存値]	石材	備考
					長さ [残存値]	幅 [残存値]	厚さ [残存値]	元径			
32	37	19	1	造溝外	剥片	3.2	1.7	0.5	1.8	黒曜石	横長剥片、彫刻産
68	39	21	3	SB05 (SP308)	バレン状石製品	[5.7]	[4.7]	2.2~2.4	[85.4]	滑石	平面横円形、突起部高さ1.9cm
230	47	29	3	SB01	用達不明滑石製品	4.9	2.2	1.0	20.9	滑石	正裏両面に磨過痕
259	49	31	3	SB20	石鏡	[1.7]	1.2	0.3	[9.6]	黒曜石	凹形、彫刻産
331	54	36	3	造溝外	石鏡	器高 [7.2]	—	1.2~1.5	[163]	滑石	外面ケズリ、内面ケズリ後丁寧なミガキ、外面磨部以下に覆付 着

第 17 表 出土土製品観察一覧表

No.	種別	国名	地区	出土場所	器種	法量 (cm)				重さ (g) [残存値]	粘土	焼成	色調 (内)	(内) 主な調整	備考
						長さ [残存値]	幅 [残存値]	厚さ [残存値]	孔径						
48	38	20	2	SP05	土師	5.1	2.9	0.9	0.9~1.2	[33.4]	やや粗	良	灰黄色 (2.5/7/2) 灰黄色 (2.5/7/2)	指圧整形、ナデ	管状土師
69	39	21	3	SB05 (SP279)	土師	5.0	2.7	0.8	1.0~1.2	29.7	やや粗	良	灰白色 (10YR8/2)	指圧整形、ナデ	管状土師
229	47	29	3	SB01	土師	3.3	1.2	0.4	0.2~0.4	[3.6]	密	良	灰白色 (2.5/7/2) 灰黄色 (2.5/7/2)	指圧整形、ナデ	管状土師
260	49	31	3	SB09	土師	4.6	1.5	0.6	0.3	9.0	やや粗	やや良	黄褐色 (2.5/5/3) 黄褐色 (2.5/5/3)	ナデ	管状土師
286	50	32	3	SP215	土師	[4.0]	[1.8]	0.5	0.7	[10.6]	密	やや良	1.0YR 5/6 (7.5/7/2) 赤褐色	ナデ	管状土師
336	54	36	3	造溝外	輪口	[4.4]	[4.5]	[1.6]	—	[23.8]	粗	良	明褐色 (7.5/7/1) ~ 暗褐色 (7.5/7/1)	— 指圧整形	土曜部に被熱 痕

IV 自然科学分析

1 笛給西寺遺跡出土の獣骨について

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム 沖田 絵麻

はじめに

笛給西寺遺跡は山口県防府市大崎地内に所在する。佐波川下流の右岸に形成された低地に立地する(第56図)。周防一宮である玉祖神社の北400mほどの場所である。

令和5年度の発掘調査により、平安時代後期から鎌倉時代を中心とする集落が確認された。ここでは、3区の遺構から発見された獣骨について調査した結果を報告する。

1. 資料について

資料は、笛給西寺遺跡3区Bの北西部に検出された土坑SK43から出土した骨である(第57図)。発掘担当者により土塊ごと切り取られた状態で搬入された。保存状態は良くなく、確認した時点では骨質はみられず、歯のエナメル質のみが確認できる状態であった。

2. 調査の方法

土を除去するとバラバラになる危険性が高いため、湿らせた筆で露出した歯表面の汚れを除去したのち、樹脂(パラロイドB72をアセトンで溶解させたもの)を数回塗布し、骨を包含する土塊ごと補強した。

土塊から露出した歯について、動物種と部位を同定した。同定には所有する現生動物標本を利用し、人類学ミュージアムが保管する遺跡出土獣骨も参考にした。

3. 調査の結果

動物種については、歯の形態的特徴からウシ(分類名:哺乳綱、鯨偶蹄目、ウシ科。学名: *Bos taurus*)と同定した。

部位は、保存状態が悪いため推測の域を出ないが、左側の上顎臼歯と右側の下顎臼歯の2点が確認できた。土塊中にも上下左右不明の臼歯が埋まっている。だいたい直線上に並ぶことから、顎骨に植立した状態をほぼ保っていると考えられ、上下の臼歯が噛み合った状態で並んでいたとみられる。本来は上下左右の歯すべてが存在した可能性があり、言い換えれば1個体の頭蓋骨が埋まっていた可能性がある。



第56図 遺跡の位置



第57図 SK43 獣骨出土状況(東から)

どの歯も一部分しか残存しないため、計測はおこなえず、サイズは不明である。

性別や年齢も不明であるが、歯冠の高さが比較的低い（＝咬耗が進んでいる）ことから、これらの歯が永久歯であれば比較的年齢の高い成体と考えられる。

右下顎臼歯は、大白歯の頬側面の一部、左上顎臼歯も頬側面の一部とみられることから、このウシ頭部は左側を天に向けた横向きであったと考えられる。

4. 考察

SK43は長軸約1700cm×短軸約90cmの隅丸長方形を呈し、南北に長軸をとる。骨（歯）は土坑の北壁寄り、土坑床面からは10cmほど浮いた位置で検出された。



第58図 ウシ埋納状況想定図

中世のウシは近代以降の外国種の影響を受けない在来牛として知られる口之島牛や見島牛のような小型のウシだったことが知られている。体の長さを示す体長（肩から尾の付け根までの長さ）は、口之島牛が約121cm、見島牛が約131cmである（大塚・並河・野澤1983）。したがって、土坑SK43は、当時のウシ1頭が十分収まる規模であり、臼歯列から想定される頭部が長軸の一端に近い位置から出土したことは、本来はウシ1頭の全身が収められていた可能性を示唆する。酸性が強い土壌環境のもとで骨質が失われた結果、腐食に強い歯のエナメル質しか遺存せず、更にSD16に切られた影響もあり、一部の臼歯列のみが出土したと想定される。

ウシ1頭の全身が収められていたと仮定すれば、第58図のように、頭部は吻側を西、頸側を東に向けた状態で左側を上にして土坑の北に、頸はできるだけ屈曲させ、胴部は左側を上にして東壁に背を合わせ、土坑の南に臀部が位置するように横たえたと推測される。

おわりに

中世のウシは基本的に役畜であるが、皮革や骨細工の素材としての利用は広くおこなわれ、肉が食用とされることもあった。ウシに限らず動物遺存体は、出土状況や残された痕跡から当時の生活や社会を垣間見ることのできる重要な資料である。

笛給西寺遺跡は、旧山陽道や周防一宮の玉祖神社にほど近い場所に位置している。輸入磁器等の遺物の出土状況からは、調査区より山側には寺院や支配階級の屋敷があった可能性が指摘されている。これらのことから、笛給西寺遺跡は地域の重要な集落であった可能性がある。こうした集落には、運搬や農耕に従事する牛馬が飼養されていた可能性が高い。

SK43からはウシが出土したが、臼歯の一部のみであったためウシの墓と断定することもできず、詳細な検討はおこなえなかった。当時のウシは、どのような人々に所有され、どのような作業に従事していたのか、そして死後はどのように扱われたのか、といった当時の家畜利用の実態解明のため、今後の資料増加（ウシの遺存体やウシ飼育に関わる遺物など）が望まれる。



第 59 図 SK43 出土ウシ歯

2 笛給西寺遺跡における放射性炭素年代 (AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

笛給西寺遺跡の測定対象試料は、遺構から採取された炭化材、生材、土壌の合計 7 点である (第 18 表)。試料 4 は、当初炭化材を年代測定することになっていたが、測定可能な量の炭化材が得られなかったため、同じ遺構から採取された土壌を測定することになった。なお、これらのうち試料 4 を除く 6 点の同一試料と、試料 4 と同じ遺構から出土した炭化材細片を対象に樹種同定が実施されている (別稿樹種同定報告参照)。

2 化学処理工程

(1) 炭化材、木材 (生材) の化学処理

- 1) メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。
- 2) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 $1\text{mol}/\ell$ (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、 0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、 1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。
- 3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。
- 4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- 6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(2) 土壌の化学処理

- 1) 土壌中の黒味の強い部分を集め、超純水の中に入れ、超音波で分散させた後、ふるいにかけて根等の混入物を除去する。ふるいを通過した土を乾燥させ、この後の処理に用いる。
- 2) 酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。処理には $1\text{mol}/\ell$ (1M) の塩酸 (HCl) を用い、第 18 表に「HCl」と記載する。

以下、(1) 3) 以降と同じ。

3 測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (第 18 表)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP, 第 18 表) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用し、 $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1 \sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。

(3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正されている (第 18 表)。

(4) 暦年較正年代 (または単に較正年代) とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ($1 \sigma = 68.3\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2 \sigma = 95.4\%$) で表示される。暦年較正年代グラフ (第 60 図) の縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下 1 桁を丸めない ^{14}C 年代値である (第 19 表の「暦年較正用 (yrBP)」。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20 較正曲線 (Reimer et al. 2020) を用い、OxCalv4.4 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正の結果を第 19 表 ($1 \sigma \sim 2 \sigma$ 暦年代範囲) に示す。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。今後、較正曲線やプログラムが更新された場合、「暦年較正用 (yrBP)」の年代値を用いて較正し直すことが可能である。

5 測定結果

測定結果を、第 18 表、第 19 表に示す。

試料 7 点の ^{14}C 年代は、 $7980 \pm 30\text{yrBP}$ (試料 1) から $120 \pm 20\text{yrBP}$ (試料 2) の間にある。暦年較正年代 (1σ) は、最も古い試料 1 が 7036 ~ 6827cal BC の間に 2 つの範囲で示され、縄文時代早期中葉頃に相当 (小林編 2008、小林 2017)、最も新しい試料 2 が 1693 ~ 1919cal AD の間に 5 つの範囲で示され、近世から近代頃に相当する。全体としては大きな年代幅を持つが、古代から中世頃の年代を示すものが比較的多い。なお、試料 2 の較正年代については、記載された値よりも新しい可能性がある点に注意を要する (第 19 表下の警告参照)。

今回測定された試料のうち、土壌の試料 4 を除く 6 点は炭化材と生材で、いずれも樹皮を確認できないことから、次に記す古木効果を考慮する必要がある。

樹木は外側に年輪を形成しながら成長するため、その木が伐採等で死んだ年代を示す試料は最外年輪から得られ、内側の試料は年輪数の分だけ古い年代値を示す (古木効果)。今回測定された試料のうち、炭化材 (試料 1、2、5 ~ 7)、生材 (試料 3) は樹皮が残存せず、本来の最外年輪を確認できないことから、測定された年代値は、その木が死んだ年代よりも古い可能性がある。

試料の炭素含有率を確認すると、炭化材、生材試料 (1 ~ 3、5 ~ 7) はすべて 50%を超える適正

な値である。土壌試料 4 の炭素含有率は 1.0% で、土壌として特に低くない値だが、測定された炭素の由来が明確でない点に注意を要する。

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

小林謙一 2017 縄文時代の実年代 ―土器型式編年と炭素 14 年代―, 同成社

小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション

Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), Radiocarbon 62(4), 725-757

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

第 18 表 放射性炭素年代測定結果(1) ($\delta^{13}\text{C}$ 、 ^{14}C 年代 (Libby Age)、pMC)

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-240069	試料 1	2 区 SK16	炭化材	AAA	-27.68 ± 0.14	7,980 ± 30	37.04 ± 0.14
IAAA-240070	試料 2	3 区 A SD01	炭化材	AAA	-28.07 ± 0.20	120 ± 20	98.51 ± 0.24
IAAA-240071	試料 3	3 区 A SP66	木材 (生材)	AAA	-26.61 ± 0.14	390 ± 20	95.25 ± 0.24
IAAA-240072	試料 4	3 区 B SK43 北部出土	土壌	HCl	-22.76 ± 0.22	1,230 ± 20	85.85 ± 0.24
IAAA-240073	試料 5	3 区 B SK51	炭化材	AAA	-25.39 ± 0.15	400 ± 20	95.16 ± 0.25
IAAA-240074	試料 6	3 区 B SP226	炭化材	AAA	-27.01 ± 0.14	990 ± 20	88.39 ± 0.23
IAAA-240075	試料 7	3 区 B SP305	炭化材	AAA	-29.53 ± 0.15	880 ± 20	89.58 ± 0.24

[IAA 登録番号: #CS73]

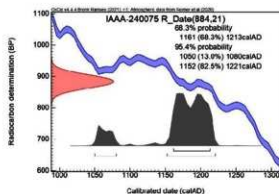
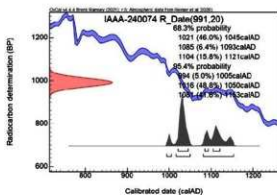
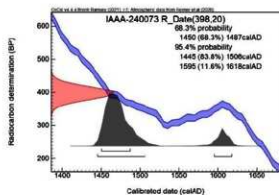
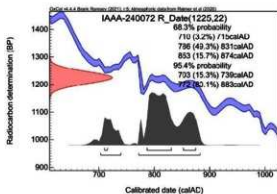
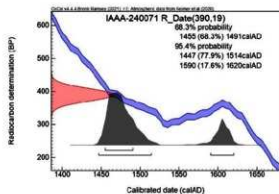
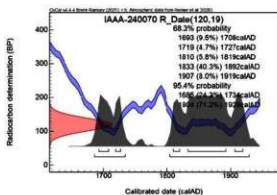
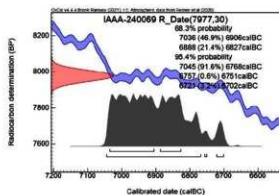
第 19 表 放射性炭素年代測定結果[2] (暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	試料名	暦年較正用 (yrBP)	較正条件	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
IAAA- 240069	試料 1	7,977 $\pm$ 30	OxCal v4.4 IntCal20	7036calBC - 6906calBC (46.9%) 6888calBC - 6827calBC (21.4%)	7045calBC - 6768calBC (91.6%) 6757calBC - 6751calBC (0.6%) 6721calBC - 6702calBC (3.2%)
IAAA- 240070	試料 2	120 $\pm$ 19	OxCal v4.4 IntCal20	1693calAD - 1708calAD (9.5%)* 1719calAD - 1727calAD (4.7%)* 1810calAD - 1819calAD (5.8%)* 1833calAD - 1892calAD (40.3%)* 1907calAD - 1919calAD (8.0%)*	1685calAD - 1734calAD (24.3%)* 1804calAD - 1929calAD (71.2%)*
IAAA- 240071	試料 3	390 $\pm$ 19	OxCal v4.4 IntCal20	1455calAD - 1491calAD (68.3%)	1447calAD - 1514calAD (77.9%) 1590calAD - 1620calAD (17.6%)
IAAA- 240072	試料 4	1,225 $\pm$ 22	OxCal v4.4 IntCal20	710calAD - 715calAD (3.2%) 786calAD - 831calAD (49.3%) 853calAD - 874calAD (15.7%)	703calAD - 739calAD (15.3%) 772calAD - 883calAD (80.1%)
IAAA- 240073	試料 5	398 $\pm$ 20	OxCal v4.4 IntCal20	1450calAD - 1487calAD (68.3%)	1445calAD - 1506calAD (83.8%) 1595calAD - 1618calAD (11.6%)
IAAA- 240074	試料 6	991 $\pm$ 20	OxCal v4.4 IntCal20	1021calAD - 1045calAD (46.0%) 1085calAD - 1093calAD (6.4%) 1104calAD - 1121calAD (15.8%)	994calAD - 1005calAD (5.0%) 1016calAD - 1050calAD (48.8%) 1081calAD - 1153calAD (41.6%)
IAAA- 240075	試料 7	884 $\pm$ 21	OxCal v4.4 IntCal20	1161calAD - 1213calAD (68.3%)	1050calAD - 1080calAD (13.0%) 1152calAD - 1221calAD (82.5%)

*Warning! Date may extend out of range

Warning! Date probably out of range

(この警告は較正プログラム OxCal が発するもので、試料の ^{14}C 年代に対応する較正年代が、当該暦年較正曲線で較正可能な範囲を超える新しい年代となる可能性があることを表す。)



第 60 図 暦年較正年代グラフ

3 笛給西寺遺跡における樹種同定

(株) 加速器分析研究所

1 試料

笛給西寺遺跡の試料は、遺構から出土した炭化材、生材の合計7点である(第20表)。なお、これらのうち試料4を除く6点の同一試料と、試料4が出土した遺構の土壌を対象に放射性炭素年代測定が実施されている(別稿年代測定報告参照)。試料4については、炭化材の保存状態が悪く、可能な範囲で樹種を検討した(この炭化材は年代測定には量が不足するため、土壌を測定した)。

2 分析方法

木材(生材)に関しては、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柾目と同義)、接線断面(板目と同義)の基本三断面の切片を作製し、切片をマウントクイックアクエオス(Mount-Quick"Aqueous": 大道産業)で封入し、プレパラートを作製し、生物顕微鏡(OPTIPHOTO-2: Nikon)によって40~1000倍で観察した。炭化材に関しては、試料を割り折りして新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柾目と同義)、接線断面(板目と同義)の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡(OPTIPHOTO-2: Nikon)によって50~1000倍で観察した。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

3 結果

第20表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を第61図に示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

1) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。

2) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科

年輪のはじめに大型の道管が1~数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の特徴からコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。

3) ヤブツバキ *Camellia japonica* Linn. ツバキ科

小型でやや角張った道管が、単独ないし2~3個複合して散在する散孔材である。道管の径は緩やかに減少する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は8~30本ぐらいである。放射組織は異性放射組織型で、1~3細胞幅であり、直立細胞には大きく膨れているものが存在する。

以上の特徴からヤブツバキに同定される。ヤブツバキは本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、通常高さ5～10m、径20～30cmである。

4) ヒサカキ属 *Eurya* ツバキ科

小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越えて観察される。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性放射組織型で1～3細胞幅であり、多列部と比べて単列部が長い。

以上の特徴からヒサカキ属に同定される。ヒサカキ属にはヒサカキ、ハマヒサカキなどがあり、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で、通常高さ10m、径30cmである。

5) 広葉樹 *broad-leaved tree*

道管と放射組織が存在する。

以上の特徴から広葉樹に同定される。なお本試料は保存状態が悪く、広範囲の観察が困難であることから、広葉樹の同定にとどめる。

第20表 樹種同定結果

試料番号	遺構名等	結果(学名/和名)	取り上げ日	備考
1	2区 SK16	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節	20231017	炭化材
2	3区 A SD01	<i>Camellia japonica</i> Linn. ヤブツバキ	20231206	炭化材
3	3区 A SP66	<i>Eurya</i> ヒサカキ属	20240221	木材(生材)
4	3区 B SK43 北部出土	<i>broad-leaved tree</i> 広葉樹	20210126	炭化材
5	3区 B SK51	<i>Camellia japonica</i> Linn. ヤブツバキ	20240130	炭化材
6	3区 B SP226	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ	20231220	炭化材
7	3区 B SP305	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ	20240130	炭化材

4 考察

同定の結果、笛給西寺遺跡の炭化材、生材は、クリ2点、コナラ属コナラ節1点、ヤブツバキ2点、ヒサカキ属1点、広葉樹1点であった。

クリは3区 B SP226、SP305より出土している。クリは重硬で耐久性が高く、水湿によく耐え保存性の極めて高い材であり、柱材などの建築部材として比較的良好に利用される樹木である。本遺跡でもSPからの出土のため柱材であったと考えられる。コナラ属コナラ節は2区 SK16より出土している。コナラ属コナラ節は強靱で弾力に富み、耐久・耐水性が高く、重硬で強度が高い材である。また、乾燥の際に割れが生じやすく、加工が難しい。一方で燃料材としてコナラ属コナラ節は比重が大きく火力が高いため、薪炭材として最も重宝される材である。本試料は燃料材などに利用した残材を溝へ投棄した可能性がある。ヤブツバキは3区 A SD01、3区 B SK51より出土している。ヤブツバキは強靱で堅硬な良材であるが切削・加工が困難な材であり、耐久性が高いため建築、器具、船、彫刻などに用いられる。また燃料材としては火持ちが良く、灰は強アルカリ性になるため染色などに利用される。本試料は燃料材や器具などの残材の可能性がある。ヒサカキ属は3区 A SP66より出土している。

ヒサカキ属は概して強さ中庸の材で、径が小さいため農具の柄の他に小細工物、器具などに用いられ、柱材としての利用例は極めて少なく、建築部材では垂木などへの利用が散見される。SP からの出土だが柱材の可能性は低く、器具や建築部材であった可能性がある。広葉樹は 3 区 B SK43 より出土している。燃料材としてみると広葉樹は針葉樹材よりも火力と火持ちが良い。

同定された樹種は温帯に分布する樹木であった。クリは暖温帯と冷温帯の中間域では純林を形成することもあり、乾燥した台地や丘陵地を好む。コナラ属コナラ節は陽当たりの良い山野を好み、適潤で肥沃な深層土でよく成長するが、乾燥にも耐え、尾根筋や斜面でも成長する。いずれも二次林としての性格を持ち、人里近くにクリ、ナラ類（コナラ属コナラ節）の落葉性の二次林が分布していたと考えられる。ヤブツバキ、ヒサカキ属は海岸から河川の沿岸に分布するが、二次林内にも生育する樹種である。これらの樹木は遺跡周辺にも生育しており、当時遺跡周辺からか、または流通によってもたらされたと推定される。

文献

- 伊東隆夫（1995）日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ，木材研究・資料第 31 号，京都大学木材研究所・京都大学木質科学研究所，p.81-181.
- 伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学，雄山閣，449p.
- 佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞，木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
- 佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞，木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
- 島地謙・伊東隆夫（1982）図説木材組織，地球社，176p.
- 島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，296p



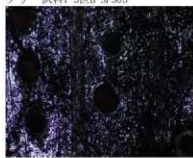
横断面
クリ 試料7 3区B SP305 0.1mm



放射断面 0.1mm



接線断面 0.1mm



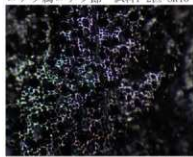
横断面
コナラ属コナラ節 試料1 2区 SK16 0.1mm



放射断面 0.1mm



接線断面 0.1mm



横断面
ヤブツノバキ 試料5 3区B SK51 0.1mm



放射断面 0.1mm



接線断面 0.1mm



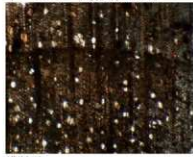
横断面
ヤブツノバキ 試料2 3区A SD01 0.1mm



放射断面 0.1mm



接線断面 0.1mm



横断面
ヒサカキ属 試料3 3区A SP66 0.1mm



放射断面 0.1mm



接線断面 0.1mm

第61図 炭化材、木材(生材)写真

V 総括

笛給西寺遺跡は、防府市大崎の江良地区に位置する。防府平野は、江戸時代に干拓によって海岸線が大きく改変されたが、それ以前の佐波川の河口は、旧山陽道が佐波川を渡る大崎にあった。古代の駅家があったとされるこの地域は、海を臨む水陸交通の要衝であったといえる。

今回調査した地点は、西側の山地から佐波川に向かって流下する自然流路の間にある微高地上である。調査した1区から4区のうち、1区の南西部から4区にかけては、奈良時代後半から平安時代初頭の遺構を発見し、2区と3区では平安時代後期から室町時代前期の遺構を発見した。

1 奈良時代後半から平安時代初頭

1区の南西部から4区の北東部にかけて、この時代の遺構が集まっている範囲があった。出土した遺物は須恵器が大部分を占め、1区のSD01では、獣脚が1点出土している。比較的長く滑らかな形状で、先端部が簡略化されている。接合部に体部の内面が残っており、体部の形状から、三足壺、骨蔵器、火舎などの器種であったと考えられる。また、先端部の接地面に貫通の円孔がある。

獣脚については、防府市内では周防国府跡で2点、末田2号窯で1点出土している。残存する長さは、周防国府跡の136次調査では6.0cm、2002-1次調査では3.5cmで先端部のみ、末田2号窯では7.2cmである。いずれも短く、先端部の形状が異なる。また、北九州市の片野遺跡、香川県の讃岐国府跡でも獣脚が出土しているが、どちらも笛給西寺遺跡のような滑らかで長い形状ではない。長さや接合部については、東京国立博物館所蔵の獣脚付骨蔵器（川崎市宮前区有馬出土）が類似しているが、先端部の形状は異なる。今回出土した獣脚を持つ器種は、独特な形状といえる。また、獣脚を持つ器種の出土は、官衙や寺院等の存在が考えられるが、ほかにそれらとの関連を示す遺物、遺構は、今回の調査範囲では検出できなかった。これらの遺構が存在するとすれば、1区・4区の南側に位置する山際の微高地が考えられる。

4区で発見された井戸1基（SE01）と1区で発見された竪穴建物1棟（SI01）からは須恵器の杯身が出土した。これらの須恵器は、奈良時代後半から平安時代初頭と考えられる。これらの遺構・遺物から1区・4区は、この時代の集落の東端にあたるものと考えられる。

2 平安時代後半から室町時代前期

今回の調査で出土した遺物の大半は、3区で出土した。さらに、3区の出土遺物の多くは、SD01から出土している。その出土状況は、祭祀等を想起させるものではなく、流れ込んで堆積した状況である。SD01は3区の東辺を南北に貫いているが、これは現在の用水路と並行している。この用水路は、江戸の終わりに集成された『防長風土注進案』の「大崎村荒圖」に描かれている水路とほぼ同じ位置にあるので、SD01は、この絵図に描かれている水路と考えられる。SD01から出土した炭化材の年代測定の結果は、 120 ± 20 yrBPで江戸時代後期の文化・文政・天保年間となるが、SD01の下層の埋土から出土した遺物は、平安時代後期から室町時代前期にあたる。年代測定対象の炭化材は、江戸期に流入したものであろう。絵図の水路は、現在と同じく須川の支流で取水しているが、このような灌漑が整備される以前にも、江良堤（第2図）から取水する溝があったと考えられる。

3区では5棟の掘立柱建物を確認した。棟方向はSB04とSB05はほぼ同じであるが、SB01、

SB02、SB03はこれらとそれぞれ40°、10°、90°の違いがある建物である。SB01、SB03は時期の決め手に欠けるが、SB02、SB04は出土遺物から平安時代後半から鎌倉時代とみられる。なお、SB02を構成するSP226から出土した炭化材の年代測定では、990 ± 20yrBPという結果を示しており、今後の検討が必要であろう。SB05は鎌倉時代後期とみられ、SB04を建て替えた可能性がある。また、SB02、SB04、SB05には並行する溝がある。それぞれ、南辺、北辺、東辺と位置が違うが、排水などのための付帯施設と考えられる。SB02に並行するSD15は、SB03の構成柱穴であるSP240を切っているので、SB02はSB03より後に建てられた可能性がある。

SB02の南西にあるSK43からは、牛の歯と木片が出土した。木片の年代測定を行ったが、測定可能な量ではなかったため、付着していた土壌を分析した。その結果1230 ± 20yrBPとなったが、これは奈良時代前半を示す。しかし、SK43から出土した遺物は鎌倉時代を示すものである。歯の出土状況からSK43が牛の墓坑である可能性があり、鎌倉時代には牛耕が一般的になったことを考えると、人と牛の関わりを考える一つの資料とみられる。

SB05を構成するSP308から、滑石製バレン状石製品が出土した。石鍋の補修具とされ、県内では、鍛冶屋敷遺跡、柳瀬遺跡、河原田遺跡（以上下関市）、下津令遺跡（防府市）で出土している。いずれも突起部には穿孔があるが、今回発見したものには穿孔がない。穿孔は石鍋本体に固定するためのものだが、固定の必要のない石鍋の底部を補修するためのものであったと考えられる。

3 その他の時代

今回の調査では、姫島産黒曜石の剥片を1区遺構外で、石鏃を3区SD20で発見した。また、4区トレンチBから古墳時代後期の土師器の甕が出土した。これらの時期の遺構、遺物はほかに検出されていない。江良地区の低地には古墳時代以前の遺跡は知られていないが、周辺の丘陵には古墳群や散布地が発見されており、今回の調査範囲の周辺にも、遺跡が埋存している可能性がある。

参考文献

防府市教育委員会 2004『防府市埋蔵文化財調査概要 0401 平成 14 年度防府市内遺跡発掘調査概要』

防府市教育委員会 2021『周防国府跡発掘調査報告 10 一宗地区・朱徳院地区の調査』

防府市教育委員会 1978『防府市文化財調査年報 1』

財団法人北九州教育文化事業団埋蔵文化財調査室 2000『片野遺跡』

香川県教育委員会 2021『讃岐国府 3』

小林善也 2009『河原田遺跡出土の滑石製石鍋・砥石について』『土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要』第4号 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

松尾秀昭 2007『石鍋の補修具とは—バレン状石製品—』『西海考古』第7号 西海考古同人会

(財)山口県教育財団・山口県教育委員会 1995『土居ノ内遺跡・鍛冶屋敷遺跡』山口県埋蔵文化財報告第177集

日本道路公団広島建設局山口工事事務所・山口県教育委員会 1996『柳瀬遺跡・奇兵隊陣跡』山口県埋蔵文化財報告第179集

(公財)山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター・防府市教育委員会 2015『下津令遺跡 2』山口県埋蔵文化財センター調査報告第90集

圖 版



1 遠景①（佐波川河口方面から）



2 遠景②（南から）



1 遠景③ (佐波川左岸から)



2 遠景④ (東から)



1 遠景⑤ (北から)



2 調査区全景 (右が北)

図版 4



1 1区全景 (右が北)



2 1区 SI01 完掘状況 (東から)



3 1区 SK04 完掘状況 (東から)



4 1区 SK06 完掘状況 (南から)



5 1区 SP15 完掘状況 (東から)



1 1区西壁南侧土层断面



2 1区西壁北侧土层断面



3 1区东壁南侧土层断面



4 1区东壁北侧土层断面

図版 6



1 2区全景（右が北）



2 2区北壁土層断面



3 2区東壁南側土層断面



4 2区 SK16（北から）



5 2区 SK07 集石出土状況（東から）



1 3区全景（右が北）



2 3区近景（南から）

図版 8



1 3区A西壁土層断面



2 3区A北壁東側土層断面



3 3区A北壁西側土層断面

1 3区B西壁南侧土层断面



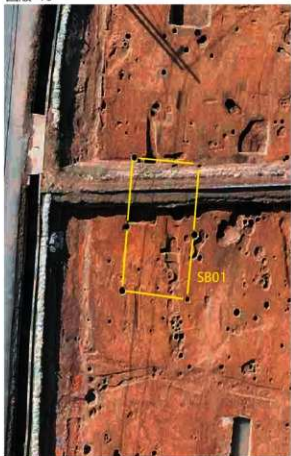
2 3区B西壁中央土层断面



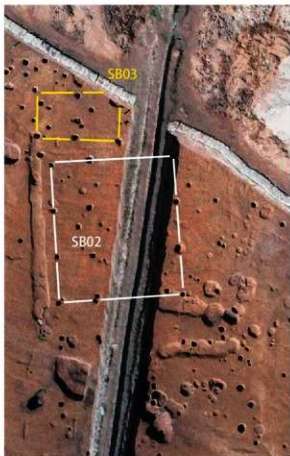
3 3区B西壁北侧土层断面



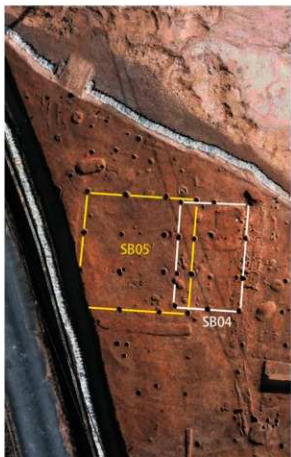
図版 10



1 3区 SB01 完掘状況 (下が北)



2 3区 SB02・SB03 完掘状況 (右が北)



3 3区 SB04・SB05 完掘状況 (右が北)



4 3区 SA01・SA02 完掘状況 (左が北)

1 3区SD01土層断面



2 3区SK29集石出土状況
(南から)



3 3区SK29完掘状況
(南から)





1 3区 SK41 遺物出土状況①
(南から)



2 3区 SK41 遺物出土状況②
(南から)



3 3区 SK41 遺物出土状況③
(東から)

1 3区 SK43 遺物出土状況
(北から)



2 3区 SK43 完掘状況
(東から)



3 3区 SK49 遺物出土状況
(南から)





1 3区 SK50 遺物出土状況
(東から)



2 3区 SK51 遺物出土状況
(西から)



3 3区 SP52 遺物出土状況
(南から)



1 3区 SP41 遺物出土状況（北から）



2 3区 SP58 遺物出土状況（北から）



3 3区 SP82 遺物出土状況（北から）



4 3区 SP107 遺物出土状況（南から）



5 3区 SP245 遺物出土状況（南から）



6 3区 SK281 遺物出土状況（東から）



7 3区 SP285 遺物出土状況（南から）



8 3区 SP290 遺物出土状況（東から）



1 4区全景 (右が北)



2 4区西壁トレンチD 南側土層断面



3 4区西壁トレンチD 北側土層断面



4 4区東壁トレンチC土層断面



5 4区北壁西側土層断面



1 4区東壁トレンチB土層断面



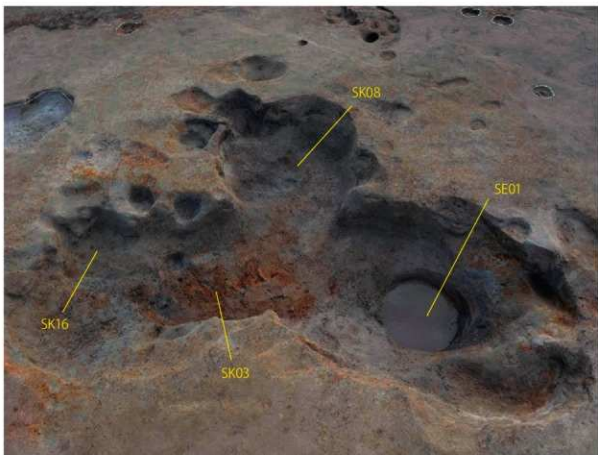
2 4区東壁トレンチB・C土層断面



3 4区東壁トレンチE南側土層断面



4 4区トレンチE-2土層断面

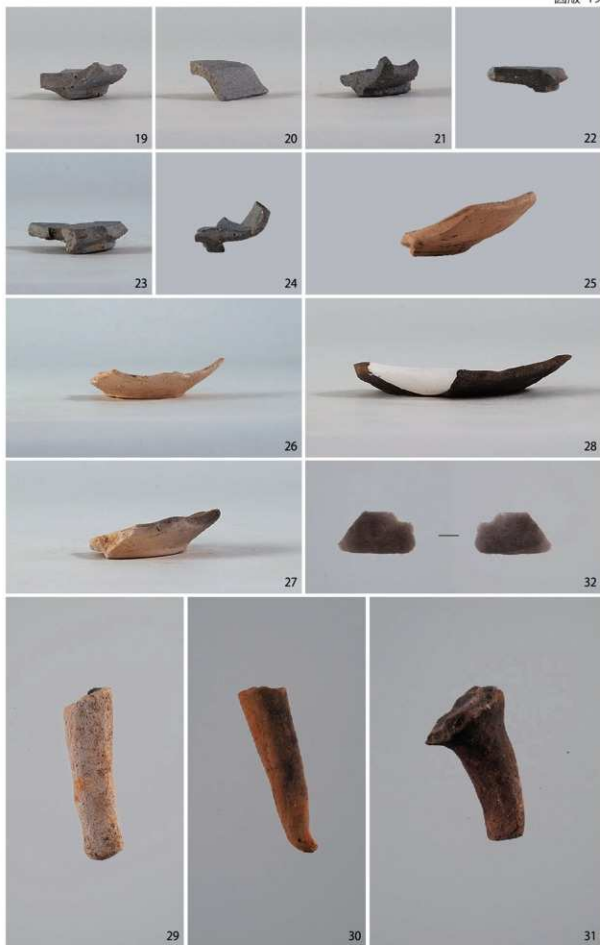


5 4区井戸・土坑完掘状況(SE01、SK03・08・16) (北から)

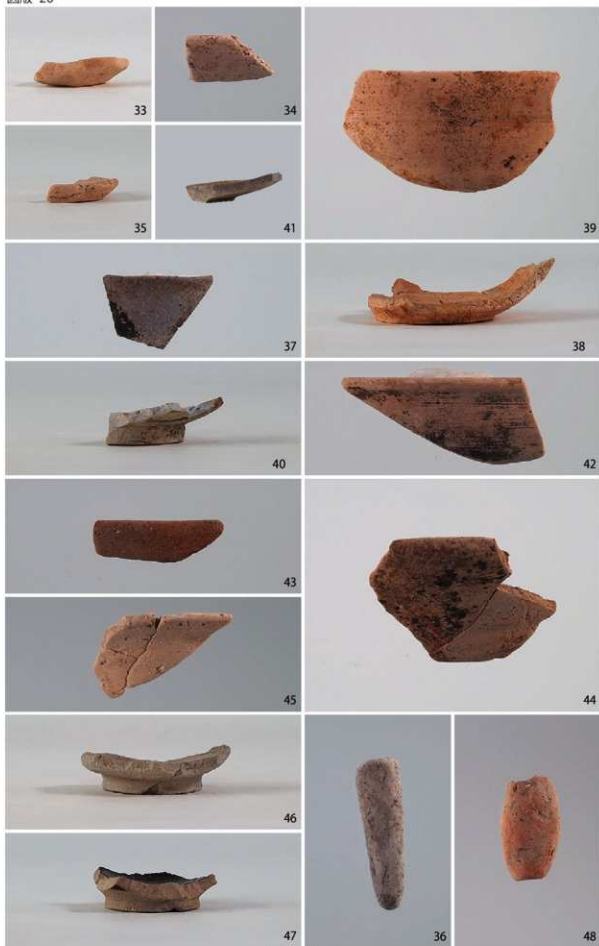
图版 18



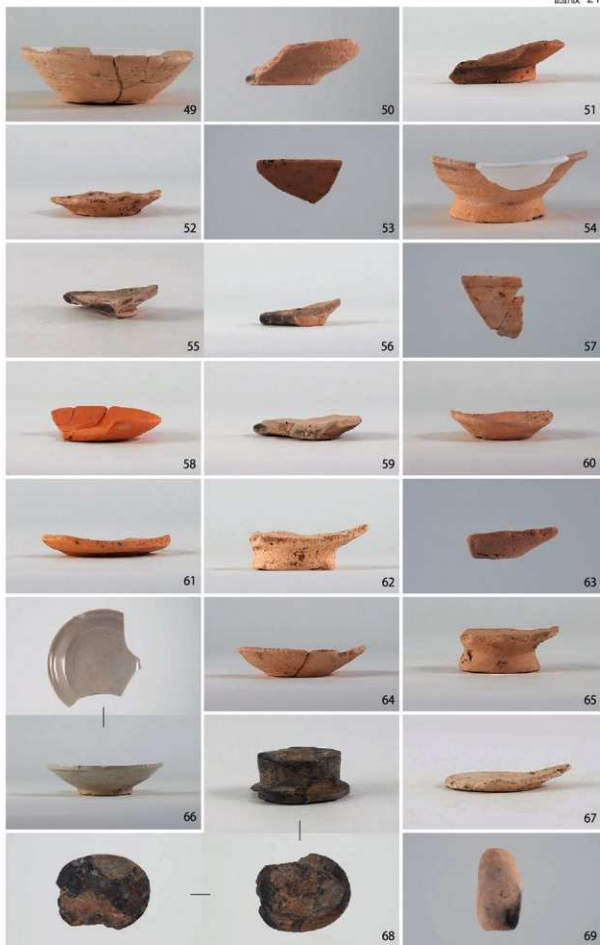
1 区出土遺物 (1)



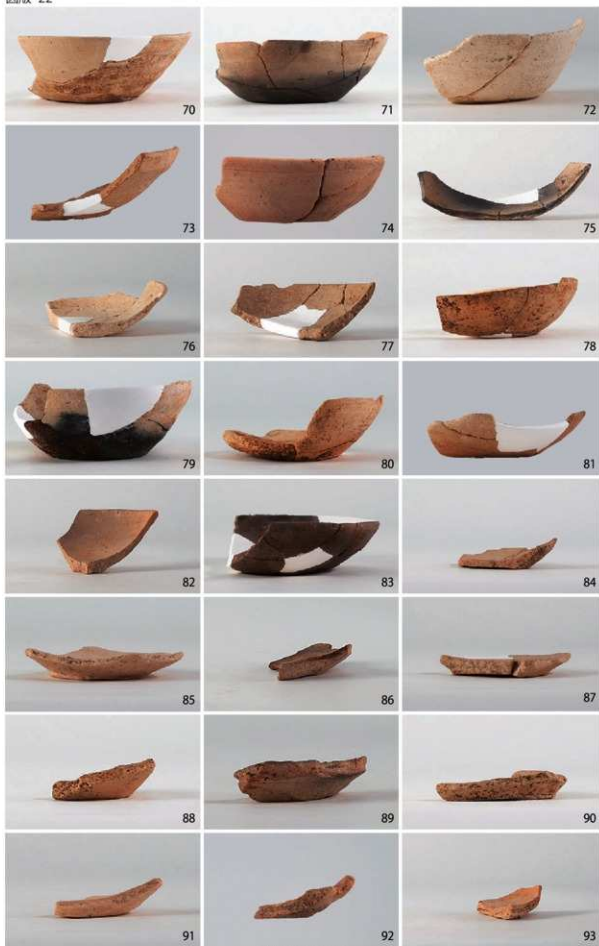
图版 20



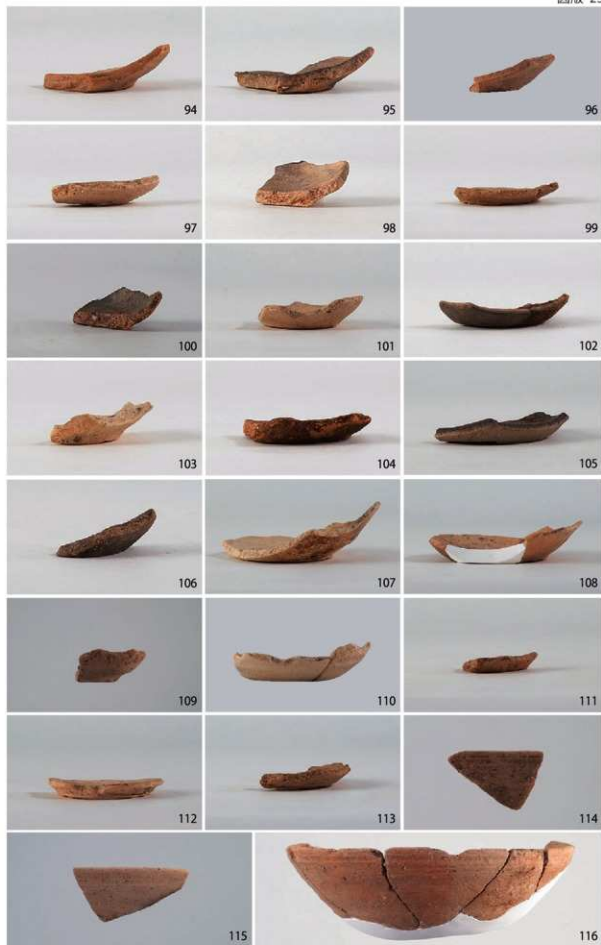
2 区出土遺物



3区出土遺物(1)

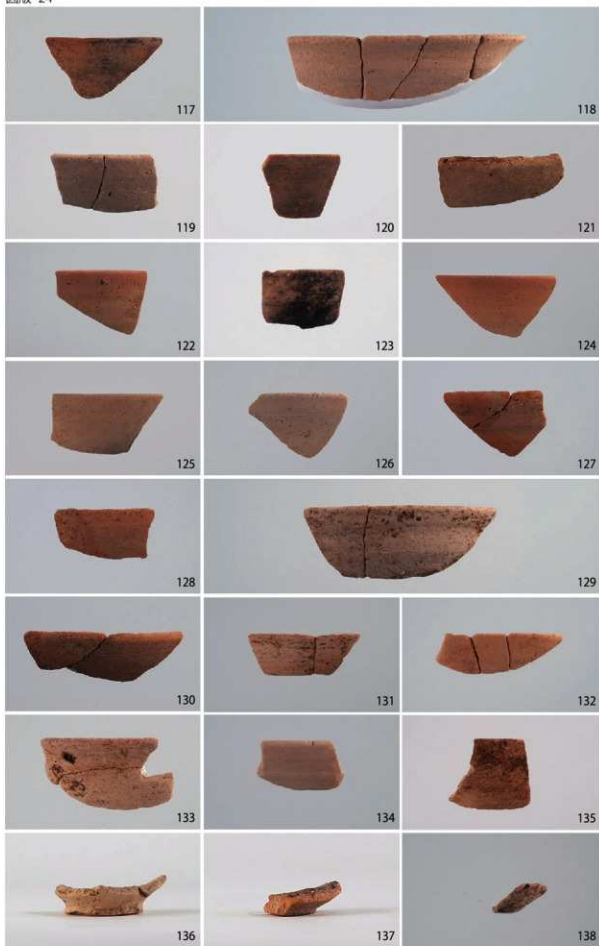


3区出土遺物(2)

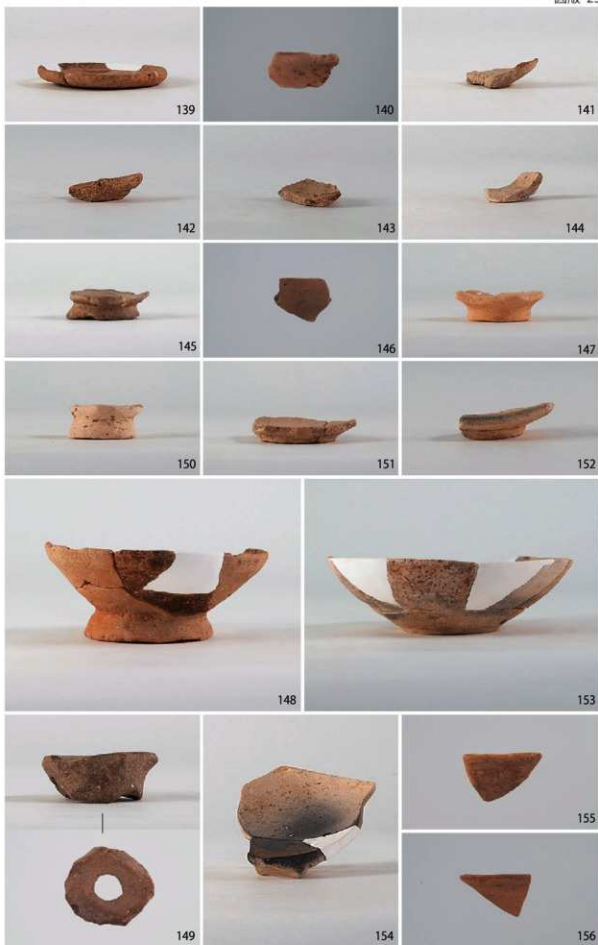


3区出土遺物(3)

图版 24

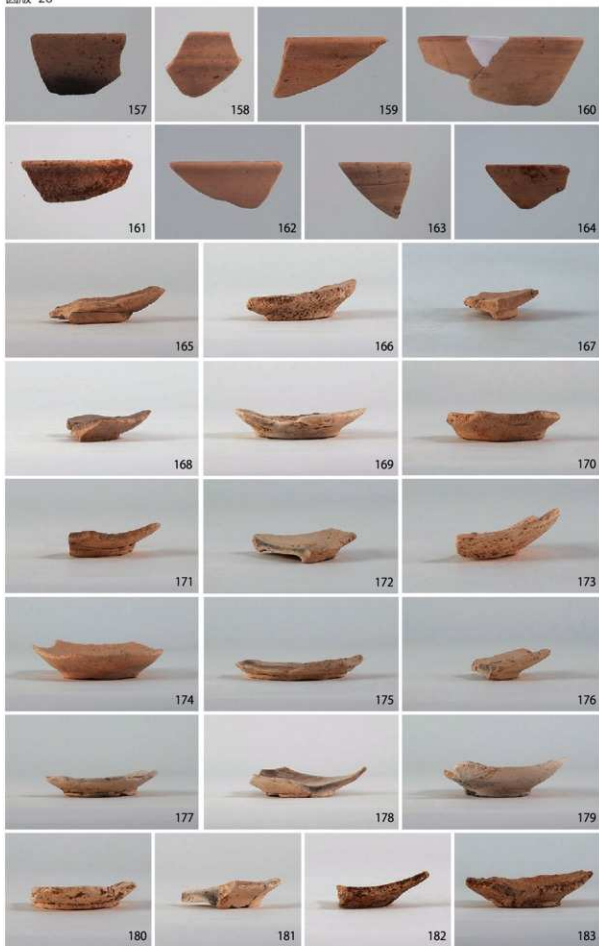


3区出土遺物(4)

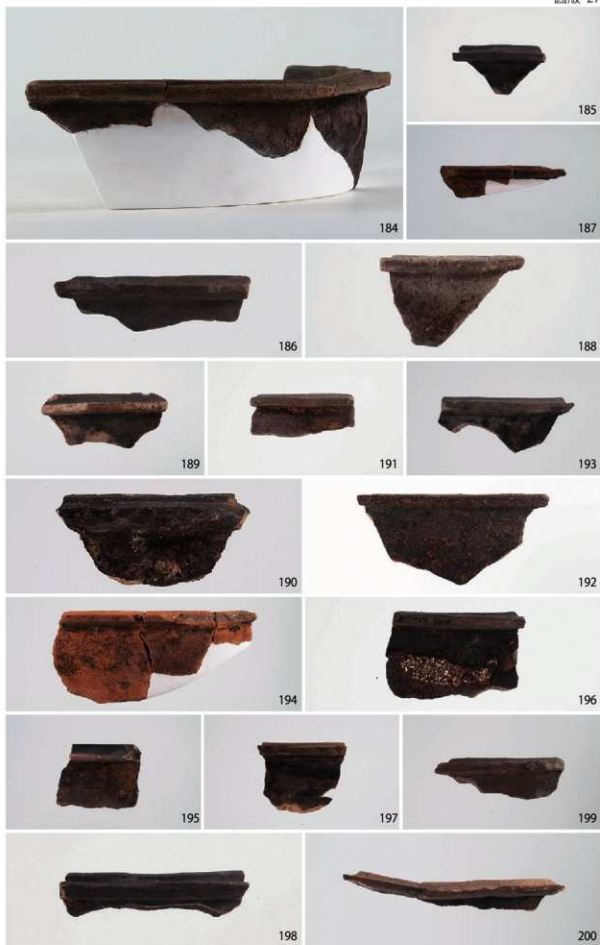


3 区出土遺物 (5)

图版 26



3区出土遗物(6)



3区出土遺物 (7)

图版 28

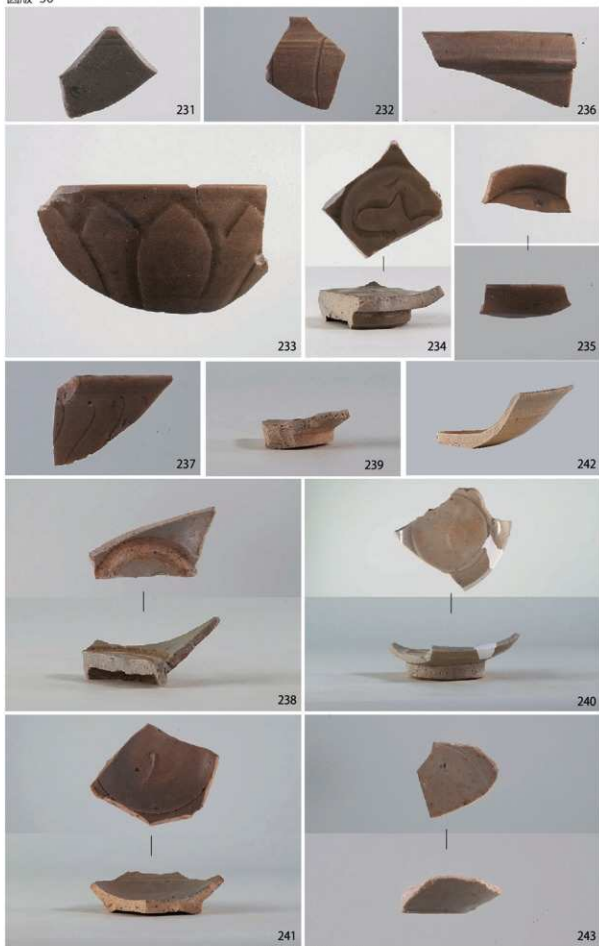


3区出土遺物(8)

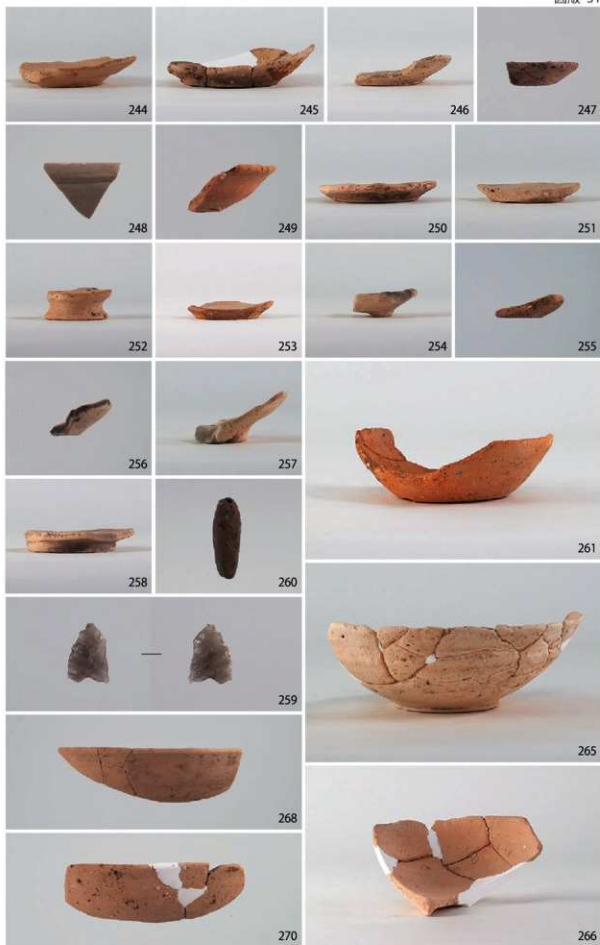


3 区出土遺物(9)

图版 30



3区出土遺物(10)



3区出土遺物 (11)

图版 32

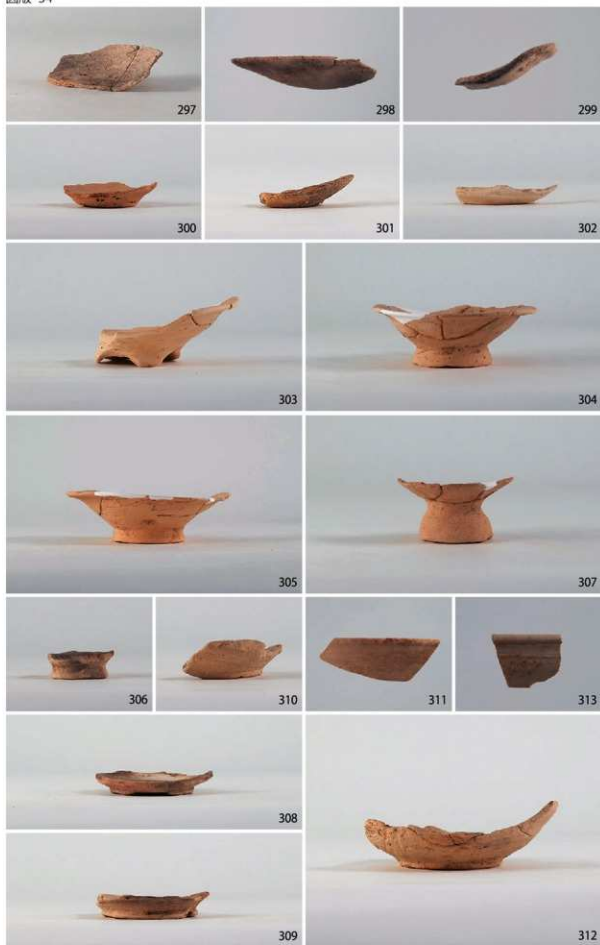


3区出土遺物(12)



3区出土遺物 (13)

图版 34





3区出土遺物 (15)

图版 36



3 区出土遺物 (16)



4 区出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ふえきゆうにしでらいせき
書名	笛給西寺遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第117集
編集著者名	鈴木卓
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒 753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL 083-923-1060
発行年月日	西暦2025年3月31日（令和7年3月31日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふえきゆうにしでらいせき 笛給西寺遺跡	やまぐちけん 山口県 ふたつし 防府市 おおきき 大崎	35206		34° 06' 28"	131° 53' 45"	20230906 } 20240301	2,872	県道整備

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ふえきゆうにしでらいせき 笛給西寺遺跡	集落跡	平安時代後期 ～鎌倉時代	掘立柱建物 5棟 竪穴建物 1棟 土坑 121基 溝 57条 柱穴 約990個	土師器 須恵器 瓦質土器 輸入陶磁器 石製品 土製品 等	現在の用水路に並行する 中世の溝から、多くの土 師器、瓦質土器、輸入磁 器が出土した。石製品に は、石鍋の口縁部やバレン 状石製品がある。

要約	笛給西寺遺跡は、霞山から佐波川方面に流下する小河川の間に展開する微高地上に営まれた平安時代後期から鎌倉時代を中心とする集落跡である。 1区、4区では、奈良時代末頃とみられる須恵器片が出土した溝や井戸などもあり、このうち1区の溝からは、獣脚1点が出土した。調査区内には、同時代の建物跡は検出されなかったが、付近に保有者層を裏付ける集落、施設などの存在が考えられる。3区では、5棟の掘立柱建物、現在の用水路に並行する溝などを発見した。この溝では、多量の土師器、瓦質土器とともに輸入磁器も多く出土した。このことから、この区域には地域の有力者の屋敷、あるいは寺院などがあったことが考えられる。また、3区では、牛の歯が出土した墓とみられる土坑や2条の柱穴列とそれに並行する溝を検出した。
----	--

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第117集

笛給西寺遺跡

2025年3月31日

編集・発行 公益財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号

印刷 アロー印刷株式会社
〒751-0818 山口県下関市鉦新町10-3